
The Angel Fell Ground

彩夜仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Angel Fell Ground

【Nコード】

N0435A

【作者名】

彩夜仁

【あらすじ】

ある日、天界に住む一人の天使の少女が地上の男の子に恋をしました。彼女は彼に会うために地上に降りる事を決意します。果たして彼女は彼に会うことが出来るのでしょうか？

[P r o l o g u e]

++++?++++

光。

総てを包み込む光。

闇を照らす

眩いばかりの光。

しかし、彼女が見たものはそれだけであった。

彼女は光の中にいた。

そこで彼女はやがて来る覚醒の刻を静かに待っていた・・・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

ふわり、と暖かい風が吹く。

風の妖精達に頬を撫でられ、プラチナブロンドの髪が揺れる。

今彼女は眠っていた。

椅子に座ったままアンティーク調の机に身を預け、自分の腕を枕にし、彼女は・・・眠っていた。

しかしそんな不安定な体勢であるにも関わらず、彼女の顔立ちと顔は全く崩れることなく保たれていた。

白磁のような肌。

ひっそりと閉じられた瞼。

薄桃色に染まった唇。

その一つ一つが完璧なまでの美しさを彼女に授けていた。

しかし彼女はそんな事をまるで知らぬかのように綺麗なる寝顔で夢の中へと思いを馳せる。

辺りには柱時計が時を刻む音が静かに響いている。

机の上には読みかけの本が一冊。

ページのあちらこちらに染みができており、ブックカバーもぼろぼろになっている。

かなり古い本だ。

ページは丁度中程が開かれたままである。

窓からは再び風の妖精達が遊び場を求め、彼女の部屋へ入ってくる。

無邪気に本のページをめくったり、彼女の髪をふわりとたなびかせ

たりする。

それが何度か繰り返された後、彼女はゆっくりと目を開いた。彼女はそのままじっと目の前の自分の腕を見ていた。

やがて思い出したように傍らに置かれていた柱時計に目をやる。

「あら・・・寝てしまった・・・みたい」

彼女はぽつりとそれだけを言った。

青空のように澄みきったソプラノだった。

机に置いてあった本を手に取り、ぱらぱらとめくる彼女。

「はぁ・・・明日までに全て読まなければいけないのに・・・どうしましょう・・・」

白金の髪の毛の奥に隠れた眉をしょげたように曲げると、つられて瑠璃の瞳が少しだけ曇った。

勿論、そんな些細な変化では彼女の容姿の美しさは濁るわけでもないのだが。

「ん・・・しょうがない・・・ですね」

彼女は思い切りのびをすると、ふわりと立ち上がった。

立ち上がる動作になぜ『ふわり』等と言う擬音が付くのか？

彼女は本当に『ふわり』と立ち上がったのだ。

いや立ち上がったという表現は正確に言うと正しくないのかもしれない。

何故なら彼女は宙に浮いていたのだ。

自身の羽根を使つて。

しかしそれは忙しく羽ばたいて浮遊しているという感じではなく、何か我々のイメージする『羽根を用いてする飛行』とは違う、とても優雅なものであつた。

この部屋には出入り口と呼べるものはなかった。

あるのは先程風の妖精達が出入りしていた小窓だけだつた。

彼女は窓辺の傍に音もなく降り立つ。

身体を縮こませるようにして窓辺の縁に足を掛ける。

折り畳んだ窓を収納するために幾分か広くなっている余地が窓枠にはあつた。

彼女はそこに片膝を立てて座り、腕を十字に交差させて身体の前に置いた。

その辺りに触れそうなくらいに首を垂れていく。

背中を丸め、翼を広げる。

そして彼女はその体勢まま、崩れるように落ちた。

いや、落ちるかに見えた。

しかし実際はそんな事はなく、彼女の身体は揚力と不思議な力により押し上げられていた。

彼女の眼前には空は海との境目もなく、ただ“青”だけが広がっていた…

＋＋＋？＋＋＋

天国は何処にある？

そう人間に問えば、皆口々にこう言うだろう。
空の上にある、と。

その答えは半分正しく半分間違いと言えるかもしれない。

人間達が死して還る場所。

そして神の御使いなる「天使」が住む場所。

それらは全て“天界”と呼ばれる場所である。

だがそこは人間達が想像しているような、
アルカディア
悲しみや苦しみのない理想郷ではなかった…

…彼女はまだ天使になっていなかった。
言い換えれば天使の見習いといった所か。

そして先程から彼女を『彼女』としか呼ばないのは理由がある。

正式に天使と認められなければ『天名』が貰えないのだ。

『天名』とは天使が神から授けられる唯一にして絶対の名前の事だ。
だから彼女にはまだ名前がない。

そして今、彼女は『天名』を与えられるための最後の試練を受けていた。

試練は二つ。

一つは終末の黙示録、「預言書」を三日の内に読み、理解すること。

そしてもう一つ。それは神の御前に進み出てから与えられるらしい。

とにかく彼女は今一つ目の試練に挑んでいるのだった。

しかし先程述べたように彼女は「預言書」を読んでいるうちにすっかり眠ってしまった。

期限はあと一日。

彼女は焦っていた。

そこで彼女は天界にある唯一つの図書館に向かっていた。

“古代図書館”と呼ばれるその建物は、

『天界の起源から現在に至る歴史』という途方もない内容を記した書物を所蔵している。

無論一冊にまとまるはずはなく、蔵書数は天文学的数字になるのは明らかだった。

一体誰がその膨大な数の書物達を読み解くのか？

その答えは正直な所分かっていない。

一説には読むための書物ではなく、伝えるための“歴史”だといわれている。

しかしその読むという目的さえ否定された知識の調べ達に一人格闘する人物がいた。

その人物こそが、

図書館の司書・メルキエル「フライシュバイツ」(Merkeel「Fräischvaitz」)だった…

+++++

「…ん？」

メルキエルはふと誰かの気配を感じて、読みふけていた『天界の歴史第48章・蘇生編』から顔を上げた。この地下にある閲覧室には滅多に人は来ない。

それはこんな所に用はないというのが主な理由だ。

しかし他の幾分かは物心ついた時から、

ここの本達を読みあさっているメルキエルを変人扱いして近付かない…といった所だ。

メルキエルは紫色の髪を揺らしながら辺りを見回す。

「誰だ？そこにいるのは…」

閲覧室には溢れんばかりの本の山が散乱していたが、メルキエルはその中の一つに向かつて喋りかけた。

「あ…すみません、読書の邪魔をしてしまいましたか？」

本の山の影から彼女がおずおずと現れた。

「シイか…何の用だ？」

メルキエルはぶっきらぼうにそれだけ言うと言に戻った。

『シイ』と言うのは彼女の呼び名のことである。

名前がないと何か不都合があるということで、便宜上の名前だ。

あくまで便宜上であって特に深い意味はない。

それにシイの場合はメルキエルが勝手につけたものなので、彼の趣味も入っている。

この二人の関係はあとで述べるとして、

今は何故シイがメルキエルに会いに来たかを説明せねばなるまい。

「あの…メルキエルさんも“試練”を受けたんですよね？」

「…そうでなければ此処で司書などやってはいない」

メルキエルは背中を向けたまま答える。

無愛想。

彼を一言で形容するならばそんな言葉が相応しい。

しかしこれが彼流の会話の仕方だとシイは知っている。

「預言書は…読みましたよね？」

「…同じ事を何度も言わせるな」

メルキエルは背中から怒気を発しながら言う。

シイは思い切って質問を変えてみることにした。

下手に遠回しに話をふると、こんな風につっけんどんな物言いをされる事がしばしばある。

彼女はその事を忘れていた。

「預言書を読むにあたって何か…いい方法はないですか？とつても難しくて…」

メルキエルは振り返ってシイの方を見る。

「…知りたいか？」

銀縁眼鏡の奥に光る紫の瞳が彼女を捉えた。

「…は、はい」

シイはたじろぎつつも答える。

「読め」

「…え？」

「とにかく心を無にして読め。俺は本を読む時いつもそうしている」
言葉が出なかった。

彼が自分の事を話すのを初めてシイは聞いた…

そんなシイの驚きを知らずメルキエルは続ける。

「…そうすると本に書かれている内容がそのまま頭の中に書き込まれいく。」

「…それからが重要だ。その内容を自分なりに噛み砕き、解釈しなければならぬ。それに…」

メルキエルの講義はその後止まることはなかった…

+++++

「…そもそも書物を読むという事はだな？」

先人の知識を文字を通して授かるという事であって、とても崇高な

…」

自分の得意な分野となるとメルキエルはいつもこうだ。

まるで水をえた魚のように切々と語り出す。

そこでシイはそんなメルキエルの姿をこっそり覗き見た。

紫色の髪はしっかりと整えられており、賢そうな銀縁眼鏡の中には髪と同色の瞳があつた。

服装はフード付きの厚手のローブ。

端正な顔立ちの彼は何を着ても似合う。

けれどそれがかえって彼の服装への無頓着さを加速させる羽目となっている。

ふとメルキエルはシイの視線に気付き、講義を中断する。

「…何だ？何を見ている？」

「い…いえ、メルキエルさん…綺麗だなあと思って…」

「…………俺は男だぞ」

メルキエルは呆れたように肩をすくめ、おもむろに閲覧室の椅子から立ち上がる。

「…あつ！す、すみません！そういうつもりで言っただんじゃなかったんです…」

「…………どうでも良いが“預言書”を読む自信はついたのか？」

言いながらメルキエルはめばしい本を幾つか脇に抱え、

地上へと続く吹き抜けに向かう。

地下であっても無論出入り口や階段の類はない。

上の階に昇るには自らの羽根を使い、吹き抜けを通して飛び上がるという寸法だ。

「はっ…はい！さっきメルキエルさんに言われた事を守ってもう一度読んでみます！」

どうも、御教授ありがとうございますっ！」

シイはメルキエルの前にかしこまったように直立すると、勢いよくお辞儀をした。

風圧につられ、彼女のプラチナの髪はふわっと翻った。

その様子を見てメルキエルはやれやれつと溜め息をついた。

純真無垢。

彼女を一言で表現する言葉が仮にあるとすれば、これが最も近いと思われる。

『天名』を与えられていないという事から容易に想像できるだろうが、

外見的にはまだあどけなさが残っている。

人間の年齢に換算すると14〜15歳くらいか。

と言っても天使と人間との交流は太古の昔から絶たれているので、この数字はあくまで彼が年齢的指標として提示したに過ぎない。

生まれ持つて出た形質として白金の髪に瑠璃色の瞳というのがあるが、

これは彼女の美しさの引き立てるパーツというだけで、

彼女の内から滲出る本質的な美を示唆したものではない。

彼女の本当の美しさ。思うにそれは、内面からの物が強いと言える。

先程、彼女を形容するのに純真無垢なる言葉を用いたが、

それこそが本質なのではないか？

まだ人を疑うことさえ知らぬ、真っ白い雪のような澄んだ心。

きつと彼女を見る男達はそこに魅せられるのだろう。

無論、外見の美しさも多分に比重を占めているという事実も否定できない訳だが。

……メルキエルはそんな風に目の前に立つ彼女を分析していた。

……自分をじっと見つめながら何やら考え込んでいるメルキエルにシイは恐る恐る話し掛けた。

「あ、あの…私の顔に…何かついてますか？」

メルキエルははっと我に還り、急いで彼女から目を逸らした。

「いつ…いや何でもないっ…それより期限は明日なのだろうっ？」

さっさと取り掛かった方がよいぞ…それでは俺は失礼する」

外への直通路を飛びながらメルキエルは自分の難解な思考に苦笑していた。

『天名』も与えられていない幼天使に自分は何を夢中になっているのだ？

至高の域にまで高められた自分の英知はあんな幼天使と戯れるために存在しているのではない！

そう自らに何度も言い聞かせてきた。

しかし自分の箒っている閲覧室に彼女が来る度、

自分の心に和やかな風が吹き抜けるのをメルキエルは感じていた。

…昔は自分には本を読む事しかない。

そう思っていた。

誰からも相手にされず、自ら誰もやりたがらない“古代図書館の司書”という役に志願したのも、他の天使達と関わりたくないというのが最大の理由だった。

読むことという目的すら否定された書物達。

メルキエルはいつしか自分を書物達と重ねて見ていた。

…誰からも相手にされない存在…

…そうして、ずっと彼の友は書物達だけだった。

しかしある時、彼女が現れたのだ。

彼女はたまたま通りかかっただけで、ここが古代図書館ということさえ知らなかった。

歩き回っていたらいつの間にか地下閲覧室に来てしまった、と語った。

偶然だった。

彼女はすぐにメルキエルに興味を持ち、

「ずっとここにいるんですか？」

「今まで何冊本を読みましたか？」

等と質問をしてきた。

最初メルキエルは「読書の邪魔だ」の一点張りで答えようとはしなかった。

しかし彼はふと気付いたのだ。

今まで自分のしている事に興味を持ってくれた者がいただろうか？

…と。

それからだった。

彼女の質問にメルキエルは真剣に答えるようになったのは。

自分は勘違いしていたのだ。

本を読み、そして得た知識は人に伝えなければ意味がないという事を…

+++++

…ここで混乱しないように天界の社会構造について話しておこう。

地上よりも遥かな高みにある天空の大陸・天界。

その正確な位置は人間の力では知覚できない。

いやそもそもそれ自体人間の中ではただ絵空事となっていおり、

風化した神話にその姿を定着させている。

それは確かに存在しているにもかかわらず、

人間達は自分の理知の及ばない範囲には“非現実的”というレッテルを張り、

記憶の中に埋没させてしまう。

人間とはつくづく愚かな生き物だ。

そんなどうしようもない人間達を見下ろし、

その愚かしい歴史をずっと見続けていた種族がいる。

それこそが『天使』

神の御使いとなるために天界に生を受けた神聖なる者。

その出生は神によってもたらされる。

つまり人間のような淫らな交わりを必要としないのだ。

そもそも天使には子孫を残すという事自体禁止されている。

つまり天使の間に『血縁』というものは存在しない。

そのため、天使の間の関係というのは希薄なものが多い。

皆他人と深く関わりを持つとは思わない。極めて保守的なのだ。

そういう点で言えばシィとメルキエルの関係は甚だ異例と言わざるをえない。

だが天界では人間の倫理感では到底理解できない関係や、どんな家族関係にも当てはまらない奇妙な関係が普通に公認されている。

なぜならそうでもしなければ互いの関係から生ずる『社会性』というものが維持できないからだ。

察しの通り、天界の社会構造は下界のように巧く成り立ってはいない。

あちらは度々戦争や紛争が起こるといふ欠点があるが、

それは互いに自分の境遇がはっきりしているが故のことなのだ。

ここだけは天界が下界を見習うべき所なのかもしれない…

…天界と名前でもわかるように天に浮かんでいる大陸が主な地形なのだが、

一つの巨大な大陸というわけではない。

全体は雲に覆われており、五つの大陸がその中にすっぽりと包まれている。

大陸は四方に一つずつ、

そして中央にひとときわ大きい大陸がある。いわゆる『神の御座』である。

神が降臨する聖地。

その中心にある大聖堂には神の啓示を受けた時にしか入ることができない。

そして、シイは今まさに神の啓示を受け、そこに入ろうとしていた。三日の内に預言書を読んで理解するという一つ目の試練を終えたのだ。

白霞の中に悠然と佇むその大聖堂の名は…神の御名がそのままつけられている。

しかしその名を口にする事は許されない。

神の名を言う事、それは即ち死を意味するのだ。

身の丈の数倍はある巨大な扉をシイはゆっくりと開いた。

木材同士が互いに擦れ合う重苦しい音が響く。

入った先には巨大な空間があった。

足元には真っ赤な絨毯があり、それは祭壇にまで続いている。

シイはその上に歩を進めていく。

そして祭壇の前に跪いた。

すると何処からか“声”が響いた。

それは聴覚を通してではなく、頭の中に直接語りかけている“声”であった。

シイはその“声”の主に預言書を読み終えた旨を伝えた。

すると“声”はシイに二つ目の試練を言い渡した。

「…えっ？」

それを聞いた時シイは耳を疑った。

跪いたまま今授かった言葉をもう一度口の中で反芻してみる。

シイが与えられた二つ目の試練。

それは……――

+++++

山積みになった本を順に本棚に並べていく。

…そんな単純作業を繰り返していたメルキエルはふとシイの試練の事を思い出していた。

二つ目の試練…

あれで全てが決まる。

自分が今こうして図書館の司書をしているのも自ら志願したと言ったが、

実を言うと『天名』を与えられた際に決められたと言った方が正しいかもしれない…

結果的には示された道と自分の意志が一致したので『自らの意志』と言ったとしても語弊がないと思ったまでだ。

二つ目の試練…

それは、

『天使が執務を執り行う上で自分にとって最も大切な事は何か答えよ』

というものだ。

自分の場合、

『知識と才覚』

そう答えた。

そして“智天使”(cherubim)の位を授かった…

その時、既に自分は古代図書館にある本に手をつけていたので、その知識の豊富さは天界の中でも随一となっていた。

天使九階級の中で第二位という高き位を授かる事ができた。はたしてシイは…

どう答えるか…?

メルキエルは手を止めたまま、そればかりを考えていた…

+++++

シイは跪いたまま硬直していた。

二つ目の試練。

それは彼女が想像していたものと全く違っていた。

…質問に答えるだけでは試練にはならないのではないか？

…しかし。

何か…何か答えなければいけない。

しかしそんな考えとは裏腹にちつとも言葉が浮かんでこない。

「…あ、えと…」

シイは何とか言葉を紡ごうとする。

しかし出てきたのははあっという吐息だけであった。

その時だった。

突然彼女の中にある言葉が浮かんだ。

それは自分でも全く予期していなかった言葉だった。

いやそもそも自分がたった今思い付いたというのはどうにも疑わしい。

言い換えれば…そう、まるで誰かが自分の耳元で囁いたかのような…
そして彼女は思う間もなくその言葉を口にしていた…

+++++

メルキエルは大聖堂の門前に来ていた。

あれから仕事をやるうにも彼女の事が心配でどうにも手がつかず、
とうとうここまで来てしまったというわけだ。

別にここに自分が赴いたとしても状況が好転するわけでも、
自分にとっても彼女にとっても何もメリットはない。

そんなことはわかっている。

頭ではわかっているのだ。

メルキエルは自分の理解し難い行動にまたも苦笑していた。

考えてみれば第二の試練はただ質問に答え、自分の指針を表すだけ

でよいのだ。

何を心配する必要がある？

次々と自分の行動に対する疑問が現れては消えてゆく。しかし、それでもここを離れるわけにはいかないのだ。

それは何故なのか？

その答えは論理的思考の最果てに行き着いたとしても明確に解き明かす事は不可能だろう。

そんな風に自分でも自覚している癖である『頭の中の論理演算』にふけっていると、

ふと誰かが自分の前に立った。

メルキエルは思考を中断し顔を上げた。

そこにはシイの姿があった。

メルキエルのすぐ隣りに横を向いて立っている。

「…シイ」

とりあえず名前を呼んでみる。

しかし彼女の耳にその声は届いていないようだった。

その虚ろな瞳は虚空の一点を見つめて動かない。

「…どうした？…何かあったのか？」

「……………あつ！メルキエルさん…どうしたんですか？」

彼女はようやくメルキエルの存在に気付き、向き直った。

「どうしたって…その、なんだ…試練は…無事に遂げたのか…？」

メルキエルはそっぽを向いて頭を掻く。

「私の事、心配してくれてたんですか？」

「べ…別にそんなんじゃ…」

「あつそれより聞いてください！やりましたよ！私もやっと『天名』と位を授かりました！」

そこまで言うとな彼女は少し改まったように姿勢を正し、メルキエルと対面した。

「幼名シイ（s i e）改め、シエル＝リヴェリーフェス（s i e l

「Liebereafes」です。

今後ともよろしくお願いいたします」

そう言うと、純白のワンピースの裾を指で摘んで恭しくお辞儀をした。

メルキエルはその様を見て、シィ：もうこの名前で呼ぶのはやめることにしよう：シエルが急に大人びた、と率直にそう思った。

天界には“成人”という概念がない。

単純にまだ『天名』を与えられていないのが幼天使：つまり子供であり、

『天名』を授かった時、天使：即ち大人になるという位置付けである。

試練が与えられる時期というのは天使それぞれ違う。

それはその天使が人間的（天使的？）に成長し、

正式な天使としての執務を任せられるくらいになった時に訪れるのだ。

執務：と言うと何か堅苦しいイメージが付きまとうが、実際堅苦しいものだから仕方がない。

メルキエルの図書館の司書のような楽：と言ってはいけませんが比較的気を抜いて出来るものから、天界の治安を治める熾天使（seraphim）や下界への天罰を行使する力天使（virtues）ともなるとその役所は重要になってくる。

「：それでシィ：ではなくてシエル、位は何を授かったのだ？」

「えっ：えゝと：言うのがちよつと恥ずかしいんですけど：大天使（arcangels）でした：てへへ：やつぱり私なんかそんなに高い位を貰えるはず不是吗：はあ」

「そんなことはない：位等と言うのは所詮はその時の力の指標に過ぎない」

メルキエルはシエルの両肩に手を乗せて見つめる。

「力が足りなければ伸ばせばいい：ただそれだけだ」

「：ありがとうございます：私、頑張りますね！

メルキエルさんみたいにうーんと勉強して立派に執務をこなしてみ
せすっ！」

「ははは…まあせいぜい頑張れよ」

メルキエルは眼鏡を直しながらからからと乾いた笑いを溢した。

「…そんな言い方はないですよ！人が折角やる気になっているの
に！もうメルなんて知らないですっ！」

シエルはどう考えても『可愛い』としか形容できない怒り顔を披露
した後、

翼を大きく広げて飛び立とうした。

「待て！その名前で呼ぶなあ！」

「女の人みたいでかつこ悪いから…ですか？」

シエルは悪戯っぽい笑みを浮かべてそう言った…

「Prologue」(後書き)

実はこの小説は現在かなり先の部分を書いています。
だからこの部分を書いたのは一年くらい前だったかな(汗)

1st Wing “Folly Fall...” (前書き)

天界で暮らす天使・シィは、試練の果てに天名『シエル』リヴェリ
ーフェス』を授かる。

一夜明けてシエルとメルキエルは図書館にて読書に励んでいた。

1st Wing“Folly Fall...”

+++++

「…それで何と答えたのだ？」

メルキエルは本から顔を上げ、隣りで同じように本の虫になっているシエルに訊いた。

「えっ？何がですか？」

「とぼけるな…第二の試練の答えのことだ」

「あっ…あれのことですか…聞きたいですか？」

シエルは本を閉じ、メルキエルの方に向き直った。

金白の髪の毛の奥にある柔らかな碧眼でメルキエルを見つめる。

一瞬、メルキエルは胸の奥にたぎるような熱さを覚えていた。

シエルは両手をゆっくりと自分の胸元に持っていく。

沈み込むようにその十指は胸板の下辺りに軟着陸した。

桃色のすべらかな唇がその言葉を静かに紡いだ。

「……愛……愛って言いました…」

「…愛？」

メルキエルはからからになった喉を鳴らしながらからうつじてそう聞き返した。

先程からの彼女の仕草。

それを見ていたメルキエルは自分の中に“何か”が生まれたのを感じ取っていた。

つい今しがた耳に入った言葉——愛。

身体に電撃が駆け抜けたかのようにだった。

…知ってしまったのだ。

この天界の中で最も美しいモノが眼前に佇んでいるということ。そしてまた残酷にもそれが決して触れてはならない禁断の果実であ

るという事も。

天使に禁ぜられた三つの事柄。

神に背くこと。

墮天すること。

そして、他の天使を愛すること…

無償の愛は神の指導するものであったが、一個人の天使の間に芽生える愛は固く禁じられていた。

…しかし。

今それが頭の中で粉々に砕け散ったような気がした。

それと同時に許されざる劣情が巻き起こった。

頭を掻きむしってその邪念を打ち消そうとする。

「えっ…！どっ…どうしたんですか！？」

シエルはそんな奇怪な行動を見かねてメルキエルに駆け寄った。

しかし彼女が気遣いから発したその可愛い声でさえも、今のメルキエルにとっては悪魔の囁きに等しかった。

「…な、何でもない…！…俺に構うな…！」

「でっ…でも…！」

メルキエルは近寄ろうとするシエルを突き飛ばし、本棚に頭を叩き付ける。

「出ていくんだ…！シエル…早く…！」

「ど、どうしちゃったんですか？」

「いいから出ていけ…！！」

メルキエルは本棚に頭を擦りつけ、うめくように言う。

「な…何だかよく分かりませんが…こんなにメルキエルさんが苦

しんでるのに…ほつとけません！…だから、」

そう言うとシエルは何を思ったのかメルキエルの腕を掴み、強引に窓へと導いた。

「外の空気を吸って気分転換しましょう！」窓辺の縁に身体を預け、メルキエルの手を引く。

その顔には満面の笑みが湛えられていた。

その笑顔を見たメルキエルは自分の中から邪悪な思念がすうつと安らいでいくのを感じた。

「……お前という奴は…」

メルキエルはゆっくりと呼吸を整え、それだけを言った…

+++++

誰もいない閲覧室。

周囲には相変わらずおびただしい量の書物達がごったがえしている。中央にある長机には読みかけの書物が放ってあり、その傍らには儼げな光で辺りを照らすランプがある。

その無人の閲覧室に一つの影が舞い降りた。

その人物は部屋の唯一つの光源であるランプの光に近付く。

背の高い本棚に不気味に伸びたシルエツトが映し出された。

室内が暗いため、現時点で挙げられるこの人物の外見的特徴といえはあまり背丈が高くないという事くらいである。

だが光を反射させている艶やかな髪の毛を見るあたり、まだ若年の天使であるという事は臆気ながら察しがついた。

その天使はランプの中でチロチロと揺れる炎を恨めし気に睨みながら呟く。

「奴は…何処に行った…？」

尾をひくようなボーイソプラノが響いた…

＋＋＋？＋＋＋

大聖堂の奥にある一室の円形テーブルの上でそれは行われていた。
天界の筆頭達が集まり、政まつりごとについての話し合いである。

この場に呼ばれるのは高位の天使のみで、皆官僚職についている者達だった。

その中でも最高位の象徴である六枚の羽根を持つ天使が口を開いた。

「奴はまた欠席か…？」

「はい…」

答えたのは先程閲覧室にいた天使であつた。

「智天使ともあろうものがいつまでも図書館の司書なぞに甘んじているとは…嘆かわしい」

両手をテーブルに置き、肩を落として呟く。

「それにあの一件の事もある…」

「…と言いますと…？」

閲覧室にいた天使は聞き返す。

しかし六枚の羽根を持つ天使は口を閉ざしたまま何も答えようとはしなかった…

その後、会議は平常通りに執り行われたが、六枚の羽根の天使だけは終始険しい顔を崩さなかった…

＋＋＋？＋＋＋

清らかな溪らぎの音が耳を擦る空間に二人はいた。

執務を務めるにあたってシエルは知っておかなければいけない基礎知識をメルキエルに乞うていた。

そうして今まで二人で図書館に籠って色々と研究していたのだが、外の空気を吸って気分転換でもしようとシエルが言い出したのがき

っ かけで今二人はここ、空中庭園にいる。

中央の噴水から噴き上がる清流が下に溜められ、緩やかに足元の小川を流れていく。

「気持ちいいですね」

シエルは思いつきり伸びをしながら辺りを見回す。

噴水の周りには色とりどりの花が咲き乱れていた。

シエルの目には輝く花びらで着飾った花達がこれでもかと思う程「自分が綺麗」と自己主張しているかのように見えた。

「見ているだけで目が痛くなるな」

傍らにいたメルキエルは目を伏せて眼鏡を直すふりをする。

あくまでふりである。

これもメルキエルの癖なのだ。

いや意識してやっているのかもしれないが、その真意をメルキエルに聞く勇気をシエルは持ち合わせていなかった。

最もどちらなのかわからないから面白いのかもしれないが。

シエルはそんなメルキエルの仕草を見て笑いを堪えながら聞く。

「…どうしてですか？」

「無駄な物が一切ないからだ」

「???」

「書物で読んだ事がある…下界には一見綺麗に見える花達にも『虫』と呼ばれる小さな生き物が共生していると」

メルキエルは腰を下ろして花びらにそつと手を触れる。

「だがそんな小さな生き物にも命が宿っている…互いに生命の営みを分け合っているんだ」

花卉の縁を指で優しくなぞる。

「素晴らしいと思わないか?…一切の汚らしいモノを排斥する天界では決して見られない事象だが…」

メルキエルは立ち上がり、遠い目をして呟く。

「…まだまだ下界への興味は尽きないな」

柔らかない風が花達を揺らし、そしてシエルのプラチナの髪を撫って

いった：

+++++

メルキエルは自分に嘘をついていた。

“下界に興味がある”…そんなのは全くの嘘なのだ。

本当の事を言えば今でも自分の傍らに咲いている一輪の花を引き千切り、我がモノにしたくてたまらないのだ。

一輪の花というのは勿論、比喻である。

周りを花畑に包まれて無邪気な笑顔に顔を綻ばしている彼女…シエルこそが、“一輪の花”であった。

こうやって書物で得た知識を披露し、論理思考の海に自分の意識を沈めていればあの“狂気の悪魔”が出てくることはないと思っていたのだが…

必死の努力も虚しく、今さっき彼の精神を霞めたのはまさしく悪魔の囁きであった。

…本来ならばもうこの二人は一緒にいるべきではないのかもしれない。

メルキエルの心を蝕む狂気は既に理性で抑えることのできる限界にまで達していた。

しかし彼はそんな事をおくびにも出さず、ただ穏やかな表情で彼女を見守っている。

心は理性と狂気の間揺れている。

そんな不安定な心情でも、何故か彼女の笑顔を見ると深く霞がかつた心の霧が晴れるのが自分でも分かるのだ。

何処か危う気で、

それでいて穏やかな、

幸せな時間。

こんな背徳的な行為が続くはずが…いや続けてはいけないのだ。それはわかってる。

わかっているが…

もう少しだけでいい。

この出来過ぎた夢の続きを…

見させてほしい…

そう願いながらメルキエルはゆっくりと目を閉じた…

+++++

ふと見回すと、シエルは見知らぬ風景の中にいた。

鬱蒼と茂った森の中に静かに佇む湖畔。

天界にこのような場所はない。

果たしてここは何処なのか？

湖畔の淵に誰かがいた。

少年だった。

外見はシエルと同じ位の年齢だろうか？

毛並の良い芝生に腰を下ろし、手には釣竿が握られている。

どうやら釣りをしているようだ。

シエルにはそれが一体何をしているのか分からない。

しかしシエルはいつの間にか少年を注意深く観察していた。

あぐらをかいたまま時折釣竿をぴくぴくと動かしている。

褐色の髪の下に見えるのは、この歳の少年としては逞し過ぎる程の精悍な顔。

きりりとした眉の下には鋭く、それでいて穏やかな瞳が印象的だった。

同年代の異性を見た事がなかったシエルは、一瞬にしてその魅力に打ちのめされていた。

突然高鳴り始める心臓。

声を…掛けなければ。

何故だか分からないがそうしなければいけない気がした。

しかし何か言わなければいけないという気持ちとは裏腹に言つべき言葉が見付からない。

そして次の瞬間。

目の前に広がっていた光景は急に色褪せたかと思うと、一瞬揺らいだ後、霧のようにかき消えた…

………

………

………

気が付くとシエルは花畑をベッドにして倒れていた。

シエルの視界には心配そうなメルキエルの顔があつた。

「…一体どうした？いきなり倒れるなど…」

「…え？」

慌てて辺りを見回すと、そこは元の空中庭園だった。

「……………」

先程の光景は一体何だったのか？

その答えは意外にも早くシエルの中に浮かんだ。

「私、今下界を見てきました…」

思う間もなくその答えを口にしていた。

「…？何を言っているんだ？」

メルキエルはシエルの言葉の意味を汲み取れず、目を白黒させている。

そんなメルキエルを後目に、シエルは自分の中に下界への興味が沸々と湧いてきているのを感じていた…

＋＋＋？＋＋＋

ぱらぱらと本を捲る音がする。

地下の閲覧室にメルキエルが一人、読書にふけっていた。

シエルの姿はない。

彼女は自分の部屋に帰っていった。

メルキエルは空中庭園での出来事を詮索しなかった。

正式な天使になった特権として神から授かるのは何も階級称号だけではない。

天使を天使たらしめているとも言える不思議な力。

シエルが神から千里眼の力を授かったとしても何ら不思議ではない。メルキエルは無理にでもそう思い込む事にした。

ふと本を捲る手を止める。

どうやら招かざる客が来たようだ。

メルキエルは振り返りもせず、一言だけ言った。

「何の用だ…ラゼル」

ラゼル（r a z e a E L）と呼ばれた天使はメルキエルの背中に向かって言い放った。

「先程ここに来たがお前が居なかったんでな…何処に行っていた？」

「貴様の知った事ではない」

メルキエルは背中を向けたまま答える。

「…随分と御執心のような…あの幼天使に」

ラゼルという名の天使は手近にあった本棚に身体を預け、告発するかのように言った。

栗色の髪は頬を撫でるくらいの長さで、遠目には少年にも見えてしまう顔立ちだ。

実際その口から奏でられる声は少女と少年の中間、極めて中性的な響きである。

「何の事だ」

メルキエルは至って冷静に返す。

「とぼけるな…！貴様のやっている事は神への背任だぞ」

「……………」

「天老院の連中は既に貴様を異端審問会にかける気だぞ…だが今な

ら間に合う！」

ラゼルは閲覧室の机に両手を叩き付け、懇願するように訴えた。

「天老院に戻れ！今戻ればサフィエル様は今回の件には目を瞑ると言ってくださっている！それに元々お前はこんな場所にいてはいけないんだ！お前の頭脳を天老院は必要としている！」

しかしメルキエルは耳を貸そうとしない。

「頼む……！戻ってくれ……これ以上私を困らせるな……！」

「政に興味はない」

メルキエルは本を閉じ、ラゼルに向き直ってきっぱりと言った。

しばらく彼女は何も言わずにメルキエルを見つめていたが、やがて項垂れたままゆっくりと呟いた。

「そうか………わかった……もう私は何も言わない……お前は自分の道を往け……！」

ラゼルは出口の吹き抜けの真下に立つと、最後に一言メルキエルに言った。

「だがな……お前の選んだ道は破滅の道だ……それがいずれわかる……！」

……

……

……

再び独りになったメルキエルは誰に言うわけでもなく、呟いた。

「破滅の道……か………そんな事はわかっているさ……」

1st Wing “Folly Fall . . .” (後書き)

えらい事になってきました(笑)

でもメルキエルの苦悩のシーンは書いていて楽しかった覚えがあります(笑)

2nd Wing “Edge of heaven” (前書き)

メルキエルは政^{まつ}への誘いとシエルへの狂気という二つの苦悩の狭間でもがいていた。その一方でシエルは不思議な風景を見る。天界には無い場所で少年の姿を。そしてその光景はシエルの心を掴んで離さなかった。言われようも無く下界への興味が湧くシエル。そしてついに彼女は・・・

2nd Wing “Edge of heaven”

+++++

あと一步。

あと一步踏み出せば、そこには未知の世界が広がっている。

だがもし堕ちれば二度とここへは戻ってこれないだろう。

それを考えるとどうしようもなく、足がすくんでしまう。

今シエルは天界における禁断の地、「御座の端」に来ていた。

そこは簡単に言ってみれば天界で最も地上に近い場所。

そして罪を犯した天使を「墮天」の刑に処するため墮とす場所でもある。

空中庭園でみた光景をシエルはどうしても忘れることができなかった。

あの人間の少年。

自分はあの少年を見てどうなってしまったのだろうか？

わからない。

わからないが…

ただ逢いたい。

逢って話してみたかった。

その気持ちだけが日に日に大きくなり、シエルは小さな胸を痛めていた。

…ここから堕ちれば。あの人に逢える。

そう思うと自分が今からしようとしている事がどんなに背徳的なことであるとも、自分はそうしなければならぬという気持ちが心の奥底から湧いてきていた。

そして足のすくみは嘘のように消えていた。

何故そう思ったのかはわからないが、彼女は簡単にこんな事を思っ

ていた。

きつと前世からの運命なのだと。

+++++

その日、アレンドリックフィールド（Allen Blackfield）は狩りに出掛けていた。

しかし朝早く森に入ったものの、日が高く昇り既に傾きかけた今まで獲物は一匹も捕れていなかった。

おまけに躍起になって探していたせいか道に迷ってしまっていた。

「獲物は捕れないし道には迷う。今日は厄日だな…」

アレンはすっかり手に馴染んだ弓矢を握り直して呟く。

幸い太陽の位置で方角だけは知ることが出来た。

おかげで今ひたすら南に進んでいるわけだが…

「こんなことなら捕りなれた南の森にしておけばよかったな…」

アレンは今日に限って今まで狩りをしたことはない北の森に来ていた。

地元の狩人も近づかない北の森。

この森には入ると祟りがあるとか、徘徊している悪魔に魂を取られるとか色々物騒な噂がある。

好奇心旺盛なアレンはそんな森に一度入って獲物を捕ってみたかったのだ。

しかし結果は惨敗。

アレンは早くもこの森に入ったことを後悔し初めていた。

腰の高さ程のある草木に阻まれながらもアレンは何処かにあるだろう森の切れ目を探して歩いていた。

ふとアレンは足を止めた。

突然拓けた場所に入った。

「…なんだここは？」

辺りを見回すとその巨大な空間はさながら森の中にある天然のコンサートホールであるかのように丸く整った広い草原が広がっていた。その草原の中心にはこじんまりとした湖畔があった。

そこでアレンは水辺に走り寄るとは湖畔の水をごくごく飲み始めた。

「ふう、助かった・喉が渴いて仕方なかったんだ・」

喉を通り抜けていく心地よい水流にアレンは暫く身をまかしていた。たつぷりと喉を潤わした後、アレンは改めて辺りを見回した。

切れ切れになった木の葉から僅かに赤みがあった日の光が差し込んでいる。

夕方にはまだ早い時間なので日差しはまだ強かったが、そんなことよりもアレンは何故かこの景色に胸騒ぎを覚えていた。

巧く言えないがこれから何かが起こる、と。

一体何なのか？

それは分からない。

アレンはただ漠然と頭を支配するそんな考えを持て余しながら立ち尽くしていた…

+++++

吹き出された煙草の煙りは直ぐに満天の星空に消えていった。

その光景をぼんやりと寝転がって見ていたアルバート・フォレストー（Albert Forrester）はぼつりとこんなことを言った。

「満天の星空……天使の涙…か」

再び煙草を吸うと、今度は鼻から吹き出す。

「泣っていうよりも…本物の天使が落ちてきそうだな…」

アルバートは自分で言った矢先、吹き出していた。

「なぐんてなっ…ははっ！んな訳ないか…よいしょっと」

アルバートは寝転がっていたベンチから上体を起こすと辺りを見回した。

周りに人気はない。

ポケットの懐中時計を見ると既に十一時を回っていた。

皆もう自分の部屋へ帰っていたようだ。

アルバートも冬の夜風が身に凍みてきたのでそろそろ部屋に戻る事にした。

ベンチから降り立つと堅い甲板がアルバートの靴を鳴らす。

そのままふとフェンスの端から顔を出して下を見ると、そこには漆黒の海が広がっていた。

「うひっ…落ちたら間違いなく凍死だな…まあそんな心配はないだろうけど」

船首デッキから降りたアルバートはそのまま客室の扉を開こうとしてふと、何かを感じて空を見上げた。

そこには先程と変わらない満天の星空が広がっている。

しかしアルバートはこれから何かが起こるのではないかとという漠然とした予感を感じていた。

「なぐんかな…」

アルバートはその場で首を傾げていた…

？

『ちゅどーん』

自機は敵キャラの攻撃を受けて爆発した。

「はあ」

有栖川蓮也は折りたたみ式携帯電話を閉じた。

ここは深夜の公園。

友達に誘われるままにカラオケに来たまではよかったが、どうも気分が乗らず入って一時間足らずで蓮也は挨拶もそうそうに引き上げてきたのだ。

そうして何もすることがなかった蓮也は誰もいない夜の公園の遊具の天辺に登り、携帯ゲームに熱を上げていたという訳だ。

…つい先程までは。

「はあ」

蓮也はまた溜め息をつく。

「なあ、なんか俺って惨めだなあ」

取り敢えず大学に進学したものの、将来の夢などというものはまだ見付けていなかった。

キャンパスライフも期待していた程の充実ぶりはなく、先程のように友達とカラオケに誘われることがよくちよくあるだけで高校の時と何ら変わることはなかった。

一番期待していた大学に入って彼女を作るという夢もこの分だと実現しそうもない。

「はあ」

もう一度蓮也は溜め息をついた。

余りにも空虚な日常。

これがこれからずっと続くのだろうか？

そんな陰鬱な思考だけが蓮也の頭を渦巻いていた。

その時だった。

ふと、蓮也は何かを感じた。

予感。

何かの、予感だった。

何故かはわからないが蓮也は夜空を見上げた。

東京の曇った夜空は星一つ見えない。

それでも蓮也は星を探した。

いや、探していたのは星ではなかった。

それは、

それは……

+++++

それは突然の事だった。

周りの草木がざわめいたかと思うと次の瞬間、

全ての音が、

止まった。

そして時間の静止。

あらゆるものはやがてきたるモノにひれふすべき。

まるで森の命達は怯えるかのように全てを凍結させていた。

アレンは息をするのも忘れ、天空を見上げた。

湖畔には幾重にも波紋が広がっている。

次第に眩い光が辺りを白色に塗り潰し、視界は奪われる。

しかし、それでもアレンは天空を見上げるのをやめない。

目をそらしてはいけない。

何故かはわからなかったがそんな気がしたのだ……

+++++

光。

総てを包み込む光。

闇を照らす

眩いばかりの光。

しかし、彼女が見たものはそれだけだった。

彼女は光の中にいた。

そこで彼女は

やがて来る覚醒の刻を静かに待っていた…

……

……

……

ふわりっと暖かな風が吹いた。

はっとして辺りを見回すと、先程の眩い光は嘘であったかのように消え失せ、森達は普段通りの時間を刻んでいた。

ただ、一つ違った事があった。

彼は見た。

いや、見てしまった。

白く、

美しく、

輝く、
少女を。

湖畔の丁度中央に真っ白のワンピースを纏った少女がいた。

信じられなかった。

彼女は宙に浮いていた。

ゆっくりとした動作で湖畔の水面に降り立った少女は、胸の前で交差していた腕をそつとほどく。

するとそれに呼応するかのように彼女の背中後ろに純白のヴェールがおろされた。

否、それは羽根であつた。

『…天使』

彼の頭にはその言葉が浮かぶ。

本の中にしかなかったあの『天使』が、
今、

自分の目の前に…？

天使の少女の爪先が湖畔の水面に僅かに触れる。

静かに波紋が広がり、その波紋が消える頃にもう一度、彼女は水面を蹴る。

たったそれだけの動作で彼女は湖畔の水面で『静止』していた。

常識を逸脱した行動をし続ける天使の少女をアレンは瞬きもせず
凝視していた。

…本当に天使なのか？

何しろ誰も見たことのない伝説の生き物である。

確かめてみないことには何とも言えない。

アレンは勇気を出して話し掛けてみることにした。
とは言え相手は天界に住む神の御使いの『天使』かもしれない。
なるべくそそのかないようにしなければいけない。

そう思ったアレンは思い切った大声でこんな事を言った。

「あのー！！失礼ですがあー！！貴方は天使様なのですかー！！？」

水面で静止していた少女は、ぱちつと目を開けると声の主、つまりアレンの方を見た。

そして顔を強張らせたかと思うと、突然水面へと没していった。

「…えっ…きああああー！！」

ばしゃばしゃと水を飛ばしながら溺れる少女…

そこには先程の神々しさは微塵も感じられなかった。

「…えっ？」

アレンはその光景を見ながらまずい事をしたかなと後悔した。

…背中に羽根はついていただけ、天使じゃなかった？？

アレンはそんな考えを頭の隅においやった。

取り敢えず助けないといけない。

アレンは弓矢を水辺に置くと、勢い良く水面へ体を躍らせた。

+++++

羽根を持つ少女を背負ってアレンはやっとのことで湖畔の岸にたどり着いた。

少女を岸に降ろすとアレンは額についた水滴を拭う。

「…げほっ…げほっ…！」

少女は四つん這いになったまま咳き込んでいた。

その口からは先程飲んでしまったのだろう、水がごぼごぼと流れ出していた。

「大丈夫か…？」

アレンは少女の背中を擦りながら言う。

「はっ…はい…何とか…」

少女は肩で息をしながら立ち上がるうとする。

しかしバランスを崩し、後ろにのめり倒れそうになるのをアレンに抱き留められた。

「きゃっ！」

「おっとっと…」

「…すみません…羽根が水を吸ってしまつて身体の釣り合いがとれないみたいです…」

少女は頬を染めながらアレンの傍から離れると、忙しく羽根をはばたかせる。

細かな水滴が飛び散り、心地よい風がアレンの前髪を揺らした。

「羽根は乾いたかい？」

アレンは幾分かくだけた感じで少女に話し掛けた。

先程の様子を見たら彼女がいくら『天使』であつても貴方なんて呼んで敬う気にはなれない。

どうやら神格化し過ぎていたようだ。

『天使』がこんなにも親しみやすい生き物だったとは…

「はい…あつ」

少女は呼吸を整えながらふとアレンの顔を見つめる。

「なっ…何？」

瑠璃色の澄んだ瞳に見つめられ、アレンは心を見透かされたような気がしてたじろぐ。

少女はしばらくアレンの顔をじっと見つめていたが、ふっとプラチナブロンドの髪を揺らしながら頂垂れた。

「…貴方じゃない」

顔を伏せたまま呟く。

「…？」

「あつ…ごめんなさい…こちらの話です…」

こめかみに伝う水滴を嫌ってか、少女は目を少しだけ細めながら改まった口調で話した。

「助けて頂いたことには感謝しています…ですが貴方は見てはならない天使が降臨する姿を見てしまいました…」

…降臨？

アレンは先程、少女が突然溺れた瞬間を思い出してしまい、笑いを堪えた。

あれが天使の降臨？

ドジな天使もいたもんだ。

「な…何故笑っているんですか！こちらは真剣な話をしているんですから真面目に聞いてください」

「あ…ああ、ごめん…でもさっき何でいきなり溺れたりしたんだい？」

「あつ…あれは…貴方が突然大声を出すから…」

「びっくりしちゃったんだ？」

「は…はい」

少女は両手を上気した頬に持つていく。

「私、まだ力の使い方に慣れてないみたいで…ああ…恥ずかしいです」

彼女は暫しそのままの姿勢で頬の赤みがとれるのをまっていた。

…そして再び真面目な口調で語りだす。

「と…とにかく！貴方は見てはいけないものを見てしまいましたから…」

「…しまいましたから？」

「初めから見なかった事にします！」

少女はほっそりとした腕を振り上げると、びしつとアレンの額に向けて人指し指を突き付けた。

「???」

困惑するアレンを後目に少女は淡々と続ける。

「これから貴方の記憶を消します！今、私と出会ってからの記憶を全て！」

「な、…何だって!？」

単なるドジな天使だと思っていたがそれは違ったようだ。

書物によれば天使は人間には到底真似できない不思議な力を使うという。

自分はこれから一体何をされるのか？

先程の弛んだ雰囲気は一瞬にして吹き飛び、底知れぬ緊張がアレンの身体を駆け巡った。

得体の知れない危険が自分に迫っているのは事実だ。

逃げなければ。

しかしそう思った瞬間、彼女のふくよかな指がアレンの頬を捕えた。

「…抵抗しないでください…痛くなんかありませんから」

両頬をそつと包まれ、アレンは目をそらす事が出来ない。

「…な、何する気だよ!？」

「大丈夫です…暴力は好きじゃありませんから…じっとしててください」

ぐいつとアレンの頭は引き寄せられる。

力はそれほど強くない。

その気なら振りほどく事も出来るはずだ。

しかし何故かその手付きは逆らい難く、アレンはされるがままに身体を預けていた。

少女の顔がずいっとアレンの鼻先に迫る。

「…ん」

少女は瑠璃の瞳を瞼にしまうと一段と顔を近付ける。

「…えっ…ちよつと…待って…」

しかし彼女は動きを止めない。

このまま行けば彼女と自分の唇が触れ合ってしまう…

＋＋＋？＋＋＋

既にアレンと少女との距離は限りなく0に近かった。突然現れた天使の少女にキスを迫られている自分…

どうしてこんな事になってしまっているのか？

今までの出来事を思い返してみるが、その答えとなる事象は見付けすることは出来なかった。

頭の中はさながら玩具箱を引っくり返したかのように混沌渦巻き、思考はでたらめな方向へと導かれる。

目の前には今まさに自分に口付けしようとしている少女。

改めて見てみると、その容姿は今まで自分が見てきたどんな異性よりも綺麗であつた。

いや、単に綺麗なだけではない。

何処か人間を超越した奥深さがある。

外見的には幼さが残る彼女からそれを直接感じ取るのは困難かもしれない。

『奥深さがある』等と表現した自分でさえもその印象が彼女の何処からきたものなのか特定できていない。

ただ、強いて言えば内から滲出るモノ、というかむしろ彼女の持つ雰囲気というやつだろうか？

我ながら思考が支離滅裂だが、実際そう感じているのだからしょうがない。

アレンは半ば開き直つたようにこんな事を思っていた。

こんなに綺麗な少女からキスをされるのなら願ってもないことだ。そんな邪な思いが頭をかすめる。

しかしその直後、彼は重要な事を思い出していた。

彼女が自分にキスを迫っている理由。

“これから貴方の記憶を消します…今、私と出会ってからの記憶を全て…”

彼女の言葉の名残が響く。

つまりこれは『手段』なのだ。

自分の記憶を消すための。

彼女が自分の事を愛しく思っていてくれるキスではない。

あまりに唐突な展開にそんな事も忘れてしまっていた。

記憶を消すために何故キスをしなければならないのか、という疑問は残るがここはすぐさま行動を起こさねばならないだろう。

「ちよつと待ったあ!!」

アレンは少女の肩を掴むと強引に自分から引き剥がした。

既の所で彼女の唇は自分の唇と接触せず、そこで侵攻を止めたのだった。

息苦しかった呼吸を整えるためアレンは二・三度大きく息を吸った。

「な…なんで君が僕にキスをするんだよ?!」

すると彼女はきょとんとしながらも悪びれずに言う。

「きす…?何ですか?それ…」

アレンは耳を疑った。

彼女は自分は何をしようとしているか知らなかったのか?

「きつ…君が今しようとした事だよ!」

「今…私がしようとした事…?」

少女は首を傾げる。

「君…何も知らないんだね…」

「…はあ」

彼女は何が何だか分からない、といった様子だ。

…説明せねばなるまい。

彼女がこのまま何も知らずにこの世界に生きていくと思うと、危なかしくってたまらない。

それに自分だって記憶を消されたくないなどない。

何とかして彼女にキスを諦めて(?)貰いたかったのである。

「いいかい？君が今僕にしようとした事は『キス』というもので、好きな人としかしちゃいけないの！」

彼女は素直にうんうんと頷き、そしておっとりとした口調で呟く。

「そうなんですか？知りませんでしたあ…ご教授ありがとうございますっ！」

「…それから君、今までキス…したことある？」

こんな事を聞くのは非常に失礼な事なのかもしれないとアレンは一瞬思ったが、とにかくこの状況を打開しなければという気持ちで一杯でそこまで気が回らなかった。

「えっと…この術を使うのはこれが初めてです」

「じゃあ尚更いけないよ！」

「…好きな…人…」

少女はその言葉が気になるらしく、ゆっくりと反芻している…

2nd Wing “Edge of heaven” (後書き)

本格的に物語が動き出します。

シエルの墮天によって引き起こされた歪曲した三つの恋。

3rd wingからはそこが見物です。

3rd Wing “Three-way love” (前書き)

意を決して地上へ堕ちたシエルが出会ったのは狩人のアレンであった。初めての人間との触れ合いに彼女は記憶消去の名の下にキスを持ち出す。そんな彼女の行動にアレンは呆然とする。

3rd Wing “Three-way love”

++++?++++

「あのさ…」

アレンはしみじみとした表情で何かを呟いている少女に話し掛けた。

「…えっ？は、はい」

…やはりあの説明は無理がありすぎたか？

少女の顔には明らかな動揺が浮かんでいる。

そこには先程キスを迫っていた時の気迫はなかった。

「さっき僕を見た時、『貴方じゃない』…そう言ったよね？それってどういう…？」

それを聞いた少女は一瞬虚を突かれたような表情をし、その後おずおずと口を開いた。

「…探してるんです」

その口調はまるで自分の罪を告白するようであった。

「…？」

彼女は続ける。

「大切な人を…」

++++?++++

見上げた夜空には何故か光が溢れていた。

「…What!？」

濃紺の空を引き裂く一条の光。

その光はアルバートのいる船首だけでなく、船全体を照らす程であった。

そしてそれは徐々に収束され、一点の光となる。

「…！落ちてくる！」

光は大きくなっていた。
堕ちてくるのだ。

ここに。

アルバートは並々ならぬ恐怖を覚えた。

ここは船の上だ。

もしも爆弾の類が落ちてきたとしたら逃げ場はない。

逃げなければ。

しかしそう思う気持ちとは裏腹に自分の足は固まったかのように動いてくれなかった。

その時、彼は気付いた。

それが爆弾などでもなければただの光でもないということ。

人だ。

確かに光の中に人がいる。

そう思った瞬間、

どすん

という音をたてて『何か』がアルバートの上にのしかかってきていた。

「Ouch!!…何だあ？」

その重みと勢いで引っくり返ったアルバートはそのまま船首の端のフェンスに背中を打ち付ける。

アルバートは体を起こしながらのしかかってきたソレを見た。

少女だった。

真っ白のワンピースを着た金髪…いやPlatinum blondの。

肌はぬけるように白く、アラスカに降る雪を思わせた。

そして何よりもその背中にそなわった純白の羽根がアルバートの目を引いた。

「ah…何だよ？いきなり…O o o h ! ! ……A n g e l s ……？信じられねえぜ…」

空を見上げれば先程の光は跡形もなかった。

もしやさっきの光はこの少女…？

取り敢えず両肩を揺さぶって起こそうと試みる。

「Hey！ 大丈夫か？」

すると少女は瞼をぴくぴくと動かすと僅かな間を置き、すべらかなブルーアイズを開いた。

「H y u ~ ! ……こいつは驚いた…！」

「…あ…ここは一体…」

一瞬、アルバートは戸惑った。

少女が口から出した言葉は全く理解出来ない言語だったからだ。

「E r ……u h ……何て言やあいなんだ…？」

「あの…貴方は？」

「u h m m ……取り敢えず部屋へ行こうぜ？あんたの背中の羽根は目立つ…って言ってもわかんないか…」

二等客室の自分の部屋に少女を入れたアルバートは何とかして少女に『君の名前は？』と『君は何処から来たの？』の二つを伝えようとしていた。

しかし何しろ言葉が通じない。

身振り手振りで伝えようとしても彼女は首を傾げるばかりであった。

「D a m m i t ! ……これじゃダメだ！…あんた一体何者なんだよ？」

言葉は分らないがアルバートが困っているのを感じ取った少女はすまなさそうに頭を下げた。

「すみません…言葉が通じないのは本当に不便なものですね…」
その時だった。

彼女は忘れていたのだ。

神から授かった力の一つ。

瞬時に未知の言語を理解する力。

それを使えば…

「あつ…あの、ちょっと…すみません」

座っていたベッドから少女は立ち上がるとアルバートに近付く。

「な…何だよ？」

額に彼女の手がそつと乗せられる。

「うゝん…わかりました」

「何がわかったんだ？…つてあれ？あんた言葉が…」

「…はい、少し貴方の言霊を借りさせて頂きました…これで私の言っている事…わかりますよね？」

「…コトダマ？何が何だかようわからんが…まあこれで普通に話が出来るワケだ」

アルバートは少女と一緒にベッドに腰掛けると、溜っていた質問を少女にぶちまけた。

「あんた本当に天使なのか？見た所背中に羽根があるあたり、モノホンなんだろうな」

「…はい」

「へえ…！本当なんだなあ……それでこんな場所に何しに来たんだよ？天使サン？」

「こんな所？」

「やつぱり天使サンは知らないか…聞いて驚くなよ？ここは夢の豪華客船『タイタニック』だ…！」

「…たいたにつく？」

少女にはその単語に聞き覚えはない。

「ようこそ！夢の船『タイタニック』へ！天使サン！私はあなたのパートナーのアルバート『フォレスタ』でございます。以後お見知り置きを」

恭しくお辞儀をしたアルバートはぺろつと舌を出した。

無論冗談なのだが、少女は真に受けてしまう。

「あっはいどうもわざわざありがとうございます…」

果たして、三つ巴の恋はここから始まる…

？

その時だった。

空が…瞬いた。

そして一瞬にして深夜の公園は真昼のような明るさになった。

遊具のてっぺんに座っていた蓮也は一体何が起こったのか分からなかった。

「な…なんだあ!？」

しかし空を見上げても真っ白に塗り潰された視界には何者の姿も認められない。

だがその瞬間、何かとても温かいものが蓮也の身体に覆い被さってきた。

「…わおっ!」

思わず嬉しい悲鳴を上げてしまった。

あったかい…

やわらかい…

眠ってしまうような恍惚感。

そのままアブない世界に旅立ってしまいそうになった蓮也は何気なく視線を下に移した。

すると目には信じられない光景が飛び込んできた。

自分の胸に顔を埋めている金髪の…いやプラチナブロンドの少女。

「…ななななっ」

果たしてこの娘は何なのか？

…もてない大学生に対する冷やかしか？

今に「何赤くなってるんのよ、モテないクン！」とか言いながら起き出すのだろうか？

けど何で外人の女の子…？

しかもわざわざ遊具のてっぺんまで登って来てこんなことを？

だとしたら相当ガッツのある女の子だ。

駄目だ。

どうしても思考がマイナスの方向へと行ってしまう。

目の前に女の子がいるということが素直に受け入れられない。

…どうやらモテない癖がついてしまったらしい。

「あの…もしもし？」

とりあえず肩を掴んで揺すってみる。

その手の動きはともぎこちない。

何しろ女の子の肩を触るなんて初めてなのだから。

ましてや外人さんとなればなおさらだ。

「……………」

長い睫毛を引き連れた瞼がしばいたと思うと、大きな青い目が開く。

その瞳は目の前にいる蓮也を捉えた。

純度100%の水晶よりも透き通った瞳だった。

異国の少女はバランスを取るためか、蓮也の肩をしっかりと掴むと入り組んだ遊具のパイプに腰掛けた。

突然の少女の行動にドギマギしながらも蓮也はコミュニケーションを試みる。

「あ…えっと…は、はろ…」

相手は外人さんだ。

英語で話さなければ。

必死に講義の内容を思い出そうとしたが、まるで頭に残っていない。今更ながら英語の講義を真面目に受けておけば良かったと蓮也は後悔した。

「な、…ないすとうみーちゅー…ははっ」

蓮也は持てる知識を総動員して何とか会話を成立させようとする。
だが異国の少女は首を傾げるばかりだ。

？

…この状況、さつきと似ている。

言葉が通じない青年との会話。

さつき…？

さつきとはいつのことだろう？

彼女には思い当たる事実はない。

しかし彼女はこの後何をすべきかは分かっていた。

そこで異国の少女は何も言わずに蓮也の額に手を当てる。

「…な、何…？」

蓮也は突然額に感じた柔らかな感触に頭が熱くなるのを感じた。

「うゝん…分かりました」

少女は蓮也の額から手を除けながら言う。

「…なんだ日本語話せたのかよ」

「いえ…今貴方の言霊を借りさせて頂きました」

言ってみて少女は強い既視感を感じていた。

「…何だかよくわからんが取りあえず一つだけ聞くぞ？」

蓮也は頭の中を整理しながら異国の少女に聞く。

「…その背中についてるのは何だ？」

「これですか？」

少女は背中中の羽根をぴくぴくと動かしながらこともなげに言う。

「羽根です」

「……そ、それはそうだろうけど」

蓮也は苦笑する。

「コスプレでしょ？」

「…こすぶれ？…何ですか？それ…」

初めて聞く単語に少女は素朴な質問をする

「えっ…コ、コスプレじゃないんだ？（コスプレじゃなかったら何なんだよ…）…じゃあ、アンタ何してんだ？こんなところで…」

「私…人を探してるんです」

「人？…んゝそれだったら何でこんな場所に？」

「…ここは何処ですか？…それと貴方は？」

何も知らない彼女は蓮也に次々と質問をぶつけた。

「…と、取りあえず下に降りようか…？」

ずっと遊具の上にいることを蓮也は思い出し、そう少女に促した。

？

「…天使さまあ！？」

蓮也は異国の少女…もとい、天使の少女の話を聞いてすっとなきょうな声をあげた。

「はい…信じてもらえないかも知れませんが…」

そう言いながら少しばかり蔭った瞳を見せながら項垂れる彼女。

その瞳は極上のブルーサファイアを見ているようで…

さらに真っ白なワンピース一枚という甚だ場違いの服装に加え、月夜も眠る深夜という光なき場所に於いて、彼女の身体がほのかに光っているようにも見えたということは、蓮也にとって現実感を見失うには十分な要素であった。

「…ははっ」

蓮也は力無く笑った。

「モテないくんもここまでくると悲惨だな…ついにもしもない幻覚まで見えるようになるとは…」

大きくかぶりを振って蓮也は自分の頬を叩いた。

「おらあっ！有栖川蓮也！目を醒ませ！早く現実世界に戻るんだあ

！」

叩く度に頬はじんじんと痛む。

「えっ…あ、あの…」

突然の蓮也の行動に少女は目を白黒させた。

だが一向に夢から醒める気配はない。

果たしてこの痛みは本物なのか？

…いくらなんでも痛過ぎる。

…ということはこれは夢でも幻でもなく、現実…？

「……………」

蓮也は頬を叩くのをやめた。

「…あの、お気を確かに…」

少女はゆっくりとした動作で蓮也の頬に触れた。

「ああ…こんなに腫れ上がってしまいました…」

少女は痛々しい微笑みを湛えながら蓮也の頬を撫でる。

その行動が一度は治まっていた蓮也の混乱をまた引き起こしていた。

何なんだ…？

この少女は…

彼女の全ての行動が自分を混乱させていた。

わざと…？

いやそんなことはないだろう。

彼女のその心から心配そうな顔を見ればそうではないことぐらいおのずと想像がつく。

だとしたら、彼女は…

……天然なのか？

天然の天使の少女。

何だか妙なフレーズが蓮也の頭に浮かんだ。

蓮也はもう一度頭の中を整理しようと試みた。

少なくとも、頬の痛みから判ることはこれが厳然たる事実であるということ。

そしてそれを根底として考えるならば、目の前にいる少女が天使と
いうのも信じざるをえまい。

蓮也がそんなことを考えていると、ふと両頬が温かい。

驚いて見ると、少女の両手が蓮也の頬を包んだまま静止していた。

「動かないでください…少しだけですけど治癒の力がありますから

…」

彼女の両手はぽかぽかと温かく、蓮也はぼんやりとその温もりを受
け止める。

そうこうしているうちに蓮也の頬の腫れは嘘のようにひいていた。

「あ…ありがとう」

蓮也は素直にお礼を言った。

すると少女は頬を赤らめながら言う。

「いえ…そんなたいしたことじゃありませんから…」

ここで蓮也はふとあることを思い付いた。

「そうだ！キズ治してもらったお礼にあんたの人探し、手伝うよ！」

その言葉に少女は目を丸くしながらも、嬉しそうに微笑んだ。

「よろしいんですか！？ありがとうございます！」

少女が勢い良くお辞儀をすると、プラチナブロンドの髪がふわりと
翻った。

それは果たして彼自身の判断であったのか？

それはまだ分からない…

「そういえばあんたの名前、聞いてなかったな？…俺は…さっき言
ってたけど有栖川蓮也だ」

「あつ…そうでしたね…私、シエル＝リヴェリーフェスと申します」

「しえる…シエルね…良い名前だな…よろしくな！」

蓮也はにかつと笑ってシエルに握手を求めた。

目の前に差し出された手にシエルは首を傾げた。

「あの…これはどういう…？」

シエルは握手の意味が分からなかった。

「握手も知らないかよ…あのね…これはね？こうやって、ぎゅつとするんだよ」

蓮也は握手の仕方をシエルに教えるために彼女の手を取り、自分の手に重ねた。

「…何だかよく分かりませんが、とってもあったかいです」

初めての握手をしたシエルはこれ以上ないほど顔を綻ばせた。

「これは初めて会った人と必ずする事なんだぜ」

自分はいつからこんなキザな台詞を言うようになったんだろう？

そんな気持ちが蓮也の中に浮かんだが、それよりもシエルの笑顔を
見て思わず笑みが溢れてしまった。

「そうなんですか…蓮也さん、ご教授ありがとうございます！」

またも勢い良くお辞儀をするシエル。

その姿を見た蓮也は苦笑をしながらも彼女の不思議な雰囲気招惹かれて
いる自分に気付いていた…

+++++

「…じゃあ君はその人を探すために下界へ来たんだ？」

アレンはシエルを丸太の椅子に座らせると、何やら台所で作り始めた。

「はい…」

背中を向けたまま謎の作業をするアレンを見ながらシエルは頷いた。

「でもわざわざ北の森で釣りなんかする人いるのかな？僕と君があ
そこから出れたことだって奇跡に等しいんだから…」

かちやかちやと食器の触れ合う音。

そして何かを注ぐ音。

暫くして振り返ったアレンの手には二つのコーヒーカップが握られていた。

「はい、お待たせ」

アレンは木組みの机にシエルと向かい合うように座るとカップをシエルと自分の前に置いた。

「あ、ありがとうございます…」

シエルは先程のアレンのご教授でこの黒い液体がコーヒーという飲み物だということを知った。

下界では一般的な飲み物だという。

恐る恐る口をつけて飲んでみる。

「…苦い…ですね」

シエルは眉毛をハの字に曲げて顔をしかめた。

アレンはその可愛いしかめっ面に苦笑いを浮かべる。

「ははっ、最初は僕もそう思ったよ…そうだ、ミルクを入れてあげるよ」

シエルのコーヒーは黒から茶へと色を変えた。

「あ…これなら飲みそうです…ずずっ…結構美味しいですね」

「それは良かった」

…コーヒーを飲み終えたシエルは頃合いを図って先程の話を切り出した。

「あの…あの森は何かあるんですか？」

「…うん、あそこは昔から悪魔が出るって噂があつてね…まあ僕もその森に入って狩りをしてただけ」

アレンは続ける。

「ベテランのハンターでもあの森はあまり近付かないんだよ…だから僕は何とかしてあの森で獲物を捕まえたかったんだ」

アレンは肩をすくめて言う。

「今思えば無謀なことをしたと思ってるよ…そこに君が墮ちてきて、それから…君も知ってるね？」

そうだった。

シエルはあの時のことを思い出していた。

溺れそうになった自分を助けてくれた少年アレン。

最初は彼の記憶を消そうと思い立ったが、命の恩人にそんなことをするのは如何なものか？

そう思った後は簡単な事であった。

彼は自分の出した依頼を快く引き受けてくれた。

「私の大切な人を探して欲しい」

という依頼を。

その後、彼のハンターとしての野性の勘と自分の『遠視』の能力で何とか北の森を抜け、今はこうしてアレンの家にいる。

ここについてから自分はアレンにまず一つの質問をした。

それは自分の探す『大切な人』に関する唯一の手掛り。

かつて天界の空中庭園で見た光景。

湖畔で釣りをする少年。

そう、あの湖畔は間違いなく北の森のあの湖畔…

つまり自分が堕ちてきた場所の光景であった。

しかし返ってきたアレンの回答は、あの湖畔で釣りをする人がいるとは思えないというものだった。

…そして現在に至る。

「けどまだ分からないよ。取りあえず他の村の人達にも聞いてみようよ。何か知ってる人がいるかもしれない」

「そう…ですね」

そう呟いたシエルの瞳はまるで何処か別の世界を垣間見ているように虚ろだった…

＋＋＋？＋＋＋

その一報は瞬間に天界中に広まった。

そしてそれはメルキエルの耳にも届いた。

その知らせを聞いたメルキエルは一人天老院の前にいた。ふといつかの思い出が頭の中に溢れ出す。

試練を受けているシイが気になりここに自分が赴いたこと。

階級と天名を与えられて喜ぶ彼女を自分は微笑みながら見ていた…
どうしてこんなことになってしまったのか？

メルキエルは憤怒と焦燥が入り混じった心を噛み締めながらある決意を固めていた。

そして、

扉を、

開けた。

「そろそろ来る頃だと思っていたよ」

堂内に入ると聞き覚えのある声が響いた。

再三天老院へ戻れとメルキエルを説得しにきたあの天使…ラゼルだった。

「やつと決心がついたか…それとも後がなくなっただか…どっちにする天老院はお前を歓迎する」

大理石の柱に身を預け、腕を組んだまま彼女は鼻で笑う。

そんな彼女をメルキエルは無視して傍を通りすぎる。

「……………」

無言のまま執務室へと歩を進める。

重い扉を開くとそこにはあの時と同じ面々が揃っていた。

中央に座る六枚の羽根を持つ老天使「サフィエル」は老いているとは思えない艶のある声で言った。

「天老院へようこそ…いや、おかえりと言った方が良いかな？」

それに対してメルキエルは一言、
こう言った。

「…くだらん」

++++？++++

その巨大な鉄の塊は悠然と海原に身を委ねていた。

そして今その鉄の塊の上に二人はいた。

「おつきいですね…お船さん…って言うんですよね…？」

吹き抜けになっっている廊下をアルバートと歩きながらシエルは声を洩らした。

足元に広がる地面は地面ではなく、下界にある大きな湖である海の上に浮かぶ船というものらしい。

船というものを見たことがなかったシエルはそれだけでも目を丸くしたのだが、さらにその船というのが通常一般的に考えられる大きさを逸脱しているというのだ。

「なんてったって夢の船…♪ s h i p o f d r e a m s ♪ だかな」

アルバートは両手を上げて歌うように言う。

しかし本当はシエルは船の大きさよりも気になっていたことがあった。

二人の周りを行き交う豪華な衣装を纏った貴婦人や紳士達の目にはシエルの余りにも簡素な服装は奇異に映った。

周囲の視線に耐えきれなくなったシエルは立ち止まって項垂れてしまう。

背中に備わっている羽根はアルバートが貸したマントによって隠されてはいたが、その服装、佇まいだけでも周りの人々には異質なものと見受けられるのだろう。

「どうした？」

アルバートはシエルの肩に手を置くが彼女は反応を示さない。

「アルバートさん…私、何でこんな所にいるのでしょうか…」

その口から出た言葉は彼女の率直な疑問だった。

何故そんな事を思ったのかは分からない。

ただ彼女は気付いていた。

ここは自分の知っている世界とは違う。

たとえ天界と下界がまるで別世界であったとしても、この世界ではそういう次元を超越した“違い”があるのだ。

「Humm…それはこっちが聞きたいぜ…取り敢えずお前、アメリカまで行くんだろ？」

「あめりか…」

また聞いたことのない単語だ。

彼女の頭の中は次々と転がり込む新しき情報で溢れ返っていた。

「あつでもお前乗船券持つてないよな…降りる時にまずいぜ…まさか空から飛び乗りましたつつても信じてもらえないだろうし…」

「じょうせんけん…おりるとき…しんじてもらえない…」

耳に入ってきた言葉をそのまま繰り返す。

そんな事しても何の解決にならないのは分かっていた。

「Hey…大丈夫か？」

アルバートの声が遠くに聞こえる。

シエルは呆然と床の一点を見つめたまま動かない。

そして……—

+++++

「…事態は君が思っている程簡単ではないのだよ。メルキエルくん？」

サファイエルは顔に深く刻み込まれた皺を更に深くしながら呟いた。その惘然とした口調からは人間らしい感情を読み取ることはできなかった。

一方メルキエルは机の上に手を組み、顔をその目前に近付け不機嫌そうに口を歪める。

「…判るように説明してくれ」

「…端的に言えば一幼天使がくだらぬ情愛にそそのかされて自ら墮天した、などという単純な事象ではないということだ」

サフィエルは淡々と事実のみを告げた後、腕を組み直した。

メルキエルはサフィエルの方を見ず、艶やかに磨き抜かれたテーブルの光沢に目を落とす。

そしてぼそりと、しかし強い口調で言い放った。

「シエルはもう幼天使ではない。…墮天する直前に大天使の位を授かった」

それを聞いたサフィエルは溜め息をつく。

「今更そんな事はどうでも良いのだよ、メルキエルくん。……私は君の知らぬ事実を知っている…無駄な議論はやめにしようではないか…」

そこまで言うときサフィエルは机に両手をつき、すつと立ち上がった。そして今までよりも更に険しく、威厳に満ちた表情でメルキエルを見下ろす。

その表情こそがこれから語られる事がどれ程肝要であるかを雄弁に物語っていた。

永き沈黙が辺りを支配した。

今、この聖堂にはメルキエルとサフィエル、二人しかいない。

その中で、

静かに、

厳粛なる、

“事実”

が語られようとしていた…

……

……

……

……

+++++？+++++

「これはこれは…可愛らしいお嬢さんだ」

ふいにアルバートとは明らかに違うしわがれた声が響き、シエルは思わず顔を上げた。

そこにはステッキを片手に持った初老の紳士が立っていた。

アルバートの姿が見えない。

シエルは慌てて辺りを見回そうとして自分のすぐ隣りにアルバートがいるのに気付く。

「What's the matter...？ばーっとして…」

「いえ…あの、この方は？」

それを聞くとアルバートは溜め息混じりに言った。

「Hey：聞いてなかったのか？この人は俺のパトロンのルドルフ
「エルゴーウエン（Redarfe「Elgornwenn）さんだ」
「またもや理解できない単語が頭をかすめたが、状況からして今自分は目の前にいるルドルフなる人物に自己紹介しようとしているようだった。」

「えっと…シエル「リヴェリーフェスです…よ、宜しく願いします…」

「こちらこそ、以後お見知り置きを」

ルドルフと呼ばれた紳士は涼やかな微笑を浮かべながらシエルに握手を求めてきた。

シエルは素直に彼と握手を交した。

そこでふと、彼女は不思議な感覚にとらわれた。

…握手。

この握手という行為…

一体何処で教わったのだろうか？

自分の知る限りでは天界でこの様な習慣はない。

なのに今自分は何の抵抗もなく“握手”をした…

…ふと心に湧き上がるものがある。

酷く曖昧な、心を覆う霧を縫うように見え隠れするイメージ。

それは……—

………

『これは初めて会った人と必ずする事なんだぜ…』
ふいに誰かの声が聞こえたような気がした…

++++++

その後、アルバートは画描きをやっており、そのパトロン（経済的援助者）なのがルドルフという人物であることがアルバートの説明で判明した。

「アメリカでの展覧会を楽しみにしているよ」

「はい！期待に応える出来だと確信しています」

アルバートとルドルフがそんな会話をしている間、シエルは何か疎外感のようなものを感じざるをえなかった。

自分とは遠い場所・世界の話が目の前でされている…

本来は耳に入ることなどない、目で見ることもないものがこうして眼前でありありと繰り広げられている…

それはまるで遠近感を失った世界。

遠い物が近く、近いものが遠い。

かつてこれほどまで現実感を見失ったことがなかったシエルは困惑した。

それと同時に、“この世界”を飛翔するかのように俯瞰して見ている

自分に驚きを隠せなかった。

それはまるで今この場に自分が存在していないと錯覚してしまうようだった。

…『お前はここにいるべき存在ではない』

誰かにそう言われたような気がした。

得体の知れない何かが自分を陥れようとしている。

シエルはうまれて初めて恐怖を感じた。

下界に堕ちたのは過ちだったのか？

そんな考えが一瞬頭をよぎる。

何も知らぬ天使が下界に行くこと自体無謀なことであっただのか。

よもやこんな理解不能の事態に遭遇するとは当然だが彼女は全く予期していなかった。

彼女はただ、自らの愛しい人に逢えればそれで良かったのだから。

しかしその“目的”こそがこの事態を歪曲している原因に他ならなかったのだ…

3rd Wing “Three-way love” (後書き)

2ndもそうでしたが、ここら辺は書くのが楽しくてたまりませんでした(笑) シエルと彼女と出会った少年の漫才のようなやり取り・この作品屈指のギャグシーンです(笑)

4th Wing “One eyed charity” (前書き)

下界へと堕ちたシエルの身に起こったのは、三人の少年との『捻じ曲がった』出会いであった。

果たしてこれは彼女に何をもたらすのか？

4th Wing“One eyed charity”

+++++

「…全滅とはね」

部屋に戻って来たアレンは開口一番、こう言った。

「そうですね…」

シエルも残念そうに言う。

「仕方ないさ…また別の方法を考えよう」

アレンは疲れた体を椅子に座らせると溜め息をついた。

果たして、『シエルの想い人探し』を決行したアレンとシエルは村の人々に聞き込みをした…までは良かったが、何一つ有力な情報を得ることが出来なかった。

村人は口々に言った。

「あんな物騒な森で釣りをする奴なんて絶対にいない」

アレンにとってはある程度予期していた答えでもあったが、流石にシエルには堪えたようだった。

アレンは向かいに座っているシエルを見た。

肩を落とし、頂垂れる様は真摯に心の傷を噛み締めているようで痛々しい。

所詮アレンにとっては他人事。

しかし当のシエルにとってはそれが全て。

その人のために下界に堕ちてはいけないという禁を犯してまでここに来たのだから。

その決断が、見た目はアレンよりも年下に見えるシエルにどれほどの心的労働を強いたかは想像に難しくなかった。

アレンは静かにシエルの隣りに座ると彼女の金白の髪こはくを撫でた。

「あ、…あの」

驚いて身を縮こませたシエルをアレンは苦笑しながらゆっくりと抱き寄せる。

「なあシエル…少し疲れただろう？…眠りなよ」

彼女の身体は真っ白なワンピースの上からでも指でなぞれば如実に判る程すべすべしており、いつまでも触っていたいと感じてしまう。

「えっ…あつても」

何か言いかけたシエルの口をアレンは人差し指と中指で塞ぐ。

何も言わずにアレンはシエルを抱き留めたまま長椅子に倒れ込んだ

…

？

そお…つと、

慎重に、

蓮也は家の扉を開けた。

開いた隙間から首だけを中に入れ、様子を伺う。

玄関に人影はない。

リビングに続くドアのガラスは、向こう側の部屋に灯りがついていない事を教えてくれた。

「よし…お袋はいないみたいだ」

この時間ではまだ父親は帰ってきていない。

今がチャンスだった。

「いいぞ、入れよ」

そう言いながら蓮也は自分から少し離れてその様子を見ていたシエルを手招きした。

「そ、それでは、お邪魔します…」

シエルは幾分緊張した面持ちで蓮也に続いてドアに入った。

「ここが蓮也さんのお住まいですか…」

シエルはおずおずと床に足を上げると物珍しそうに辺りを見回した。

「別に普通の家だぜ？…まあ天使のあんたには珍しいのかな。来いよ、俺の部屋はこっちだ」

シエルが案内されて登っていった二階には散らかり放題の蓮也の部屋があった。

「あゝ…すまん、片付けるの忘れてた…」

部屋の広さは六畳くらいはあるのだろう。

しかし今の状況ではその広さは半分とも思える程となっていた。

しかし部屋に散りばめられた種々雑多の小物は（少なくとも）シエルにはとても魅力的に見えた。

「うわあゝ…この書物は何ですか？一つ一つは薄いですけど数がこんなにたくさん…」

そう言いながらシエルは床に散らばっていた蓮也の『エロ本コレクション』に手を伸ばす。

「わあゝっ！！それはダメだ！！こっちによこしなさい！！」
すんでのところで蓮也はシエルの目からそれを隠蔽する事に成功した。

だがシエルの好奇心は尽きることはない。

何しろどっちを向いても物だらけ。

シエルは手当たり次第に見つけた物を目を輝かせながら観察する。

その度に蓮也は押し入れの中、ベッドの下、机の一番下の引き出し、カーペットの下、果ては天井裏まで…ありとあらゆる隠し場所にソレらを移動した。

その結果、数十分後には最初に入った時とは見違える程蓮也の部屋は綺麗になっていた。

結局、図らずともシエルのおかげで部屋の掃除が出来てしまったわけだ。

「なはは…何かお世話になっちゃったな」

蓮也はすっかり元通りの広さを取り戻した自分の部屋を見渡しながらバツが悪そうに言った。

「いえ、こちらこそ色々見させて貰って面白かったです!」
シエルが畏まってお辞儀をするとプラチナブロンドの髪は嬉しそうに翻った…

?

「さてと…」

すつきりした自分の部屋を見回しながら蓮也はゆっくりと立ち上がった。

「色々あつて疲れたろ。何か飲むか?」

蓮也がそうシエルに話しかけたその時だった。

「蓮也? 帰って来てるの?」

階段をのぼる音と共に女の声が聞こえた。

シエルは当然その声の主を知らない。

「あの声は…誰ですか?」

のほほんとした口調で蓮也に尋ねる。

しかし蓮也の顔色は既にその質問に答える余裕がない事を物語っていた。

「や…やばいつ!! お袋だ!」

蓮也の行動は素早かった。

「ごめんっ!!」

その言葉と同時に蓮也はシエルをひょいと抱き上げ、ベッドに放り投げた。

蓮也は身体の小さなシエルをいとも簡単に持ち上げることができた。

「わぁゝ、何するんですか!? えっ? きゃゝ」

そのまま布団をシエルの身体全体を覆うようにかける。

そしてその上に蓮也はのしかかった。

…っと言っても本気でのかかっているわけではなく、体重を半分浮かした非常に苦しい体勢で蓮也は静止していた。

こうすれば端から見るとベッドに寝転がってくつろいでいる蓮也一人にしか見えないはずだ。

…多分。

程なくして部屋の扉が開く。

「蓮也、帰っているなら一声かけてよ…」

仕事帰りのスーツ姿で蓮也の母親は入って来た。

「う、うん。ごめん！今日は早いね…」

蓮也は笑顔をひきつらせながら喋る。

「今日は偶々よ。明日は遅くなるから冷蔵庫にあるもので食べなさいよ」

「うんわかった」

脇腹が悲鳴をあげている。

限界が近い。

背中の辺りでは何かもぞもぞと動くものがある。

どうやらシエルの方も…

「それで何やつてるの？」

「何って…寝てるんだよ。見て分からない？」

彼女は不審気な顔する。

「……………」

限界が近い。

限界が…近い…

「……………じゃあお休み」

彼女はそれ以上詮索せずに部屋を出ていった。

「……………」

念のために2分程その体勢を維持した後、蓮也はベッドに「ごろんと転がった。

「ぶひゅ〜っ！！危なかった…」

それと同時に隣りの布団の膨らみがもぞもぞと動いたかと思うと、中からシエルが顔を出した。

「はあ…はあ、苦しかったですう…」
その顔はずっと息を止めていたせいか、ほんのりと赤味がかっている。

「あ、暑いです…」

惚けたように身体をしなだれかからせる。

それも蓮也の背中に。

「わ、わぁ！やめろって」

蓮也は思わず押し返そうとするが、ふと思いとどまる。

『これは…まさか据え膳！？』

しかしその考えを蓮也はすぐさま打ち消した。

何を馬鹿げたことを考えているんだ。

相手は子供だぞ？

それと同時にそこまで追い込まれていた自分の欲求に心底嫌気がさした。

「暑いです…」

小さな両手を使って一生懸命風を扇ぐその姿はとても可愛らしかった。

心が和む。

「そうだ！風呂入れよ。さっぱりするぞ」

火照った顔を傾げてシエルはか細い声をあげる。

「ふろ…？何ですかそれは？」

「おいおい、風呂も知らないのかよ…風呂ってのはな、身体を綺麗に洗う事だよ」

するとシエルは驚くべき言葉を口にした。

「どうして洗う必要があるんですか？」

「何言ってるんだよ。毎日生活していると汚れたりするだろ？」

蓮也はさも当たり前のように答える。

だがその常識はシエルには通用しなかった。

「天界には汚れたものが一切ありませんからそのような風習はない

です…」

さらにシエルは続ける。

「…ですから蓮也さん、よろしければ私にその『ふろのはいりかた』というのを教えて戴けないでしょうか？」

なんということを書いて出すのだろうかこの少女は。

確信犯か？

いや、恐らく本人はその言葉の意味することを知るまい。

このテの女の子を扱った事など勿論経験のない蓮也は困惑の極致に放り込まれた。

『落ち着け！相手は子供だろ！何を考えている有栖川蓮也！』

蓮也の思考はめまぐるしく回転し始める。

ここで選択を間違えれば自分は人の道を踏み外すかもしれない。それほど重要な局面なのだ。

蓮也は散々考えた後、慎重に言葉を選んでこう言った。

「まあ、何と云うか…習うより慣れるだよ！」

シエルは愛らしく首を傾げている…

？

シエルを風呂場に連れていった後、蓮也はどうしたものかと思案を練っていた。

やはり自分はここにこれ以上留まっている訳にはいかない。

手短に説明をして何とか彼女に理解してもらおう。

蓮也はそんなことを思いつつ『ご教授』を開始した。

「ここは脱衣所って言って、ここで着てる服を脱いでからこの先の部屋にある湯船に身体を浸すんだ」

こんな事を説明するのは初めてなのでどう説明して良いのか分からなかったが、とにかく相手に分かってもらうことを念頭に置いて蓮也は必死に続けた。

「服？」

シエルはまたも首を傾げる。

「おいおい…冗談はよしてくれ。今あんたが着てるワンピースのとだよ！後は習うより慣れろだ」

これ以上彼女に質問されれば終いにはとんでもないことを聞かれそうなので、急いで風呂場を後にすることにした。

「れ、蓮也さん」

ガラス戸一枚隔てた向こうからシエルの声が聞こえる。

「何だよ？まだ聞きたいことがあるのか？」

「あの、口で説明するのは難しいので…こちらに来ていただきませんか？」

「それは出来ん」

蓮也はガラス戸に背中をつけたまま答える。

「…えと、わんぴーす？が脱げないんです。助けてください」

「…どうしてだよ？」

「手が…届かないんです」

蓮也は思わずガラス戸を振り返り、呆れ顔で溜め息をついた。

「そ…それ位何とかしろよ…」

「そう言われても…」

暫くそんな押し問答が続いた。

そんな中、蓮也はこっそりとガラス越しに彼女を盗み見た。

擦り硝子の曇ったフィルター越しに朧気に見える彼女のシルエットは、白かった。

+++++

耳に溢れる程の喧騒が満ちる中、アルバートとシエルは人混みの間を歩いていた。

二等・三等客室にて行われる恒例のパーティーに出席するためである。

「す…凄い熱気です」

人口密度が極端に高いダンスホールでもみくちやにされながらも、シエルは必死にアルバートの手を繋ぎ止めた。

「Hey！来いよ！一緒に踊ろうぜ」

引かれた手はやがて舞台らしき小さなスペースへと導かれる。

軽く慣らすように二三ステップを繰り返した後、アルバートは右手をシエルに差し出す。

「で、でも私……」

シエルは口ごもりながらもおずおずとアルバートの手を取った。

「Yeah！そうこなくっちゃな！」

その手を掴んだアルバートは勢い良く体を弾ませながらステップを刻む。

何処からか聞こえてくるアイリッシュ風味溢れる調べに^{なぞら}準えながら。

「すすステップがわわ分からななないでです」

激しく体を揺さぶられながらシエルは震えた声を洩らす。

「適当で良いさ！何も考えなくて良いんだよ！」

余りにも自分の持つ世界観とはかけ離れた周囲の雰囲気^{なぞら}に初めこそ戸惑ったシエルであったが次第にその熱気に気圧されてか、心底楽しんでる彼女がそこにはいた。

「アルバートさん凄いです！」

出鱈目なステップを床に打ち付けながらシエルは自分のパートナーのダンステクニクに目を丸くした。

「あははっこんな適当だよ適当」

二人の熱を持ったやり取りに触発されて周囲の乗客達も一層白熱した踊りを披露する。

そこで繰り広げられたのはある種、異様なまでの興奮だった。

「よし、シエル一人で踊ってみるよ」

くるりと身体を反転させ、アルバートに全体重を預けていたシエルはなすがままにされる。

「えっ私一人ですか？」

アルバートは軽やかにシエルの身体を宙に浮かせると、一際高くなっている高台に降り立たせた。

そこからは多数の乗客でひしめき合っているダンスホールが一望出来た。

恐らくここは名うての踊り手が皆をリードするために踊る場所なのだろう。

無論、シエルにはそんな事は知る由もない。

皆の視線が自分に集中する中、彼女は恥ずかしそうに口を開いた。

「えっと…それでは私の故郷に伝わる舞踏を披露します…」

そこで一旦言葉を切ったシエルは、すつと左手を天に翳した。

掌もまた天に。

反対の手は身体の上をなぞるように滑っていき、やがてそれが開始の合図となった。

しなやかに四肢の関節が動く。

その一挙手一投足全てが柔らかく、人間には不可能なまでの尊厳を伴った『動き』であった。

それは堂々としているのに奢りがなく、その上繊細な動作。

いつしかシエルの纏っていたマントは外れ、その純白の羽根をも群衆の面前に晒していた。

そうして、シエルは『天使の舞踏』を人間達に披露した。

誰も口を開かなかった。

誰も動けなかった。

ダンスホールは水を打ったような静寂。

それは当然なのかもしれない。

こんなにも近くに、しかもこんな形で自分らを超越した存在を目に認めてしまったのだから。

それは、畏敬の念となってシエルに跳ね返ってくることになる。

そしてこれはある意味でこの船の運命を決定付けた出来事でもあった。

++++？++++

「うーん…素晴らしいものを拝見しました…あの身のこなし、優雅な動き。心が洗われるようです」

誰もいなくなつたダンスホールでルドルフは顎にたくわえられた髭を触りながら感嘆の声を洩らした。

「そんな…恥ずかしいです」

シエルは頬を染めながら恥ずかしそうに俯く。

それを受けて隣りにいたアルバートは妙に神妙な顔つきで呟いた。

「お前…本当に天使なんだよな」

『天使』という言葉にシエルはびっくりと身体を震わせる。

「あ、アルバートさん？！その事は…！」

言いかけたシエルの声をアルバートは遮るように言い放った。

「良いじゃねえか。どっちにしろもう半分はバレてるのと同じだ」

その後、アルバートはたつぷりと間を置いてからその事をルドルフに話した。

「何と…初めお会いした時からただのお嬢様ではなかったとは思っていましたが…よもや天使、とは。すると背中にある羽根のようなものもイミテーションでは なく…？」

シエルはバツが悪そうに頷いた。

「隠していてごめんなさい…アルバートさんに秘密しおいてと私が頼んでおいたので…」

「いやはや、よく話してくれました。普通の人々なら到底信じない事でしょうが、安心して下され。私は貴女様を信じますぞ」

「…ありがとうございます」

そうシエルは返したが、内心不安は募るばかりだった。

自分の素性が知れて何か厄介な事が起こらなければ良いが、と。

そしてそのシエルの懸念は決して杞憂ではなかった。

「一つ私から提案があるのですが、よろしいですか？」

唐突にルドルフは両手を広げて言った。

「次の絵のモデルをシエル嬢にしてはどうでしょう？ アルバート君」
「…シエルを絵のモデルに？」

そう呟いた後、アルバートは顎に手を当てて考え込んだかと思うと、おもむろに両手の指で長方形を作り、その中にシエルを閉じこめた。画家が絵を描く時に構図を決める常套技である。

指で形作られた長方形の中からアルバートの目がシエルを見つめている。

その目は画家としての真剣な眼差しで、こんな目つきのアルバートをシエルは初めて見た。

何だか自分が品定めされているようで落ち着かない。

「きつと素晴らしい絵が出来ると思いますよ…」

「いけるな」

それだけ呟くとアルバートはシエルに向かって言う。

「…と言うわけだ。お前さえ良ければ絵のモデル、頼まれてくれな
いか？」

そうシエルに頼んだアルバートの瞳は活き活きと輝いていた。
断れる筈がない。

シエルはあっさりと承諾した。

「あ、あの私でよかったですね…」

「よしっ！ 久々に本気で絵が描けそうなモデルだな！ 何てったって
本物の『天使』だぜ？」

「今回の展覧会の目玉の絵になるのは間違いないみたいですね」
アルバートとルドルフは意気投合しながら話している…

++++？++++

次の日に早速作業は開始された。

場所はアルバートの二等船室。

シエルは中央にあるソファに座り、アルバートが来るのを待っていた。

何だかそわそわしてしまう。

自分の姿をカンバスに写し取られる。

それを考えると意味もなく身体がぞくぞくした。

ふいに部屋の扉が開く。

「お待たせ」

片手に大きめのカンバスを抱え、もう片一方の手には太い鉛筆を何本か携えたアルバートが入ってきた。

そのまませつせと準備を شدしたアルバートにシエルはわたわたしながら話し掛けた。

「あつ…あの！どの様な感じの絵を書くんですか？」

イーゼルを組み立て終わったアルバートは一息ついた後にシエルの質問に答えた。

「それは今から決めるさ。俺としてはお前のその清純な雰囲気が生きる構図が良いと思ってるが」

「そ、そうですか…」

シエルは複雑な表情を浮かべたままソファに戻る。

アルバートに向き直ったシエルの頬はほのかに紅潮していた。

「それでは…よろしく願います」

そう言い残した後、シエルは何を思ったのか、自分の着ているワンピースに手を掛けた。

折れそうな程に細い腕を背中にそつと持っていき、腰の真後ろに隠れていた真つ白なりボンを解く。

すると彼女の身体をゆったりと包んでいたワンピースの生地が更に弛む。

そしてなだらかな肩からワンピースはいとも簡単に滑り落ちた。

後に残ったのは彼女の日に晒されていない白磁のような肌のみであった。

「お、おいっ！？シエル？！」

突然のシエルの行動にアルバートは困惑しつつも彼女に問うた。

「は、はい？」

恥ずかしそうに胸の辺りを手で覆い、ソファにぺたんとしやがみ込みながらシエルは返事を返す。

その声は羞恥のためか上擦っていた。

「どうして脱ぐんだよ？！俺は裸体スケッチをするとは一言も言っていないぞ」

「えっ？えっ？でも姿を写し取るのならありのままをと思いまして……でも一人でちゃんと服が脱げましたよ！褒めてください！」

恥ずかしさを紛らわすようにシエルはいつになく大きな声を出して言った。

「おい……何の事だ？」

アルバートはぽかんと口を開けて呆気にとられながらも言葉を返す。

「えっ……でもさつき『習うより慣れる』と……」

言いながらシエルは「まだだ」と思った。

知るはずのない記憶。

というよりも、不可解なまでの記憶の食い違い。

今何を覚えている？

今何を思い出した？

そんな些細な事さえも今の自分には複雑怪奇な難題のように思えてしまう。

しかし最早慣れてきた部分が多いのか、シエルは半ば開き直ったようにこう言った。

「あっ……すみません……何かの勘違いです」

そうして、ソファの上に散らばった自分の衣服を拾い始める。

「お、お見苦しい所を見せましたあっ」

しかし恥ずかしさの余りその動きはぎこちなかった。

「あっ……ちよつと待てよ」

丁度シエルが腰に結わえていた白いリボンを手を取った時、アルバートは不意に呼び止めた。

「それを…ちよつと肩に掛けてみてくれないか」

シエルは自分の手にある「それ」と形容されたものを見る。純白のリボンであった。

ワンピースを着る時、緩めに腰に結わい付けて固定するものだ。

その生地は頼りないくらいに薄く、乗せられているシエルの手が透けて見える程だった。

「…こうですか？」

シエルはリボンを首筋に滑らせるように通し、両端を肩口から垂らした。

「それからそれを腕に掛けてみて」

言われるがままにシエルはさらにリボンを両腕に巻き付けた。

「立て膝になって左手を翳して」

さらにアルバートの指導は続く。

「は、はい」

どうやらふとした事から彼の芸術魂に火を付けてしまったようだった。

シエルは素直にその指導に従う。

外気に晒されたままの自分の身体に羞恥を感じながら。

「視線は左手の先に。右手は胸に添える感じで」

「…こうですか？」

シエルは頬を赤らめながらもアルバートの要求通りの姿勢を形作つた。

「うん…これだ！これが俺の求めていた構図だ！」

アルバートは感極まったといった感じで呟いた。

「そのままじつとしてくれよ」

アルバートはそう言いながらカンバスに鉛筆を走らせる。

「……………」

どれくらい時間が経っただろうか？

既に数時間が経過したように感じたが、実際は10分も経っていない

いかもしれない。

部屋のドアは閉め切られており、自分の身体が他人に見られることはない。

その上、薪がくべられた暖炉によって室温は何も纏っていないくとも快適な温度に保たれていた。

しかし何故だろう。

先程から身体の奥のもやもやしたものが抜けない。

焦燥感に似たじりじりした感触がシエルを追い立てていた。

時計を見ようと目線をずらした所、すぐにアルバートに注意されてしまった。

その後もシエルは自分の中に生まれた感情を処理出来ずにやきもきしながら絵の完成を待つことになる…

+++++？+++++

鉛筆を片手に握り、親指を添える形でアルバートは筆先をシエルへ合わせている。

それはスケッチする対象の目測を測る術なのだが、シエルにはそれが興味深かくてしょうがない。

鋭利に研がれた筆先とアルバートの片眼が重なる。

その瞳にシエルは静かに魅入っていた。

自分と、アルバートの瞳の間にあるのは冷たく尖った筆先。

身体全てを射竦められているかのような、いやそれよりもっと深き戒めのようなもの。

もしも彼女がもう少し思慮深く成長した天使であつたなら、この時点で自分の身に起こった過去、現在そして未来の全ての事について理解することが出来たかもしれない。

しかし彼女にそれを求めるのは酷というものか。

とふいにアルバートは肩の力を抜いて姿勢を解いた。

「ふう…ちよつと休憩するかな。シエルも疲れたんじゃないか？楽にして良いよ」

その言葉が合図であつたかのように、先程までシエルを取り巻いていた不可思議な感覚は何処かへ息を潜めていった。

それまで構つていなかった羞恥心をシエルに残しながら。

「え、ええとつ…はい…」

忘れていたように頭が熱くなるのを感じた。

ぎくしゃくした動きでソファの下に散らかつていた自分の衣服を掴むと胸元の辺りに手繰り寄せる。

そんないじらしい仕草を見てアルバートは困つたように頭を掻きながら言つた。

「おいおい…今更そりやないだろ？さつきまではどうしてたんだ？」

しかしその問い掛けに答える余裕はシエルには無かつた。

今の彼女には羞恥に打ち負かされそうで、何も行動に移す事は出来なかつた。

真つ白のワンピースに顔を埋めて真つ赤になつた頬を冷やす以外は。

「やれやれ…でもまあ安心しな。もう粗方完成したからよ…ほら」

そう言いながらアルバートはカンバスが置いてあるイーゼルをくりとシエルの方に向けた。

そこには真つ白なカンバスの中に静かに佇む自分の姿があつた。

しかしそれには決定的に自分とは違う場所があつた。

それは…翼が描かれていないのである。

他の部分は完璧と言つて良い程自分と寸分違わぬ出来であつた。

しかしその写された自分の背中に目を移してみると、そこには一枚の羽根も描かれておらず、まっさらな背中があるだけであつた。

他の部位に隙が無いせいだろうが、余計に不自然な感触を感じる。

天使にとって翼は象徴でもあり、命でもある。

それを持たぬカンバスの中の自分はまるで魂の抜けた抜け殻のようにも見えた。

そしてその描き方は意図的にやったとしか思えないという事もまた、事実であつた。

シエルがただならぬ雰囲気を感じて立ち上がるうとしたその時、足を滑り落ちて支えてくれる筈の床が突然暴走を開始した。

「きゃああああっ!？」

床はまるで踏みしめられる事を嫌うかのように、強烈な振動と轟音を響かせながらシエルを自分の上へと引き倒す。

傍らにいたアルバートもバランスを崩し、とつさに掴まつたイーゼルをひっくり返しながら床へ倒れ込んだ。

乾いた木の音と共に『翼の無い天使』の絵は床に転がった…

+++++

？

海に浮かぶ巨大な鉄の塊。

「TITANIC」と刻印された船尾から白い泡を吐き出しながら、それは闇夜の大西洋を突き進んでいた。

この船に乗る人の数は2200余名。

一際高い場所にある見張り台にて前方への警戒をしていた見張り役二人もまた、その中に含まれた乗員であつた。

デッキから十数メートル高い場所にある見張り台は下に比べて風が強く、二人は白い息を吐き齒を鳴らしながら前方を見据えていた。

「Hyuuu! しかし寒みな…」

悴んだ両手を摺り合わせて見張り係フレリック・フリート(Fredrick Fleet)は震えた声で言う。

「今頃一等の客達はあつたけえ寢床でオネンネか…なのにこんなクソ寒い中俺らは前方警戒つちゅう任務を授かつてるワケだ」

見張り係のリー(Lea)は末端まで冷え切っている掌を両脇に挟み込んだまま少しヒネた口調で呟いた。

「何だよ相棒、愚痴かい？」

「Hummm…そんなんじゃないよ」

二人はそんな他愛も無い会話をしつつ、しかし船の行く手である前方に広がる暗海を見据えていた。

その時である。

ちくちくと輝く星達と群青色の海とは違ったものが二人には見えた。白い『もや』だった。

ぼんやりと前方の少し前辺りを霞みがかったように隠している。

「What？」

フレデリックは次第に濃くなり始めた霧に向かって目を凝らした。

リーも同様にフレデリックの視線の先を追う。

そしてその白の霧から姿を現したのは、目測で17～18mはあるうかという冰山だった。

「Bugger me！（なんてこった！）」

フレデリックはすぐさま警告鐘を三回、強く打ち鳴らした。

その乾いた金属音はその時操舵の任にしていたヒッチング操舵手の耳に届いた。

しかし手が離せない彼にはそれがどんな警告を意味するのかは分らなかった。

フレデリックはブリッジへの直通電話を手取る。

「Pick up, you bastards！（クソ！早く出る！）」

フレデリックにとっては長すぎる四回目のコールの後、その電話を受けたのはムーディ（Moody）六等航海士であった。

「Is someone there?（おい！誰がいるか?）」

「Yes. What do you see?（ああ、一体何事だ?）」

ムーディはミルクティーを片手にのんびりとした口調で言った。

「Iceberg right ahead！（前方真っ直ぐに冰山だ!）」

「Thank you.（わかった）」

ムーディはすぐにブリッジの外にいたマードック一等航海士へ大声で報せた。

「前方に冰山あり！！」

「前方に冰山だ！」

復唱するようにマードックはヒッチングへの指示を出す。

「Hard to starboard！（取り舵一杯！）」

「取り舵一杯、アイアイサー」

ヒッチングは持っていた舵を勢い良く左へと回し始めた。

指示を出してすぐにマードックは機関室への指示をしようとブリッジ内部へと走った。

ムーディの持っていたミルクティーをぶちまけながら。

『全速後進』の号令が機関室に伝わった時、ベル（Bell）機関部長を始め乗員達は皆遅めの夕食をとっている最中だった。

ベル機関部長は持っていたスプーを取り落として大声で叫んだ。

「Full astern！（全速後進！）」

その声に合わせて乗員達は急いで配置につき始める。

その頃、操舵室のヒッチングは舵を回す手を止めていた。何故ならこれ以上舵を回すことは出来なかったのである。

「Hard over！（取り舵一杯です！）」

動かなくなった舵を手で固定しながらヒッチングはムーディへ叫んだ。

「舵は一杯です！」

ムーディはデッキに飛び出し、マードックに向かって報告する。

機関室では乗員達が蒸気圧を下げるバルブを懸命に回していた。合わせてボイラー室の蒸気弁が次々に閉じられいく。

ベルは蒸気圧計を見ながら乗員達に呼びかける。

「Hold it！（慎重に）」

蒸気圧が下がったことによりエンジンの出力はみるみる下降していく。

そして出力が限界まで落ちた瞬間、ベルは大声で言った。

「Now! Engage the reversing engine! (今だ! エンジンを逆回転に切り換える!)」

乗員の一人が重苦しい金属音とともにレバーを下げた。

すると今まで右回転していた巨大な金属のアームがゆっくりと速度を落とし、静止した。

逆の方向へと回転し始めるまでの長過ぎる静止。

乗員、そしてベル機関部長は歯痒い思いでそれを見守った。

やがて余剰していた蒸気圧でようやくエンジンは逆回転し始める。

次は一度下がった蒸気圧を再び上げるため、バルブを逆方向へ回す乗員達。

エンジンは活力を得たように再び高速回転しだす。

見張り台のフレデリックとリーは目の前に迫り来る冰山に苛立っていた。

「Why aren't they turning?!(どうして曲がらないんだ!)」

しかしそれはデッキにいたマードック一等航海士も同じであった。

「舵はもう一杯なのか!」

「はい! もう一杯です!」

マードックは祈るような気持ちで前方の冰山を見つめていた。

「曲がれ…曲がってくれ…頼む…曲がってくれ…」

4th Wing “One eyed charity” (後書き)

どんどん訳が分からなくなりますね・・・(苦笑)

でも何とか書きを書いていますので気長にお待ちください
それはそうと、更新の間が空いてすいませんでした

5 t h w i n g “ B r o k e n L o v e r s ” (前 書 き)

逃れられない宿命が豪華客船を覆う。

シエルは数々の局面で心身共に痛手を受けながらも、やっとのことで自分の螺旋の運命を悟る。

しかし運命は彼女を置いてけぼりにしようする・・・

5th wing “Broken Lovers”

+++++

？

彼女には『視』えた。

沢山の恐怖、破壊、そして死…

頭の中に溢れかえるそれら負のイメージはシエルの心をいとも簡単に噛み砕いた。

「いやああああああああ…」

頭を掻き乱して少女は絶叫する。

その瞬間、彼女の意識は闇に溶けた。

気がつけば身を切るような冷たい風の中、シエルはうずくまっていた。

露出した肌全てをひんやりと包む外気は、そこが屋外であることを朦朧とした意識のシエルに教えてくれた。

ゆっくりと立ち上がった彼女は、辺りを見渡そうと頭を振る。

しかし唐突の目眩がその行動を中断させた。

よろめいた身体を立て直そうと足の位置をずらす。

そうしてようやく彼女は周りの状況を視察する事が叶った。

足には冷たい金属板の感触。

時折聞こえる漣の音と低く響く蒸気機関の音。

そして何より決定的なのは彼女の眼前に広がる切りだった崖のようにも見える船首だった。

甲板に彼女は立っていた。

彼女はこの船の進む方向、つまり船首の先をぼんやりと見た。果たして自分は何故こんな場所にいるのだろうか？

先程まで確かにアルバートの二等船室にいた筈なのに。

そんな疑問と共に何か重要な事をついさっき知ったような気がした。何だろうか？

忘れてしまったのだろうか？

それともまだ知らなかったのだろうか？

混乱する思考を持て余していた彼女を正気に戻したものは、彼女の予感したもののそのものであった。

白いもやから現れた巨大なモノ。

真っ白な巨体はこの手で直に触れなくとも、それが極低温の物質であることが見て取れた。

その物体の名前を知らなかったシエルだが、それこそが彼女が感じた負のイメージと重なっていた。

二度と見たくは無いあの悪夢。

我に還ったシエルはどうすべきかを瞬時に考えていた。

誰かに知らせなければ。

しかし誰に？

辺りを見回してみても人気はない。

誰か……誰かいらないだろうか？

彼女が視線を上に向けた時、ふと目に入ったものがある。

見張り台だった。

背の低い彼女にとってそれは遙か上空にある高い建物に見えた。

しかし他に手段は無い。

彼女は声を限りに叫び、危険を報せようとした。

「……？おい、何だあれは」

見張り役のフレデリックは船首甲板に立つ一人の少女を見つけた。

同じくリーもその少女の姿を認めた。

月明かりに照らされて輝く白金の髪に、遠目で見ても判る抜けるよ

うに白い肌。

そして何よりその背中に湛えられた純白の翼が二人の目を惹いた。

「……天使？」

惚けたようにフレデリックは一言、呟く。

少女の声は二人には聞こえない。

その後二人が少女の背後に巨大な氷山が迫っている事に気付くのはそれから暫し経ってからであった。

毅然とした顔つきで彼女は翼を大きく広げる。

淡い光は最初は弱く、次第に強く彼女を包み込んでいった。

少女は目前に大きく立ちはだかる氷山を一瞥すると、恨めし気な瞳で見張り台にいる二人を見つめた。

彼女の心を蝕むものは何か…

同じ頃、ブリッジにいたマードック一等航海士も光輝く天使の少女を目撃していた。

「……何なんだあの少女は？」

「シエルの奴一体何処へ行ったんだ？」

船首に赴いたアルバートはやっとシエルの姿を見つける事が出来た。

「！」

しかしその瞬間船首に立つ彼女のすぐ後ろのフェンスを舐めるようにして氷山が、船と接触したのだった。

「危ない！」

アルバートは床を蹴って彼女に飛びつく。

船体に削られた氷山の破片が甲板に乾いた音と共に降り注ぐ。

シエルを抱き起こしたアルバートは困惑した口調で言った。

「一体何があつたんだ？いきなりいなくなりやがって…しかも今は氷山？シエル、何を知っている？」

しかしその呼び掛けにシエルは答えない。

唇を震わせながら焦点の合わない瞳を空に向けて晒しているだけで

ある。

「おいっ！！しっかりしろ！！」

すると彼女の目の奥に微かに光が灯る。

「……………見」

震える唇がゆつくりと言葉を紡いだ。

「たん……………です…みんな、死ん」

彼女の腕が緩慢な動きでアルバートの首に巻き付く。

「嫌あ」

そのままシエルはアルバートの胸に顔を埋め、声を殺して泣いた。

何とかシエルを落ち着かせたアルバートは部屋へと戻ろうと、彼女の手を引いて二等船室の廊下を歩いていった。

「おいっ！あんた！早くこの救命胴衣を着けて甲板へ行け！ここにいちや危ない！」

突如話し掛けてきたのは見知らぬ船客だったが、彼は空いていたアルバートの手に救命胴衣を掴ませると一目散に走り去っていった。

「おう、ありがとよ…さっきの冰山か…かなりヤバイみたいだな」

アルバートは腰を降ろしてシエルと同じ目線で呼び掛けた。

「シエル、これから俺達避難するけどもう大丈夫だな？」

しつかりと蒼い瞳を見据えたその言葉は彼女にとって何よりも心強いものとなる筈だった…

+++++

？

真っ直ぐに見つめられた瞳。

シエルはその目に魅入られるようにして微笑む。

それと同時に、ある事を思い出した。

「…絵」

はつとした口調で彼女はアルバートにその事を打ち明けた。

「あの絵を取りに行かないと…」

「ああっ？そんな場合じゃないだろ？シエル…急がねえと」

「いけません。あの絵は貴方が一生懸命私を描いてくれたものですから…」

シエルはアルバートの腕を弱々しくも掴んで引き留める。

「んな事言ったって…」

「…お願いします」

アルバートも最後は彼女のその真剣な眼差しに負けた。

「…分かったよ。だがあまり時間は無いぞ。良いな？」

「ありがとうございます」

甲板から船内に降りた二人はアルバートの船室に急いだ。

しかし二等船室の区画への通路は既に閉鎖されていた。

物々しい鉄の格子の向こうには二等・三等の乗客がごった返していたのである。

乗務員達は鍵を掛ける事により、救命ボートを求めて一気になだれ込む乗客をせき止めていた。

「まずは一等船室の乗客が優先だ！」

乗務員達は格子の向こうの暴徒化した乗客に繰り返し呼び掛けている。

「ここからじゃ入れない。回り込むぞ」

アルバートはシエルの手を引いて廊下を走り出した。

乗務員の制止を振り切ってエレベーターを使い、ようやく二等船室へとたどり着いた二人だったが、恐るべき事態が二人待ち受けていた。

「おいっ！お前はあの時の…」

廊下を歩いていたシエルを見て誰かが声をあげた。

「ああ、あいつだ！」

「間違いない！」

何処からともなく集まってきた船客達はシエルを見て口々に言う。

「あ、あの……」

「大丈夫だ。俺の後ろにいろ」

何か言いかけたシエルを制し、アルバートは周りを取り囲みつつある船客に立ちはだかった。

「彼女がどうかしたか？」

「そいつは人間じゃないな！」

「だったらどうする？」

「ダンスホールで見たぞ！そいつは人間じゃない！」

「ああ？人間じゃない」

シエルは人間じゃないという言葉に少なからず衝撃を受けた。

「氷山にぶつかる直前、あいつが甲板にいるのを見たぞ！」

また誰かが言った。

「こいつが氷山を呼び寄せたんだ！」

「そつだ！こいつのせいだ！」

シエルとアルバートを取り囲んで大勢の人ばかりが出来ていた。

自分の命さえ分らない状況に置かれている事により、乗客達の精神はぎりぎり所まで来ていたのである。

そこに偶々攻撃対象となったのがシエルなのであった。

「お前さえいなければ！」

「やっちまえ！」

「制裁だ！」

飛び交う罵倒と共に二人を囲う円が狭くなっていく。

「くそっ！シエル、逃げろ！！」

アルバートは迫る暴徒を抑えながらシエルに怒鳴る。

「ア、アルバートさん！」

シエルはアルバートに縋り付こうとするが、ついに乗客の一人に腕を捕らえられてしまった。

その後にはすぐ追い討ちをかけるように無数の腕が彼女の身体各

部を掴んでくる。

彼女の絹を裂くような悲鳴がアルバートの耳に聞こえた。

しかし彼は人の波にもみくちゃにされて身動きが取れない。

「シエルッ！何処だシエルッ！！」

やっと人だからから抜け出た時にはアルバートは文字通りボロボロになっていた。

「畜生！」

既に暴徒達はシエルを捕らえ何処かに去った後だった。

よるよると立ち上がったアルバートは重い足取りで自分の部屋へと向かう。

僅かに傾きかけた船室にはあの時のままの画材一式が放置されていた。

そして横に倒れたイーゼルの傍らに、あの絵はあった。

アルバートはそれを拾い上げると、ソファの上のシーツを裂き、それに丁寧にくるんだ。

「シエル、待つてろ…俺が必ず見つけ出すからよ」

アルバートはシーツ越しにその絵を優しく撫でながら呟いた。

暗い。

寒い。

狭い。

彼女が今いる場所の特徴を列挙するとしたらそんな言葉が相応しかった。

目を凝らして周りの様子を確かめようとしてもぼんやりと部屋の輪郭の察しがつくだけで他の情報は何も得られない。

立って部屋の中を探索することは出来ない。

何故なら彼女の四肢は縄によって堅く戒められているからだ。

後ろ手に交差したまま縛られた両手は先程から何度となく解こうとしているのだが上手くいかない。

きつと足と連動して力の入りにくい締め方をしてあるに違いない。

結果的に、彼女は床に転がされたままの姿勢で身体を揺らすことくらいしか出来なかった。

剥き出しの鉄板の床は彼女の肌を冷たく受け止める。

薄いワンピースしか身に纏っていない彼女にはこの部屋は寒過ぎた。ここは何処だろうか。

これから自分は何をされるのだろうか。

独りになった事により一層不安が募るシエルだった。

耐えられない。

「アルバートさん……」

紺碧色の瞳を濡らしながらシエルは愛しい人の名を呼んだ……

？

目に差し込む爽やかな朝日。

優雅な小鳥の囀り。

天使の少女が自分の家にやってきて一夜が明けた。

朝起きてみれば全ては夢だった……なんて事では勿論ある筈が無く、

当の彼女は蓮也の腕に顔を擦り寄せたまま可愛い寝息をたてていた。

彼女が息をする度に二の腕の辺りが温かくなったり、冷たくなったり、微妙な感触が広がる。

正直擦ったい。

擦ったいのだが、腕を引っ込める事など蓮也には出来なかった。

彼女が目醒ましてしまう。

そういう訳で彼は起床したいにも関わらず、寝ていた時と同じ体勢を保っていた。

「す……す……」

「（おゝいつ、シエルっ何時まで寝てる気だぁ！？）」

目線だけを動かしてベッドサイドに置いてある時計をちらと見る。
既に八時を回っていた。

マズい。

—コマ目に間に合わない。

蓮也は決死の覚悟で『シエル目覚まし作戦』の決行を心の中で密かに宣言した。

どうやって起こすか？

この作戦の主旨はその点に尽きる。

なるべくなら彼女に不快感を持たせずに尚且つ爽やかな目覚めを演出せねばなるまい。

果たしてそのような手段があるのだろうか？

「おゝい…シエルちゃん…朝ですよゝ」

しゝん…

反応無し。

『呼び掛けて起こす』第一作戦失敗…

かくなる上は…

蓮也は空いている左手を使ってシエルの肩を優しく揺すった。

「……ん」

シエルは少しだけ首を動かしただけで、目を醒ます事はなかった。

…第二作戦失敗。

…それならば最後の手段！

蓮也は決死の覚悟で左手をシエルの脇腹へと忍ばせた。

罪悪感がないわけではないが、起きないシエルが悪いんだと蓮也は自分に無理に言い聞かせた。

…最終作戦決行っ！！

「……………んんっ」

初めこそシエルは眉を寄せて呻いていたが、ついに耐えきれなくなつて目を醒ました。

「あうっっ！……………はうっ、れっ蓮也さん一体何を…」

次の瞬間、シエルの口からは悩ましげな呻き声…では勿論なく、朗

らかな笑い声が飛び出した。

「ぷっ…くくくく…蓮也さんやめてくださいあっははあ」

脇腹の敏感な箇所を突かれたシエルは笑い声が止まらなかった。

彼女は蓮也の胸の上で身悶えするように身体を擦って笑い続ける。

「ふっふっふっ…シエル、目は醒めたか？」

蓮也は不敵な笑みを浮かべながら尚もシエルを攪る手を止めない。

「はっはい…目は醒めましたから、く…くすぐるのはやめてくださいくくくっ」

既に蓮也は当初の目的を忘れていた。

シエルを攪るのが面白くて堪らなかった。

いつもはおっとりとしている彼女が自分の腕の中で鬼気迫る（？）表情で助けを求めているのが滑稽で、どうしようもなく面白いのだった。

結局、シエルは蓮也が満足するまで攪られ続けなければならなかった。

「はあ…はあ…れ、蓮也さんひどいです…」

漸く笑いから解放されたシエルはぐったりとしてベッドに横たわっていた。

「わりいわりい…ちよっち調子に乗りすぎちゃった」

そう言いながらも蓮也は手早く大学に行く支度をしている。

「あっ…蓮也さん、何処か出掛けるんですか？」

早々と復活したシエルは身体を弾ませながらベッドの端に座り、両膝に頬杖をついて覗き込むように蓮也を見ている。

「たりめーだろ…今から大学だよ。って言ってもわかんねえか」

ナツプサックをひっ掴んで蓮也は部屋を出て行くとする。

「あの、蓮也さん私どうしてればっ」

「あっ……そ…だったあ！！俺が外にいる間お前をどうしときゃ良いんだ！？」

蓮也はその場でぐるぐる周りながら考えを巡らせる。

「…押入に隠れとくとか？駄目だお袋に見つかる…天井裏とか？入

れるわけないよなあ」

「あ、あのおゝ…」

「…何だよ？」

「私も…その、だいがくという所に連れていってくれませんか？」

「…えっ？」

既に両親は出勤した後であった。

蓮也はガレージにあるマイカーに乗り込む。

「ほら、乗れよ」

「あつはい」

キーを差し込みエンジンを掛けると蓮也はシートベルトを締める。
ついで彼女のシートベルトも締めてやる。

「これでよし」

「あの…これはどういう…？」

「おそろ…またご教授の時間か。これは自動車つつって早く目的地に着くために使う乗り物だよ」

「はあ、なるほどお」

シエルは興味津々といった感じで車内を見回している。

「では出発進行！」

蓮也は少しハイテンション気味に車を発進させた。

自分でも分かっていた。

いつもは独りの登校風景。

キャンパスにいる時も気の合う友達はあるにせよ連む程の仲ではなく、蓮也は独りだった。

しかし今は。

今は彼女が隣りにいる。

彼女の世間知らずでぶっ飛んだ発言もいつしか彼にとっては安らぎに変わりつつあった。

現実的に考えればこんな状況は可笑しいのだろう。

しかし既に蓮也にとってはそれが当たり前となっていた。

それはただ単に彼女の魅力によるものなのか、それとも…

+++++

？

長い長い話を聞き終わったメルキエルは自分の執務室へと戻っていた。

そして何かに納得したように何度も頷くと、うつすらと冷笑に顔を染める。

「シエル…お前を必ず…必ず俺のものにしてくれる…」
その言葉は何かを始める合図のようで…

+++++

？

随分と長く眠っていたような気がする。

シエルは気だるい身体を起こして辺りを見回した。

樹木の香りと何やらぱちぱちと燃える音。

木一色で彩られた部屋に、暖かな炎を抱え込む暖炉。

シエルはそれらを見る事でこの場所がアレンの部屋であることに気付いた。

手について立ち上がろうとしてふと、手が動かない。

見ると、アレンが穏やかな表情で眠りこきながらシエルの手をしっかりと握っていた。

「アレンさん…」

彼女はその手にそつともう一方の手を重ね合わせ、また彼の隣に寝

転がる。

「…まだ起きたくないですか？」

シエルがいたずらっぽくアレンに囁きかけると、突如彼の瞳が開いた。

「そうだね…天使様とこんな甘いひと時をずっと過ごせるならまだ起きたくないや」

「…んもう、さつきから起きてたんですね？」

「ああごめん、ちよつと様子を見てたかったんだ。でも、」

アレンは欠伸を噛み締め、首をこきこきと振る。

「お陰でゆつくり眠れた」

「よいしょつと」

シエルは長椅子から立ち上がると、眠るために折り畳んでいた背中の翼を一気に広げた。

窮屈に押し込められていた羽根はまるで目覚めたように大きくしなる。

「……ふう」

「どうしたんだい？」

「実は仰向けに眠るのって天使にとってかなり負担のかかる事なんです。翼が折れないように折り畳んで寝転がなければいけませんから…」

さつきから彼女に何か違和感があると思っていたら背中の翼が見えないくらいに折り畳まれていたからだったようだ。

「そうだったんだ…ごめん、いきなりあんな事して…君を見てたらしい…」

「いえ、いいんです…私もよく眠らせていただきましたから」
そう言つてシエルはにっこりと微笑む。

「……ねえ」

「…はい？何ですか？」

「その羽根、…一本もらつていいかな？」

「えっ」

彼女の虚をつかれたような表情。

それからすぐに頬が染まっていく。

「そんな…私のような者の羽根など持っていても何も」

「嫌かい？」

もじもじしながら答える彼女の言葉をアレンは遮って言う。

「いえ！そんな事は…ないですけど」

「…僕はね、他の誰でもない、シエルの羽根が欲しいんだよ」

「アレンさん…」

シエルはしみじみとした口調で呟くと、アレンに背中を向ける。

「それでは…優しく抜いてくださいね」

背を向けたまま、顔だけをこちらに向けて彼女は呼びかけてくる。

「わかったよ」

幾重にも覆い繁った羽根の層の一番ふくよかそうな場所にアレンはそつと手を忍ばせる。

「ごそつ…ふかつ

「…んつ」

シエルは目を細めてうつとりしたような表情で声をあげる。

「ごそつごそつ…ふかふかつ

「…んつ…んつ」

アレンが手を探らせる度にシエルは敏感に反応し、ついにはぴくりつぴくりつと身体を震わせた。

「…まだですかっアレンさん…」

熱を帯びたシエルの言葉にアレンは気付かない。

「ごめん、もうちょっとだけ」

アレンは幾つもある羽根のうち手近にあったものを一枚握ると、優しく引つ張った。

ぷつんっ

小気味良い音がした。

「…あん」

シエルは間の抜けた顔で消え入りそうな声を出す。

アレンの手のひらには白く輝く真つ白な羽根がのつていた。

ふっと息を吹きかければたちまち何処かへ飛んでいってしまうくらいに軽いその羽根。

アレンはその羽根の根元を持ち、ひらひらさせる。

「ありがとう、大切にするよ」

そう言つて壁に立てかけてあつた自分の帽子を取り、それを差す。

「…羽根付き帽子？」

「ああ、しかもただの羽根付き帽子じゃない。シエルの羽根付きだ」「何だか恥ずかしいです…」

そう言いながら頬を赤らめるシエルにアレンは追い打ちをするように質問する。

「羽根は敏感なんだ？」

「はっはい…」

敏感という言葉にシエルは更に顔を上気させる。

「羽根は天使にとつて最も大切なものですから…」

シエルは翼に自らの身体を包ませるようにして、それを撫でながら言う。

「また触つても良い？」

「！…は、はい…」

…ふかつ

「気持ち良い…」

アレンは純白の草原に手を這わせる。

「…私事です」

目を細め、肩をぶるつと震わせる仕草はまるで小動物のような愛らしさを彼女に授けた。

暫くの無言の触れ合い。

そして…

キキキキキ

？

彼は走っていた。

足下は既に水に満たされており、彼が床を蹴る度に水音がする。ズボンは水を吸ってすっかり重くなってしまっていたが、それでも彼は平素の倍かと思われるくらいの速さで廊下を疾駆していた。

「シエルッ！！何処だシエルッ！！」

廊下中に響き渡る大音声で呼び掛けるが返事は返ってこない。

それでもアルバートは呼び続ける。

…何処をどう走っただろうか。

いつの間にかアルバートは船内の中でも最も深い階層にまでたどり着いていた。

電源は落ちているのか全ての明かりは消えており、膝の辺りまで冷たい感触が広がっている。

アルバートは手探りで壁を見つけると、壁づたいにゆっくりと歩を進める。

手のひらに何か当たる。

手で触って形状を確かめるとそれは水密扉の取っ手であった。

その位置で両手を広げると壁の感触が両側にあった。

つまりここは通路だったのだ。

ということは先にいくにはこの扉を開けるしかない。

力を込めてバルブを回すと重苦しい、金属の擦れ合う音と共にその扉は開いた。

開け放した扉の先はまた真の闇だった。

だが微かに人の気配がする。

「シエル…いるのか…？」

「…アルバートさん？」

彼女の声が聞こえた。

間違える筈のないシエルの声であった。

「シエル！」

アルバートは呼び掛けながら声のした方向へ手を探らせる。

彼女の細い肩に手が触れた。

抱き締めようとして手を伸ばし、アルバートは彼女が浸水した水に半身を浸した状態で座り込んでいる事に気付いた。

「し、シエル…風邪ひくぞ」

アルバートは彼女を立ち上げらせようとして更なる異変を感じ取った。

何気なく彼女の背中へ回した手が知った事。

…彼女の背中にはあの翼が無かった。

背には枯れ枝のような感触の羽骨があるだけで、あのふくよかな翼の感触は何処にも無かった。

「…シエル！？羽根が…」

「………筆られたんです」

ぽつりと洩らした彼女の言葉の語尾は、震えていた。

その言葉だけでアルバートは全てを理解した。

「……………」

何も言えなかった。

かける言葉も見つからなかった。

いつの間にか腰の辺りにまで水が増えてきていた。

アルバートとシエルは急いで上を目指していた。

彼はシエルの手を引きながら水をかき分けひた走る。

右へ、左へ、廊下を曲がりながら、アルバートは彼女の手が少しだけ細くなっただけだ、と思った。

掴んでいても、まるで掴んでいないかと思われくらいに軽い。

時折振り向いて自分の手がしっかりと彼女の手をつなぎ止めているかを確認するアルバートだった。

当たり前な事なのに不安になってしまふ。

一方シエルは数十秒に一回、自分の方を振り向いてくれるアルバートに安堵していた。

彼の背中。

自分を導き、外へと連れ出してくれる道標。

しかし、それだけでは彼女は心許なかった。

先へ進むこと、未来は常にあること、それらを信じて疑わない彼の表情こそ、今のシエルの心を安定させる唯一無二の薬であった。

アルバートの思惑等全く知らぬ彼女は、少しだけ微笑みながら心の中でありがとう、と呟いた。

エレベーターホールは既に水没寸前であった。

それでもエレベーター自体はまだ辛うじて動いているようだった。

二人はエレベーターに乗り込むと昇降レバーを一番上まで上げる。

エレベーターは苦しそうな駆動音を奏でながらゆっくりと上昇し始める。

足下に溜まっていた水は上に行くにつれて流れ出ていく。

「…これでAデッキに出られる筈だ」

狭いエレベーター内で息を整えながらアルバートは静かに言った。

「それから、どうするんですか…？」

シエルは壁に身体もた凭せ掛けたまま動かずに言う。

心なしか息が苦しそうだ。

「…おい、シエル大丈夫か？」

彼女はそのままずると壁に引きずられながら、ついには座り込んでしまった。

アルバートは彼女が凭れていた壁を見て愕然とした。

そこには夥おびただしい量の血が付いていた。

「お、おい！シエルしっかりしろ！」

彼女を助け起こそうとして、背中に回した手は血みどろに変わった。

いつの間にかシエルの羽根は全てが抜け落ち、羽骨があつた場所からは止めどなく鮮血が流れていたのである。

「アルバートさん…わたし、」

「喋るな！今止血する！」

濡れないように背中縛って固定してあつた「羽根の無い天使」の絵からシートだけを外すと、それをシエルの背中に押し当てる。たちまちシートは真つ赤に色を変えていく。

「くそっ！止まれ！」

更にシートを裂き、包帯のようにして彼女の背中を固定する。

エレベーターが止まるが速く、アルバートはシエルを腕に抱き抱え甲板に躍り出た。

見回せば甲板に残っている救命ボートは既に無く、そこには脱出できなかつた人々で溢れていた。

「な…数が足りなかつたのか…！こんなに乗れなかつた人が…畜生っ！」

キキキキキ

？

船体はゆつくりと船首から海面へ没していく。

アルバートはそれから逃れるために船尾へと走っていた。

背中にはあの絵とシエルをおぶりながら。

「まだだ…！俺は絶対に諦めない！！」

アルバートは未だ残された僅かな希望を捨てること無くもがき続けていた。

絶対に生き残つてやる。

彼女と二人で。

彼は決意を新たに甲板の上を駆ける。

シエルは朦朧とした意識の中、彼の背中に揺られながら目を開いた。目の前にはあの「翼の無い天使」の絵があった。

「あ…」

鉛筆で書かれた繊細な線は、水に濡れる事も無く、完全な状態でコンパスの上に存在していた。

「私の絵…取ってきてくれたんですね…よかった…」

消え入りそうな細い声でシエルは呟いた。

「当たり前だろ？約束したからな。…じゃあ今度は俺から良いか？俺と…約束してくれ」

「…？」

「…死ぬなよ。…お前がこんな所で死ぬなんて俺は絶対に認めない」
「は、はい」

シエルはアルバートの必死な言葉に思わず頷く。

「よし…約束したからな。これでお前は俺が良いっていうまで死ねなくなった」

「…えっ」

シエルは言葉の意味を汲み取れずに困惑していた。

「…死ぬ時は一緒だ。だけど俺はここで死ぬ気は更々無い。わかったな！」

「は…はい？」

「…いや、まあ…何だ、俺の中では天使サマってのは絶対死なないもんなんだよ…勿論あんたもな」

結局シエルはアルバートの言葉の真意を分からずにいた。

彼が発した言葉は、きっとシエルが思った以上に好意的なものだったに違いない。

アルバートははっきりと形に言い表せずにいる自分に歯痒い思いを感じていた。

暫くして船尾にたどり着いたアルバートはフェンスにシエルをそっとなぞらせると、彼女の顔色をうかがう。

「気分はどうだ…？」

フェンスに身体を預けたままぐったりしていた彼女は、やがてゆっくりと目を開き、屈託無く頷く。

「そうか…」

アルバートの顔に余裕の色は無かった。

もう彼女が弱ってきているのは明らかなのだ。

止血するため背中に巻いたシーツは既にその機能を果たしておらず、また新たに流れ出た鮮血がシエルの背中を彩っていた。

しかし彼は努めて明るい調子で続ける。

「すぐに定員一杯じゃないボートが戻ってきて俺達を助けてくれる。それまでの辛抱だ！」

「…はい」

そう信じるしかない。

そう信じるしか道は…ないのだ。

諦めては…駄目だ。

アルバートは自分に言い聞かせるように心でその言葉を反芻した。

既に周りには同じように沈む船体から逃れたい船客で溢れかえっていた。

泣き叫ぶ者、絶望に打ちひしがれて海に飛び込む者、最期とばかりに神に祈りを捧げる者。

様々な人間のその人一人一人の“最期”の受け止め方。

いとも容易く人の命が消え行く中で、シエルは不思議な想いに包まれていた。

こんなにも多くの、とても多くの人達が、何故簡単にも消えていつてしまうのだろうか？

何かの罰、なのだろうか？

シエルにはそうとは思えなかった。

理不尽な“事故”という概念を理解できないシエルは、これ程までに多大な命を奪う事象に自分を納得させるためには“罰”と考える

しかなかったのだ。

罰…。

「主よ…何がいけなかったというのですか？どうか、応えてください…」

フェンスに身を預けた格好のまま夜空を見上げる。

零れ落ちてきそうな程の満天の星達。

シエルはその上の、更に上を、見ていた。

不意に何かが破裂した音と共に、夜空には煌びやかな光が咲く。

真っ白な光は空の上で舞い踊ったかと思うと、やがて夜の闇に紛れるようにして消えた。

「…きれい」

シエルはその光の消え行く様を見て感嘆の声をもらす。

それは船員が必死の思いで点火した信号弾の光であった。

船体の傾きは徐々にきついものになっていく。

傾斜が高くなるにつれ、アルバートはシエルを胸に抱いたままフェンスに身体を固定して身構えていた。

足下を見ればかなり海が遠くなっている。

船首が沈むにつれ、船尾は逆に浮き上がっているのだった。

傾きに耐えきれなくなった乗客は一直線に床を滑り落ちていく。

既にどこか掴まって身体を固定しなければ自分を支えきれない程の傾斜になっていた。

「くそ…まずいな」

アルバートはフェンスを乗り越えてバランスを取る。

地響きにも似た轟音が船体を揺るがしたのは、次の瞬間だった。

それと同時に足場が重力を失った。

フェンスに乗せた足が浮き上がるよりも前に、アルバートはシエルを抱え込んだまま身体を伏せていた。

そして突き上げるような衝撃。

状況を確認するために周りを見回すと、信じられない風景がアルバ

トの目に飛び込んできた。

あろうとか、船の前半部分が欠落していたのだ。

浮き上がった船尾の重みに耐えきれなくなった船体は、中央を境に真つ二つに折れてしまったのだ。

？

大学に着く頃には雪がちらつき始めていた。

「わあ…きれいですね」

シエルは助手席の窓ガラスに顔を近付け、流れ行く景色に混じる白雪へ熱心に視線を注いでいた。

「シエルは雪、見たことなかったっけ？」

蓮也はハンドルを握りながらも横にいるシエルをちらと見る。

「はい、天界にはこんな幻想的な事象はありません。雪…というのはですか？」

よくも毎度新しい事を聞くのに飽きがこないかと内心關心しながらも、蓮也はまたもご教授を開始した。

「お空には真つ白くてもくもくしたもんがあるだろ？」

「雲の事ですね」

「ああ、そんなかにはお水が沢山詰まっててな？時々、それが地上に落つこちてくるんだよ。それが雨だ。そいでもってその水があまり寒くて固まっちまう事がある」

「はい」

シエルは真剣な顔で蓮也の話を聞いている。

「それがそのまま落つこちてきたのがこの雪さ」

こんな説明で良いのだろうかと思ったが、どうやらシエルは納得してくれたようだ。

「なるほどお…よくわかります…蓮也さんご教授ありがとうございます！」

やがて蓮也の運転する車は巨大な建物の地下駐車場へと入っていく。

「ほい、着いたぞ」

「あ、はい」

「シートベルト、外せるか？」

「大丈夫です」

につこり微笑んだシエルは一生懸命一人でシートベルトを外した。

「さてと、俺は今から講義受けてくるから悪いけど暫くここにいてくれよ。外に出ちゃ駄目だぞ」

「え…わ、私…」

「大丈夫だって！すぐ戻ってくつからさ。戻ったら一緒に飯食おうな！じゃあ良い子にしてろよ！」

につと笑顔を残しながら蓮也は立ち去っていった。

「あ…行っちゃいました…」

シエルは車の中に独り残されてしまった。

「…………ふあゝあ…………暇です」

シエルは反らした掌を口にあてて可愛い欠伸をする。

その仕草はさながら何処かのお嬢様のように優雅であった。

そして思いつきり伸びを試みるが、何も状況は変わらない。

「少しだけ…外に出てみるのも良いですよね？」

舌をぺろりと出したシエルの表情にのぞくのは天真爛漫な天使のものではなく、この年頃の少女に似つかわしくない無邪気な冒険心だった。

シエルはこっそりと車を抜け出し、地下駐車場の中の散策を開始した。

地面には白い線が規則正しく引かれており、その線の中に収まるように幾つもの車が置かれている。

その様子がシエルには面白くて仕方無かった。

「わあゝたくさんありますね」

シエルは車の間を縫うようにその辺り一体を見て回った。ふとシエルは近くの壁に何やら鉄の門らしきモノが張り付いているのに気付く。

側には奇妙な操作板が設けられている。

彼女はそれがエレベーターだという事を知らない。

「これは…何でしょう？」

その前に立つて首を傾げていたシエルだったが、あれこれ考える内について側の『ボタンを押ししまった。すると途端に目の前の門が開かれた。

門の先には小さな部屋があるだけであつた。

他には何も無い。

「これは…入ってことでしょうか？」

シエルは訝しみながらもおずおずとその小部屋に入った。すると音も無く門は閉まる。

「えっ!？」

閉じ込められた、と思ったシエルは慌てて鉄の門にとりつくが、それは固く閉ざされて開きそうにない。

「だ、誰か…！」

シエルがそう言いかけた時だった。

何とも言えない、独特の浮遊感が彼女を包み込んだ。

「何…ですか？これ…」

シエルは自らの肩を強く抱き締め、唇を震わせて呟いた。しかしそれも束の間、すぐにその感覚は止み、静かに門が開いた。門の先の風景は先程とは全く違っていた。

「ど…どういう事ですかこれは…」

そう考えてシエルは『はっ』とした。

…これは『エレベーター』だ。

知るはずのない事なのに何故かわかってしまう。

たちまち彼女の中に記憶が溢れ出す。

自分の手を引く誰か。

迫り来る水。

走る自分と誰か。

浸水したエレベーターホール。

背中に感じる強い痛み。

朦朧とした意識の中、誰かに抱かれたまま走った。

泣き叫ぶ人達。

傾く大地。

…それは今『思い出した』のではなく、今現在『覚えている』記憶達だった。

間違う事の無い近似的な記憶。

その時、シエルは初めて悟った。

自分はこことは別の場所に今、いる。

それと同時に今も自分はここに、いる。

天界から堕ちたあの日、自分は何か不思議な感覚に包まれたのを覚えてる。

ずっと引つかかっていた疑問が今晴れた。

それを知ったからには…

確かめるしかない。

自分が置かれている状況を。

シエルはとりあえずエレベーターを降りて辺りの風景を見回した。

割と大きな空間に他にも同じようなエレベーターが壁に設置されており、どうやらエレベーターホールなようだった。

シエルはホールを抜けて吹き抜けに辿り着くと、掲げられていた案内板を見た。

？

案内板には金属製の大きなプレートが張り付いていて、そこには「羽生子大学」という文字が刻まれていた。

明朝体の文字のバックには銀色の羽根が二枚あった。どうやらこの大学のエンブレムらしい。

吹き抜けのステンドグラスを通して入ってきた朝日がその羽根を輝かせている。

「……………きれい」

シエルはそのエンブレムに暫く見入っていた。

彼女の拙い語力では案内板に書いてある全てを読み取ることはできなかった。

仕方無く彼女は見覚えのある文字を頼りに目星を付け、歩き出した。吹き抜けにあつた螺旋階段を上がると、目の前には飲食店らしき店舗が現れる。

そこから右に折れると一階を見下ろすことができるテラスに続いていた。

彼女は先程までいた吹き抜けを見下ろしながらテラスを抜けた。

すると今度は階段の踊り場に差し掛かる。

階段を上がった先、彼女が向かったのは…

それは「図書館」だった。

受付にいる女性はシエルを見ると不審な顔をしたが、それ以上何も行動は起こさなかった。

学内の図書館は学生以外も利用できるシステムになっているからだ。彼女は入館者数を記録するゲートを胸で押し開ける（身長の高い彼女は大人の腹に当たる筈のバーが胸に当たってしまった）と館内を見回した。

勉強熱心な学生が各々の学習スペースを形作って読書に没頭しているのが見える。

部屋に壁と平行になる形で所狭しと本棚が置かれおり、掛かっている札をみれば蔵書数はかなりの数になるだろう。

しかしシエルにとってそれは驚きとは成り得なかった。

何しろ彼女は天界にあるあの「図書館」を知っているのだから。目も眩む程高く積み上げられた本。

何階まで続いているのか分かっていなかった地下書庫。

そしてその無数の本達に独り真正面から向き合っていた男がいた。

「メルキエルさん」

…この名を口にしたのは幾日ぶりだろうか。

後ろめたい気持ちが無い筈がない。

「きつと怒ってるだろうなあ…」

シエルは眉をしょげさせて申し訳無さそうに肩を竦めた。

いや、今は反省している時ではない。

まずは自分の置かれていた状況を把握せねば。

やっと気付く事が出来たのだから。

彼女は本棚の周りをいつかのように見て回った。

「見たことのない本がいっぱい…」

当たり前なのだが、自分の知っている図書館とは知識体系が全く異なっていた。

この中から自分の歪んだ身の上に関する事柄を探すのは骨が折れそうだ。

「歴史・文学・物理・経済・数学・生物…」

読み上げれば切りがない。

手当たり次第に本を開いていたものの、数が膨大過ぎてカテゴリさえも掴めずにいた。

かなりの時間が経った気がする。

時計の針が何周かしたのだからそれは確かだろう。

…… ずいかもしれない。

ゆっくり思考が展開されていくうちに頭の片隅に置き忘れていた事柄が蘇ってきていた。

耳に残った言葉を反芻する。

すぐに戻ってくる…

「…… 蓮也さんっ！」

シエルは慌てて座っていた机から椅子を蹴倒して立ち上がった。皆の目が一斉に自分の方に向く。

「… あ、… す、すみません…」

シエルは元来た道を急いで戻る途中、飲食店の前で蓮也と鉢合わせした。

「し、シエル！ 一体何処に行ってたんだ！？ 捜してたんだぞ！」

蓮也は本当に心配していた様子で彼女の肩を掴んだ。

「… 大丈夫だったか？」

「はい、少し調子に乗りすぎました…」

シエルはぺろりと舌を出し、ばつが悪そうに微笑んだ。

「好きなもん頼んで良いぞ」

飲食店「アルバ亭」店内にて蓮也は、メニューとにらめっこするシエルを見ていた。

「うゝん… 私、蓮也さんと同じもので良いです」

メニューを蓮也に手渡しながらシエルは曖昧な笑みを返す。

「んゝ？ そつかあ？ じゃあ…」

「… 美味しいです」

シエルは運ばれてきた料理に舌鼓を打っていると、蓮也はふいにこんな事を聞いてきた。

「ところで、さっき何処へ言つてたんだ？」

ハンバーグに口を運びかけていたシエルはあんぐりと開けた口を閉じる。

「あつ…え〜と、こほんっ…少し調べものをしていました」

はしたないと思つたのか、照れ隠しに可愛い咳払いをした後にシエルは応えた。

「調べもの？」

「はい」

「何を調べてたんだ？」

「それは…」

言つて良いのだろうか。

ただでさえ現実離れた自分の存在に、更に信じられない事の上塗りするような気がしてならない。

しかし…

彼には約束をした。

自分の大切な人を捜してくれるように。

だから…

彼に打ち明けてこの不可解な自分の状態が少しでも楽になれば…

「今から私の言う事…信じてくれますか？」

おずおずと紡がれた彼女の言葉に蓮也は予感めいたものを感じる。

「…何だよ？まだ何かあつたのか？」

もう何を聞いても驚くまいと思つていた蓮也の決意は、ここでも簡単に崩れ去ることになる。

5th Wing “Broken Lovers” (後書き)

次回から怒涛の展開になってきますので乞うご期待！

6 t h w i n g “ M e l a n c h o l y A n g e l ” (前 書 き)

彼女の巻き込まれた複雑な糸が徐々に明かされていく。
そしてその一方で運命の時を迎える船があつた・・・

6th wing “Melancholy Angel”

＋＋＋＋＋

1

「エンジェルナイト天騎士を召集する。出来るだけ精鋭を集める」

メルキエルは無有を言わせぬ口調で皆に言い放った。

天老院の面々は皆一様にどよめく。

しかしその中で一人、黙っていたサフィエルは一言こう言った。

「あの少女を連れ戻すつもりか？」

「無論だ」

メルキエルは短く応えた後、眼鏡の奥の瞳をぎらつかせた。

「お前、自分が一体何をしようとしているのか分かっているのか？
天騎士を下界に送りこむということは、下界に宣戦を布告するとい
う意味だぞ……！かつての過ちを繰り返すつもりか！」

向かいのテーブルのラゼルはいりきたった声をあげたが、メルキエ
ルは鼻にもかけない。

「私が長であるからには皆私の指示に従ってもらう。良いな？」

閉会后、ラゼルはサフィエルと共に会議室に残っていた。

「狂ってる……！高が幼天使一人逃げ出しただけで天騎士召集等……サ
フィエル様、貴方は何とも思われないのですか！」

机に両手を叩き付け、ラゼルは頭を振った。

「お主はまだ若い。物事の全てを見通しておらんから偏った見方と
なるのだよ」そんな彼女の肩に手を置いてサフィエルはラゼルを諫
める。

「ですが……私には何が何だか……！」

「まあ聞け。お主に真実を見通す『目』をやるう。その代わりとし

て、…お主に使命を与える」

彼女の両肩を掴んで落ち着かせると、囁くように耳元で言葉を言った。

「…その使命とは？」

ラゼルは震えた声をたてた。

たつぷりと間を置いた後、サフィエルは無機質な声で言った。

「シエルを…殺せ」

2

「益々お前の事が面白い奴だつて事が分かったぜ」

飲み終わったジュースのグラスを傾けながら蓮也は興味津々といった感じで呟いた。

「…信じてくれるんですか？」

同じくジュースのグラスを両手に持ってストローでジュースを飲んでいたシエルは、物憂げな表情で返す。

「ここまで来たら最後まで付き合うしかないだろう？ なぁに心配するな！ オレはこう見えても不思議系には強いんだぜ」

びしつと親指を立てた蓮也は自信たっぷりだ。

「はぁ…なんだかよく分かりませんが、よろしくお願いします」

漸く飲み終わったジュースを机に置くとシエルは今までとは違い、控えめにお辞儀をした。

彼女の金白の髪は、翻らなかつた。

青を基調とした近未来的なフォルムの建物が羽生子大学の東にはあった。

学内の情報処理を一手に引き受ける機能を果たす「情報センター」

である。

その中の一室、コンピューター自習室に二人はいた。

「図書館で本を漁ってちゃ埒があかない。今から現代的な調べ物つてのを見せてやる」

蓮也は背中越しに覗き込んでくるシエルに言い聞かせながらパソコンのキーを叩く。

「一体何をしているのですか？」

耳元でシエルの声がする。

その可愛らしい声と息遣いに蓮也は少し動揺しながらも無心にキーを打つ。

「まあ見てなつて。オレがオマエの悩みを一発解決してやるからよ」
そう言つて更に手を動かす。

それから後、しばらくの間蓮也はシエルの証言通りの現象に関する資料を見付けるのに奮闘する事になる。

空間転移、タイムスリップ、ワームホール、四次元定理などありとあらゆる学術書の文書データを検索していく内に、ついに蓮也は辿り着いた。

『上方一点・下方三点の位置空間の相互作用と歪みに関する論理的解析』という長たらしいタイトルのリンク。

「これか……？」

蓮也はゆっくりとそのタイトルにポインタを乗せる。
そしてクリック。

画面が切り替わると、真っ暗な背景に『now loading . . .』の文字。

蓮也は幾分緊張した面持ちでその文字を見詰める。

シエルも、蓮也の肩に顎を落着けて画面に見入っている。

しかしすぐにその表示は消え、代わりに何やら幾何学的なモデルが画面に表れた。

棒だった。

真っ黒の背景に真っ白の棒が立っている。

そしてその棒の上の先には光る点があり、下の方にも同じような点が3つ列んでいた。

その内真ん中の点が棒の下の先にくっついていていた。

「何だコリヤ？」

「さあ……？分かりません」

二人は首を傾げる。

やっと核心に近付いたページに辿り着いたと思ったら表示されたのは意味不明のFLASHアニメであった。

これはどうしたものかと二人が顔を見合わせていると、画面に変化が表れた。

棒のモデルが画面横にスライド移動したかと思うと、出来たスペースに文字が表れた。

「……ん？」

しかし表示された文字は見たこともない、文字といえるかも分からない異様な文様だった。

当然、蓮也には読めなかった。

「おいおい……外国語かよ……これじゃお手上げだ」
すると肩口にいたシエルが声を上げた。

「……いえ！これは、天聖文字です！」

「何だそれ？」

「天界で使われている常用語です！」

「何だつて!？」

+++++

3

息を呑む光景が目の前に広がっていた。
真つ二つに割れ、無残な姿を晒した船は船首を海面に埋めて断末魔の悲鳴をあげていた。

それは辛うじて繋がっていた船体の裂け目が完全に引きちぎられた音であった。

しかしよくよく見てみると、数十mしか離れていないというのに、救命ボートから見るその光景はまるで遠い異国の出来事のようにも見えた。

それ程に現実味の無い風景。

初老の紳士ルドルフはシルクハットを取るのも忘れ、茫然とタイタニック号がその勇姿を海へ沈める様を見送っていた。

「アルバート君にシエル嬢…何も出来なかった私をどうか…どうか許してくれ…私にはただ祈ることしか…」

救命ボートの波に揺られながらルドルフは涙を流しながら祈っていた。

身体が傾いていく。

いや、周りの景色もまた同じように傾いていた。

既に船首は海上から姿を消していた。

海水に沈んでいったというのに、まるで硬い岩か何かに激突したかのような轟音を残して。

そして引きずられるようにして船尾にもやがて沈没の時がやってくる。

垂直になった船体はまるで浮いたコルク栓のような小康状態にあった。

船内にたまっていた酸素が浮き袋の役割を果たしていたのだ。

しかしそれも束の間。

真っ黒な海面に向かって落ちていく船尾。

アルバートはシエルを抱き締めたまま船尾の天辺にいた。

「ちっ…ここまでか」

アルバートは更にシエルを強く抱きながら悪態をついた。

アルバートの腕の中で短い息をしながら縮こまっていたシエルは、両の瞳だけを生き長らえさせながら彼に訴えた。

「あきらめないでください…」

しかしその声にはかつての愛らしい鈴のような響きはない。弱々しくも必死に絞り出されたかすれた声は、最期の命の炎を燃やしているかのようにアルバートの耳に聞こえた。

「シエル…シエル…」

アルバートは唇を噛み、顔を強ばらせ、瞼を震わせながらシエルを抱き締め続ける。

強く押し付けた背中からは血が流れているのを感じた。

シエル…

その名前を幾度となく呼び続ける。

果たして彼女にその声は聞こえているのか？

シエルは目だけを動かしてアルバートを優しく見ていた。

落ちていく。

冷たい海へ。

闇の海へ。

深く、深く。

「シエル…」

「アルバートさん…わたし…」

僅かに開いた唇から洩れたほんの小さな言葉は、彼の耳に届く前に影を潜めた。

不意に彼女の瞳にあつた光が消えた。

彼の肩に乗せられていた彼女の細い手が支える力を失い、滑り落ちる。

彼に力を預けていた彼女の身体が、重力のみに作用されて『ただの重み』となった。

もう何も力を持たない彼女の身体。

幾ら呼びかけても、最早何の反応も示さない。

…彼女がどうなったのか。

彼はすぐにわかった。

眠ったのだ。

眠りについたのだ。

そうだ…。

きつとそうに違いない…。

だから、いつか彼女が目覚めますその日まで、自分は彼女のそばに…。

動かなくなった彼女の瞳に手を被せ、目を閉じさせる。

彼女の手を取る。

血にまみれた手をしっかりと絡める。

そうすれば、彼女とひとつになれるような気がした。

そうして、彼女の安らかな寝顔を見た。

…もしも目を覚まさなかったから？

その時は…。

その時は…。

こちらから、起こしてあげよう…。

そして最期の時、豪華客船タイタニック号は海の底へと没していった…

主を失った『翼の無い天使』の絵は独り静かに海中を漂っていた。

やがてカンバスに書かれた鉛筆の線から淡い光が漏れる。

海底に身を落ち着けた紙の上の天使は、纏っていたリボンをゆつくりと床へと落としていく。

そして両手を胸の前で交差させたかと思うと、背伸びをするかのよ
うな姿勢で、今まで翼の無かった背中に一気に羽根を羽ばたかせた。
そしてゆっくりと目を開ける。
力強く翼をはためかせ、カンバスから飛び立った天使は海中の中を
ぐんぐん進む。

そして勢い良く海面からその身を躍らせた。
まだ彼女の飛翔は続く。

更に天へと向かって伸びやかに翼を動かし、風をきる。

やがて白雲の中へと彼女の姿が消えた頃には、海はまた元の静けさ
を取り戻していた。

4

「読めるか？」

蓮也が画面上の文字を指し示すと、シエルは彼と画面の間に割って
入り、真剣な顔で文字を見つめる。

「え〜とですね…かなり古風な表現を使ってますが何とか読めそう
です」

その後、彼女が読み上げた内容は何とも奇妙なものであった。

「このページを見つけた人は至急連絡をください。あなた達の事が
知りたいのです」

そしてその文をシエルが読み終わった直後、丁度良くメールアドレス
スが画面下に表示された。

「…どういった？」

浮かび上がったメールアドレスにポインタを乗せたまま蓮也は首を
傾げている。

「これでこの人と連絡が取れるんですか？」

シエルが蓮也の隣りから訊いてくる。

「ああ…だけどなんだかなあ」

そう言いながら再び画面に目を戻すと、ある事に気付く。

Melancholy-Angel@habune-u.ac.jp

「…habune?…ってウチの大学のドメインじゃねえか!」

このドメインのメールアドレスを持っているのは羽生子大学の教授か学生だけだ。

「マジかよ…まさに灯台下暗しってヤツだな」

「…?」

頭の上に?マークを浮かべるシエルに気付き、蓮也は溜め息混じりに言った。

「あんたの悩みを解決してくれるのは案外近場に居たみたいだな」

蓮也は早速メーラーを起動するとキーボードを叩き始めた。

『例のページ見ました。あのFLASHの意味は一体何なんですか?それとどうしてあなたは天聖文字を知っているのですか?訊きたいことはまだまだ沢山ありますがこれ位にしておきます。お返事待ってます』

気持ちばかりが焦って乱雑な文書になってしまったが、この際そんな事は言ってられない。

言いたい事は伝わる筈だ。

はやる気持ちを抑えて送信ボタンを押す。

「返事くるかなあ」

ぼんやりとデスクトップ画面を見ていると画面端に新着メールのサインが点った。

「…来た!」

「もうですか?速いですねえ!」

シエルは目を丸くする。

ワンクリックで開封すると、短い一文があのでメルアドから届いていた。

『今から会いましょう。場所はセンタービル四階のロビーで』

二人はセンタービルの四階ロビーにあるソファに座っていた。

「…一体どこのどいつなんだ？」

蓮也はそわそわしながら携帯電話の時計をチェックする。

二時を過ぎた頃だ。

あれからすぐにパソコン室を出て、ここまで来るまで十分弱。

まだそれ程時間が経っていないというのに、何故だか焦っている自分がいる。

それは今まで彼女に関する事は全て自分一人だけの出来事だったからかもしれない。

シエルの存在その物がきつと大多数の人にとって信じがたいものだろう。

実際自分も最初信じられなかった。

もしも今突然我に還り、これが全て夢だったとしたら。

誰もそうではないと言ってくれる人はいない。

蓮也はこれが現実であるという保証が欲しかった。

他人と事実を共有するのはそういった面もあるのだなと蓮也は思い直した。

隣りにいるシエルを見る。

身体の小さい彼女が大ぶりなソファの中央にちょこんと座っていると、彼女が更に小柄に見えてしまう。

お行儀良く揃えた膝小僧に、両手を重ねた格好で辺りを見回す彼女はいつにも増して可愛らしかった。

服装はというと、トレードマークの真っ白いワンピースの上にはフード付きの厚手のマントを着けている。

それは背中の羽根をカモフラージュするために蓮也が親のクローゼットから拝借したものだった。

彼女が身に着けているものはそれだけで、それはお世辞にも厚着とは言えない。

真冬だというのに外でも彼女が凍えることがないのは、天使ならではの不可思議な力が働いているに違いない。

そうやって彼女の全体を観察していると、視線に気付いた彼女がこちらに顔を向ける。

「あ、あの…蓮也さん？」

彼女の頬に淡い紅がさしたのに気付き蓮也は慌てて目を離す。

「…ははっ！まだ来ねえのかな？」

照れくさくなつて視線を周りに泳がせると、こちらに向かってくる人影が一つあった。

講義中の時間帯なのでロビーには人気は無く、すぐにその存在に気付く事が出来たのだ。

よく響く堅い靴音はハイヒールのもので、背格好で遠目でも女性である事が判った。

「貴方達が…そうなのね？」

目前まで来てその女性は凜とした声をあげた。

蓮也はソファーから立ち上がり、取り敢えず一礼する。

シエルもそれに倣う。

「えっと…」

蓮也は言葉を探しながら目の前の女性を観察する。

薄桃色のスーツを着た彼女は、ぱっと見ればOLのような風貌にも見えた。

この大学の教授だろうか？

それにしても年齢が若すぎる気がする。

幾分かカールした髪は焦茶色で、きりりとした眉に真っ赤な唇が印象的だった。

しかしそれは決して嫌味を感じるきついメイクではなく、はっきりとした輪郭のある美しさを彼女に授けていた。

「私は如月純。よろしくね」

「私の作った論文ページ見てくれたのね！嬉しいわぁ～！志を同じくする同胞に逢えて私感激しちゃう」

如月純と名乗った女性は顔をぱっと明るくさせたかと思うと、一気に早口にまくし立てた。

「あつ…ええ」と…

先程の静かな雰囲気とは打って変わった彼女の変貌ぶりに呆気にとられる蓮也とシエル。

「あつごめんなさいね…ちょっと興奮しちゃって…まず何から話そうかな？」

「そ、その前に自己紹介を…」

「あら！そうだったわね」

どうやら自分の研究成果(?)を話したい一心らしい彼女ははやる気持ちを抑えているようだった。

えらい人に当たってしまったなと蓮也は内心苦笑しながら自分とシエルの自己紹介をした…

如月純は飛び級に飛び級を重ねて若干24歳という年齢で大学教授となった秀才である事がその後の彼女の話で分かった。

彼女は自分の研究室に蓮也とシエルを案内すると、早速自分の研究成果をあくせくと話し始めた。

その内容はまさしく複雑怪奇極まりないものであった。

その中から何とか理解できた内容をつなぎ合わせてみると次のような事らしい。

我々がいる世界の他にも同じ時間軸(y軸)にある全く別の次元(x軸)の世界(点)があるというのだ。

それぞれは干渉することは無い（平行した軸の位置にいるため）またこれを非干渉の平行世界というらしい。

また原理的にx軸が同一でy軸のみ違う世界（歴史の改変による波紋）が存在することも確認されている。

これを時間の支流化というらしい。

そしてこれらx・y軸上の次元関係から超越したもう一つの世界があるという。

それがx・y軸に垂直に交わる形でつきたっているh軸の存在。

h軸の上には、人知を超えた新たな世界（点H）が広がっているという。

通例h軸は動くことはせず、y軸の数値の増加に倣って平行に存在しているが、ふとした時にその均衡が破られることがある。

そうするとh軸は揺り粉木状に周り始め、x・y軸にある全ての世界（点）に影響を与えてしまう。

この状態にのみ起こりうる事態としては、h軸から落下した物体（仮にCとする）がx・y平面にある全ての点に降り注ぐというものである。

物体Cはx・y平面上で唯一の存在であるにもかかわらず、全ての点上に偏在する存在となってしまう。

例えを用いれば、入り口が一つで出口が三つに別れたパイプを用意し、その出口にそれぞれの受け皿を用意する。

一つのリングをパイプの入り口に放り込むと、それぞれの出口の受け皿には一つずつ合計三つのリングが落ちるという意味である。

この三つの物体Cはどれもが本物であり、分裂したわけでも複製したわけでもない。

このようなパラドックスが起こりうるのが『上方一点・下方三点の位置空間の相互作用と歪みに関する論理的解析』なのである。

尚、上方一点とはh軸の頂点にある点Hのことであるが、下方三点というのは例として挙げただけなので特に深い意味はない。

原理的には二点でも四点良い。

「どうかしら？理解できた？」

説明のために書いたホワイトボードを背にしたまま如月は得意そうに言った。

前の机に並んで座っていた蓮也とシエルはポカーンと口を開けて彼女を見上げていた。

「な…何だか言葉が難しかったけどなんとか」

「私はよくわかりませ〜ん…」

シエルはまるで学校で突然指された小学生のようにしゅんとしている。

「とりあえず概要だけでもわかってくれたらいいわ。また詳しい事は追々話すから」

如月は手に持っていた指示棒をぱちんと折り畳むと胸ポケットに入れる。

「それにしても凄いつすね…こんな複雑な仕組みを発見するなんて」「あら、別に大したことなくてよ。私はただ事実を書いただけだもの」

「…事実？」

蓮也がそう聞き返した時だった。

如月の机に置いてあるプッシュボタン式の電話が鳴った。

「はい。…わかりました。…ええ。はい。失礼します」

短い受け答えの後彼女は早々と電話を切った。

そして二人に向き直ってばつが悪そうに言う。

「ごめんなさい…少し用事が出来てしまったみたい」

「ああ、良いですよ。元はと言えば俺らが勝手にメールしたんだし…また話聞かせてください。見れば分かると思いますけど俺この学生だし。シエルは…」

そう言おうとして蓮也は言葉に詰まった。

そう言えば彼女に自分とシエルの関係を説明していない。

何と説明すれば良いのか？

ウチに居候してる天使です、等と説明すれば良いのか？
そんな馬鹿な。

しかしそれならば自分らが彼女の話を書く理由は何か説明がつかない。

ただ単に興味があるから？

そんな理由では怪しまれるだろう。

いやそれ以前に何故彼女は見ず知らずの自分らにこうも事細かに自分の論文を話してくれるのか？

考えてみれば不審な点が多すぎる。

彼女は、如月純は、一体何者なのか？

拭いきれないわだかまりを抱きながら連也は大学を後にした。

+++++

6

「まだ、治まらないか…」

落胆と苛立ちが幾分混じった声質で聡明な智天使であるメルキエルは呟いた。

足元にある『穴』を見やる。

そこには文字通りぼっかりと穴が空いていて、分厚い雲の流れと吹き出す風をみとめることができた。

ここは『神の御座』の中でも最も深い階層にある、天界と『天柱』あまのはしら、そして下界とを繋ぐ場所である。

『天の臍』へそと云われるそこは丸いドーム状の建物が建っており、そしてその真ん中には先程言ったように穴が空いている。

穴の規模はかなり大きく、円周に沿って歩けば結構な時間がかかるくらいだ。

そしてこの穴こそが『天柱』を観察する事が出来る唯一の場所なのだ。

「天柱が下界へ定まらなければ、…シエルと同じように次元の歪みに飲まれてしまう…」

目下に広がる円形の雲を眺めながら、時折雲達の間を縫うように煌めく天柱を目で追う。

天柱の見た目は光り輝く柱そのもので何の変哲も無いのであるが、それが今は擂り粉木のように豪快に乱れ廻っているのはかなり圧巻と言えるかもしれない。

「…忌々しい」

大聖堂でサフィエルから聞いた事実を思い出しながらメルキエルは唇を噛む。

天使が下界との交流を絶った理由は、何も人間達を見下していたからではなかった。

天界と下界では、時間そのものの流れが違う。

下界を流転の世界とすれば、天界は不変の世界。

時間は流れ行くものだというのが、我々はそこから取り残されている。

神話の時代、天使達の永遠の命を妬み、それを我が物にしようと戦争を仕掛けた人間達。

しかし限りある命の者達の死期を早めるとするのは余りにも不憫だというもの。

激しい総力戦の先に出した答えがこれだ。

今まで起こった事全てを水に流し、人間達には何も干渉しないという事。

天柱を歪めて下界へ渡ることを難しくした。

天老院の許可を得ずに下界へ渡れば墮天罪。

全ては神の格別の御慈悲だという。

…しかしそれならば何故…！

何故彼女をここに置いたのか？

彼女は何も知らないというのに。

罪深いのはどちらなのか…！

「待っているシエル…」

眼鏡の縁を指でなぞりながらメルキエルは徐々に安定しつつある天柱を見つめ続けた。

7

その日、蓮也は朝日を目に受けて目覚めることは無かった。

何故なら彼の上には天使の少女が乗っかって可愛い寝息をたてていたからである。

「だあつ！な、何だあ！？」

柔らかな人（天使？）肌の暖かさに頭部を包まれながら、蓮也は状況を把握しようと首を動かした。

シエルは蓮也の頭をちょうど胸に抱くような形で綺麗に身体を折り畳んで眠っていた。

蓮也が頭を動かすとシエルは胸に動くものを感じ、くぐもった声をあげる。

「おっ…おゝい！シエル、勘弁してくれよお！お前こんなに寝相悪かったのか？」

彼の喋る振動が伝わったのか、今度は少し身を擦ってくすぐったそうにするシエル。

…何だか前にもこんな事があったような。

「…今回は悪いが初めから強行手段に訴えさせてもらうぞ」

そう言いながら蓮也は自分の顔の目の前にある彼女の細い腰に手を伸ばす。

がしっと掴んで彼女の身体を引き剥がそうとしたその時だった。

「あつ…蓮也さん、そこはだめですう…」

頭の上からのほんとした声が聞こえた。

『な、あつ！！起きてたか？！』

「ごめんなさい、すぐにどきますから…でもその前に…その手、放してくださいませんか？」

身体をくねくねさせて彼女は切なげに訴えてくる。

見ると、自分の両手は彼女の腰を掴んだままであった。

「ああ…すまん。でも起きてたんならどいてくれれば…」

「いえ、今の蓮也さんの手で起きたんです」

「ああそうなの…」

それにしても前後の頭の位置が違う姿勢で話をしていると奇妙な違和感があった。

「…ん。よいしょっと…」

目前にある彼女の胴体がもぞもぞと動く。

やがて下へと下がっていく途中、蓮也は彼女の胸元を覗いてしまった。

白い肌に独特なラインを奏でる鎖骨。

そしてその下方には申し訳程度の胸の膨らみが僅かに見えた。

大人になりきれていない、かといって子供とは言えない、微妙な色香に蓮也は熱にうかされた。

「はうつ…朝からこれはキツイ…」

「…どうしたんですか？」

全く何も知らないシエルが、その純朴な瞳で自分を見詰めてくる。

そんな無知で純粋な彼女に変な気を起こしてはならないと蓮也は自戒した。

「…さて今日は休校日だからな。気晴らしにどこか行くか？」

普段着のシャツに腕を通しながら蓮也はシエルに聞いた。

「またどこかに連れて行ってくれるんですか？わあ、嬉しいです！」

顔をぱっと明るくして羽根をぱたと動かしたシエルはまるで子犬のようであった。

それにしても寝起きだというのに彼女の髪も服も全く乱れてないの

は何故だろうか…？

8

「良かったのか？こんな所で」

蓮也は、周りに展示されている家電品を熱心に観察しているシエルを見ながら話し掛けた。

「もちろんですよ！とっても面白いです」

彼女が「もっと沢山機械が見たい」そう言ったのは家を出て車を走らせ数分経った頃だ。

そこで彼女の希望にそうように蓮也が考え出したのが家電店であった。

世間一般から見ればこれはデパートになるのか分らないが、よりもよって家電店に連れてこさせられるとはやはり彼女が彼女たりうる理由だろうか。

まあ彼女の知的好奇心を満たすためには絶好の場所かも知れないが、とにかく彼女にこの世界の色々な事を見せてやろう。

ひいてはそれが彼女の問題解決に繋がるのかもしれないのだから。

「おーいシエルう！…ってあれ？」

先程彼女のいた場所に向かって呼び掛けた蓮也だったが、既にそこに彼女はいなかった。

彼女は別の売り場に来ていた。

背の高い本棚に似た陳列棚が彼女の両脇に立っている。

シエルはその間にあるスペースを歩いていた。

陳列棚は彼女の身長よりも遥かに高く、首を一杯に反らして見上げないと彼女の視界には収まらなかった。

彼女が背伸びしながら一生懸命見上げる様子を蓮也が見たなら、ま

た可愛らしいなど表現するのだろう。

「これは一体なんでしょう？」

立ち止まって陳列されているものを手に取ってみる。

照明に反射して光沢を帯びているその物体は形状は本に似てなくもないが、如何せん手触りが違いすぎた。

「……んしょっ」

本を開くようにその物体をかばっと開けるシエル。

すると中には丸い円盤らしき物体が張り付いていた。

「……？」

シエルにはそれが何なのか分からない。

ただ彼女は金色に輝く円盤を見て溜め息をもらす。

「何だか綺麗です……」

暫くその円盤に見入っていた彼女だったが、ふと目に留まったものがあつた。

それは同じような本に似た物体であつたが、彼女が注目したのはそれに印刷されていた写真だつた。

濃紺の海に沈み行こうとしている巨大な船。

そしてその下には「TITANIC」と書かれていた。

「あいつ、いつつも突然いなくなるよなあ……」

蓮也は見失つたシエルを探し出すため、幾つかのエリアに別れた売り場をはしごしていた。

「……ぴんぽんぽんぽん……」

その時迷子の呼び出しのコールサインが頭上で鳴った。

「…………」

「……？」

しかしコールサインの後には何も聞こえない。

どうしたのか気になった蓮也は立ち止まって自分の真上にあるスピーカーを見上げた。

「ブツンッ…ゴトゴト…あつあのう…えとっ…こほん…ね、蓮也さん助けてください！私、迷子になっちゃいました。以上です！
♪ぴんぽんぽん♪」

その声を聞いた途端、蓮也は文字通りずっこけそうになってしまった。

「あ、あいつ…何やってんだ…」

迷子センターに赴いた蓮也はやはり、というか当然というかシエルが待っていた。

「あなたが彼女の保護者ですか？」

迷子センターにいた女性従業員は蓮也に疲れた調子で聞いてくる。

「はい…一応」

「蓮也さん！良かったあ…」

シエルは蓮也の顔を見た瞬間、笑顔で彼の腰に抱きつく。

「…それでは今度から気を付けてくださいね」

女性従業員はやつれた顔で去っていった。

…シエルの相手をするのは普通の人にはキツ過ぎたようだ。
どんな事が起こったのかは想像にお任せしよう。

「にしてもシエル…あんま人様に迷惑かけるなよ？」

暫く歩いた後、蓮也は彼女の前に腰を降ろして言い聞かせた。

「すいません…でもこれ、見てください！」

彼女は何処からか隠していた物体を蓮也の前に突き出した。

「DVDじゃねえか。お前これどうしたんだ？」

「えっあの…沢山並んでたので…ついたらいたんですけど」

「ばっ…ばか！金払わずに持ってきちまったんかよ！」

「ありがとうございました」

「いえ、どういたしまして」

店員の威勢の良い挨拶にシエルはわざわざお辞儀を返していた。

「2380円…まあこんなくらいならいいか」

レシートをポケットにねじ込むと、改めてシエルの持って来たDVDのパッケージを見る。

「TITANICかあ…懐かしいな…んでシエル、これがどうかしたのか？」

シエルはいつになく真剣な面持ちで答える。

「この風景…見たことあるんです…」

「見たことある？…それってもしかして…」

「はい…別の場所にいる私が、以前その船に乗ったみたいなんです」

「みたい…？」

「すいません…まだ全てを思い出したわけではないので」

「そうか…じゃあこれ見てみれば何か思い出すかもよ？」

蓮也はパッケージを開けてDVDを指し示す。

「見る…？どういうことですか？」

「そうか…お前は知らないよな。こん中には昔の風景や音が記録されていて、再生すればいつでもその風景が見れる便利なものなんだよ」

+++++

9

身体が浮いていた。

ゆらゆらと漂う水流に身をまかせると、自分の体温が急激に下がっていくのがわかる。

もう助からない。

アルバートは固く目を瞑り、目前に迫っているであろう自分の死を待った。

氷点下の海水は身体のコアにまで染み渡っていく。

そしてついに意識さえも朦朧とした時、誰かが自分の腕を引っ張った。

その力は驚く程強く、それ以前に強い意志を感じることが出来た。掴まれた腕は遙か上にある海面へと導かれていく。

アルバートは淡い光を感じて目を開けた。

そこには白く輝く天使の姿があった。

光の届かない海中であつてもはつきりとその姿を確認できたのは、他ならない彼女が光り輝いていたからである。

彼女の着る真っ白いワンピースが水流に倣され、緩やかに翻る。

身体をすっぱり覆ってしまう程の大きな翼が、海中で力強く羽ばたく。

その度に無数の水泡が現れては消えていく。

「もう少しだから…頑張つて」

彼女がそう喋った気がした。

実際には水中なので声は聞こえない。

しかしアルバートは感じていた。

失った筈の愛しい面影を。

彼女が海中でひとつ羽ばたく度に自分の身体はぐんっと上へ押し上げられる。

水中の中とは言え、大の男である自分を軽々と引っ張っていく彼女にアルバートは軽い戦慄を覚えた。

何しろ彼女は翼以外は動かしていないのである。

物凄い力だ。

ふいに身体を包んでいた冷水がなくなり、代わりに身を切るような冷気がアルバートを撫でた。

海面に出たのだ。

しかしそう思ったのも束の間、彼女は更に羽ばたきながらアルバートを胸に抱き寄せた。

「しっかりと捕まってる」

今度ははつきりと聞こえた。

あのシエルよりも大人びた女性の声だった。
それもその筈である。

アルバートの目前に押し付けられた彼女の豊かな胸の膨らみは14歳の少女のそれではない。

彼の密かな期待は脆くも崩れ去った。

顔を上げて彼女の顔を観察するとシエルと同じ碧色の瞳に、月明かりに照らされて輝く白金の髪が目に入った。

顔立ちは…形容しがたい美しさを持っていた。

敢えて言うならば、シエルがあと数年もすればこのように成長したのではないか？

そう思わせる何かがあった。

「…お前…誰なんだ？」

至極当然の質問を投げかけたアルバートだったが、その問いは彼女に一蹴された。

「今は言えないわ」

凜とした声で気持ちの良い程に言い切られてしまったからには、アルバートはもうそれ以上言及する気にはなれなかった。

「…ただ、天使になることが出来なかったあの娘の…最期の願いだと言っておくわ」

そう彼女は告げると羽根を一気に羽ばたかせる。

すると今まで二枚だとさえ思っていた彼女の羽根が六枚に別れた。

六枚の羽根を縦横無尽に羽ばたかせながら彼女は空を舞った。

天使になれなかった娘…。

アルバートはその言葉で十分だと思った。

もう、自分には。

眠ってしまった彼女を想った。

「…私には貴方を安全な場所にまで送る義務があるわ。貴方が行きたい場所、何処でも良いわ…言って頂戴」

「行きたい場所…？」

アルバートは少し考えた後、震えた声で言った。

「天国…かな…もう一度シエルに」

「それは駄目。あの娘がそれを望んでいない」

彼女は先ほどと同じようにきっぱりと言った。

「そうか…そうだな。あいつのためにも生きなきゃな…よし、分かった。アメリカへ」

アルバートは決意に満ちた声で言った。

「分かったわ…とばすから捕まっついてよ」

彼女はアルバートを胸に抱き締めたまま空を飛び続けた。

「…ごめんなさい」

ふいに彼女が口を開いた。

「何がだ？」

「貴方は…『天乱』さえ起こらなければこんなことにならず普通に助かったのに…」

「…？」

「あの娘と出会ったばかりに貴方は…」

彼女は目を伏せて呟く。

「それは違うぜ。俺はシエルに出会えて良かったと思ってる。俺は、俺の意志であいつの

傍にいたんだからよ。最期まで…」

その言葉を聞いて彼女は微笑を浮かべながら返した。

「あの娘が好きになった人だものね…今のは愚問だったわ。忘れて頂戴」

そして、それから…

海ばかり広がっていた視界についに大陸が姿を現した。

自由の女神像の前を彼女は突っ切り、市街地の裏手へと翼を向ける。

「…着いたわ」

地面に着地した彼女は長らく抱き締めていたアルバートを下に下ろす。

「色々ありがとうな…その…」

「私の名前？」

「…ああ」

「…………ソリユータ。ソリユータハイル（Solutahy rail）。それが私の名前」

その言葉を残し、天使の彼女は去っていった。

その後、アルバートは亡きシエルの面影を思い出しながら「翼の無い天使の絵」を描き上げる。

そしてその絵でアルバートは一躍歴史に名を残す画家となる。

しかし誰が知るだろうか。

彼が本物の天使を描いていたという事を……。

6th wing “Melancholy Angel” (後書き)

執筆が遅くなってすみません(苦笑)

まだまだ続きますので気長に待っていてください

7th Wing “Heartless Angel” (前書き)

絡まった糸が少し解けていく。

その中で天使の少女は大きな変化を遂げようとしていた・・・

7th Wing “Heartless Angel”

1

「あ、アルバートさんは！？アルバートさんは何処ですか！？」
突然シエルは大声を出しながら立ち上がった。

「何だつて？一体どうしたんだ！」

「嫌…嫌…沈む…沈んじゃう！皆死んじゃう…そんなの嫌です！」
頭をかきむしりながら嫌々をするシエルは鬼気迫る表情で蓮也に訴えた。

「落ち着けシエル！アルバートって誰の事だよ！」
蓮也は彼女の両肩を掴んで揺さぶった。

「あつ…あつ…あつ…あああぁ」

口をだらしなく開けたままひくひくつと肩をびくつかせた後、シエルは蓮也の胸に倒れ込んで気を失った。

ベッドに彼女を横たえた蓮也は、改めて先程二人で見たDVDを手にとってみる。

「TITANIC…」

こことは別の次元にいるシエルがこの船に乗っていた。

そこで彼女が体験した事…

それは察するに余りある。

どうしてもっと早く気付いてあげられなかったのだろう。
治りきっていない傷口にまた刃をあてるような真似をしてしまったのだ。

「…ごめん。シエル」

気を失ったままのシエルの頬をなぞりながら蓮也は呟く。
そこには真新しい涙の跡があった。

「さてと…これからどうする？」

アレンはぼんやりとした表情で向かいに座っているシエルに話しかけた。

「ずっとここにいてもしょうがないしな…どこかこの辺りを回ってみるかい？」

「……………」

しかしシエルは反応を示さない。

彼女の瞳はあらぬ方向に注がれたままで、心ここにあらずといった感じだった。

「シエル？」

「…えっ？あっ…はいっ！何ですか？」

突如びくりと身体を震わせた彼女は辺りを見回しながら返事をする。

「…さつきから話しかけてたんだけど」

アレンは呆れたように頭をかく。

しかしその後シエルは信じられない言葉を発する。

「……………あなた…誰ですか？」

シエルはアレンの顔を見てそう言ったのだ。

「な……………何言ってるんだよ？僕だよ！アレンだよ」

つい先程までは普通に話していた彼女が突然自分の名前を忘れるという事態にアレンは困惑した。

「…はっ！…そ、そうでしたね…すいません」

そう絞り出すように言った彼女の視線は泳いでいた。

「一体どうしたんだい？」

アレンが彼女の隣りに座り顔を近付けてくる。

「な…なんでもないです」

シエルはそれから逃げるように顔を背ける。

「…なんでもないですって顔じゃないよ」

溜め息をしながら椅子に座り直すアレンの顔には明らかに動揺の色

が見える。

彼のその顔をじっと見ていたシエルは、漸くおずおずとその口を開いた。

「もしかしたら信じてもらえないかもしれませんが…」

しかしそこで彼女の言葉は途切れた。

「…この気配…！まさか！」

突然目を見開いて天井を見上げるシエル。

彼女が見ているのは天井ではない。

遙か彼方にある天界を見ていた。

「どうしたんだい？」

アレンは立ち上がり彼女のうかない顔を見ている。

「…いえ、何でもありません」

彼女はそう言うしかなかった。

「…気分転換に散歩でもする？」

アレンはうなだれて座っている彼女に手を伸ばす。

「…はい」

シエルは笑顔を形作って彼の手を取った。

外に出ると鬱蒼と覆い茂った木々達の匂いが鼻腔をくすぐった。

周りは緑一色なのだから当然だろう。

「森の匂いが…します」

シエルは両手を広げて深呼吸するとアレンに向かってにつこりと微笑んだ。

すると彼女はアレンがあのかつての帽子を被っていることに気付く。

振り返ったつばの部分に差されているのは自分の羽根。

「その帽子…」

「ああ、折角君の羽根をもらったんだしね」

そう言つてアレンは帽子のつばを直した。

「…ありがとうございます」

その笑顔は心からのものではなかったが、自分に気を使ってくれたアレンに対してのお礼のつもりであった。

しかしアレンは彼女に微笑み返した後、表情を曇らせた。

「…何か悩みがあるのなら相談に乗るよ?」

彼に造り笑顔は通用しないらしい。

「あの…いえっ」

シエルはまるで心を見透かされたような感じがして急に気恥ずかしくなった。

「違うんです…実はっ」

しかしシエルの言葉は強い光によってかき消された。

一瞬にして視界が真っ白に塗り潰されたかと思うと、その後疾風と共に轟音。

光に慣れた目が捉えたのは、吹き上げる葉っぱの渦の中心に佇む羽根の生えた人間達だった。

アレンにはその者達が天使だという事にすぐに気付いた。

それぞれ皆鎧や剣・盾で武装しており、それはさながら天使の騎士だった。

「…な」

アレンが何か言おうとした先に集団の一番前に立っていたリーダーらしき男が静かに言った。

「…誤差は殆ど無いようだな」

「メルキエルさん…来てしまったんですね」

シエルは搾るように無念のこもった低い声で言った。

「シエル…俺と共に帰るのだ」

++++3++++

真っ白い厚手のマントを揺らしながらメルキエルはシエルへ近づいていく。

その度に鎧同士に触れ合う金属音がした。

「さあ…シエル、こちらへ来るのだ」

それに合わせるようにシエルは後退りをする。

「…嫌です」

首を振りながら彼女は震えた声で言った。

差し伸べようとした手をぴたりと止めたメルキエルは嘆くように口を歪め、その手を眼鏡の柄へ持つていく。

「もう…以前のように俺を慕ってはくれないのか？」

彼の眼鏡のずれを直す仕草を見たシエルはぐつと拳を握って訴えた。
「ごめんなさい…でも私はとても大切なものを見つけようとしてるんです…今はその事しか考えられないんです」

胸板に手をあててしみじみと言葉を続けるシエル。

「それが何なのか、今は解りませんが、…でもそれを見付ける事ができたなら、私はきっと本当の私になれるような気がするんです」その言葉を聞いてメルキエルは深い溜め息をついた。

「『本当の私』…か。それでは困るんだよシエル。お前はここに存在することを許されてはいない。大人しく天界へ帰れ。さもなくば」

…」

メルキエルは腰に差していたロングソードを瞬時に抜き払うと、その銀の刃を音もなくシエルの首筋にひたりと触れさせた。

「…我が傀儡となれ」

ひゅうつという息を吸い込む音をあげた後、シエルは身じろぎも出さない程に居竦められていた。

自分へ刃を向けたメルキエルの行動が信じられなかった。

彼に初めて逆らった自分の言動が信じられなかった。

一体どうしてしまったのだろう。

彼も、自分も何かが違ってきていた。

呼吸をする度に皮膚に覆われた鎖骨が上下して冷たい刀身に触れたり、触れなかったりする。

このまま彼が手首を少し捻るだけで自分の命は終わってしまうだろう。

針の穴に糸を通すような緊張感と繊細さが自分を取り巻いている。

もう何も考えられなかった。

両者の沈黙を破ったのは弓矢をつがえてメルキエルに狙いを定めたアレンの言葉だった。

「…剣を納める。お前達は何者なのか、シエルとどういう関係かは知らないが、僕にはこれだけは分かる。お前達はシエルにとって望まれた来客じゃないってことだ」

メルキエルは手を動かさないままちらとアレンの方を見やる。

「…愚かな人間が。『貴様ら』のような奴がいる限り下界は腐ったままだな」

「何だと！」

つがえた弓に更に力を込めたその時、視界の横に銀色の物が横切った。

間髪いれず体を捻ってそちらに向けて矢を一気に解き放つと、武装した天使が一人アレンへ向けて斬撃を繰り出す所であった。

振り抜いた直後の隙だらけの肩へアレンの放った矢は深々と突き刺さった。

「…ぐう！」

天騎士の一人は剣を取り落とし、肩を押さえて呻く。

「不甲斐ない奴だ。人間如きに何をやっている！」

メルキエルはいつの間にかシエルを後ろから抱きかかえるような形で水平にした剣を彼女の顎下にあてていた。

片手でメルキエルが合図を出すと残る天騎士達が一斉にアレンへ抜剣して襲いかかった。

「いや…やめて、お願いやめてえっ…！」

喉を震わせて出した彼女の悲痛な叫びは鋭い金属音にかき消された。武装した天使に囲まれた。

その数はざっと見ただけで十指に余る。

白兵戦に弓矢は不向きだ。

どうする？、と考える前に手が伸びていた。

既に目前に迫ってきていた剣閃に、夢中で落ちていた剣を拾い上げ

頭上にかざした。

衝撃を予期して身構えたが、それは徒労に終わった。

激しい火花は散ったものの、片手で十分に受け止められる一撃であったのだ。

「…な、に？」

皆が驚いていた。

無論受け止めたアレンドさえも。

「…何をしている！かかれ！」

メルキエルの声に天騎士達は動きを再開したが、アレンの人間離れた力に為す術なく倒れていった。

「そんな、馬鹿な…。天界の精鋭達が…」

メルキエルは目を見開いて驚愕の余り唇を震わせた。

「メルキエルさん…もうやめましょう…？」

首に剣を突きつけられたままシエルは白い喉を鳴らした。

「…さあ、シエルを解放しろ！もうお前一人だ」

アレンは持っていた剣を地面に放り投げると再び弓矢をメルキエルへ向ける。

「…！その羽根！…そうか、そういうことだったか。道理で人間如きがあれほどの力が出せるわけだ」

アレンの帽子に刺さっている羽根を見て、メルキエルは納得したように何度も頷く。

「大天使…とは恐れいったものだ。本当ならば…名前を呼ぶことさえも憚られる」

そうメルキエルは言いながらシエルを見る。

「…？どういことですか？」

シエルは言葉の意味が理解出来なかった。

「…ふっ…ここで話してもよかるう。ではシエル、お前に真実を教えてやる」

「……」

「シエル…お前は生粋の天使ではない」

メルキエルはあっさりとシエルの存在を否定する発言をした。
「…え？」

4

翌日の事、蓮也はシエルを連れて大学の隣りにある功正寺（こうせいじ）という寺に来ていた。

シエルに色々なものを見せてやる。

その命題をすべからく実行する意味と同時に、彼女の気分転換も兼ねていた。

過去の出来事のリフレイン。

それが真実に近づく最短の道である事は分かっていた。

しかしシエルの心情を察すると蓮也はその方法を進めることは出来なかった。

今はただ、自然と文化に戯れて一喜一憂する彼女を見ているだけで良い。

蓮也はそう自分に言い聞かせていた。

無論今後の事に目を向けると、明確な答えは示されていない。
しかし蓮也はこのまま現状が続いても良いと思い始めていた。
可愛い天使の少女との共同生活が。

彼女にとってそれは不都合な事なのかもしれないが。

「蓮也さん、あの高い建物は何ですか？」

本堂へと続く階段に腰を下ろし、遠目に彼女を見ていた蓮也だったが、その声に彼女の指差した先に目をやる。

なる程、五重塔が彼女の興味をひいたようだ。

蓮也は彼女の傍にいくと、早速彼女に「ご教授」を開始しようとした。

「こんな所で何をしているの？」

聞き覚えのある凜とした声が背中に聞こえた。

「あつ如月教授」

振り返ると前のようにスーツに身を包んだ如月が少し遠い場所に立っていた。

「ちよつとした気分転換ですよ」

嘘は言っていないつもりだった。

「ふうん……？」

如月は含みを持たせた返事をあげながら、こちらに歩いてくる。

「ところで、あなた教務課から呼び出しがかかってたわよ。早く行った方が良くない？」

「マジっすか？俺何かやばいことしたかな……」

焦る蓮也を後目に如月はさらに付け加える。

「『大至急』だって……言ってたわよ？」

彼女の静かに見詰めるその瞳は穏やかではあったが、内に秘めた凄みが蓮也を浮き足立たせた。

「俺、ちよつと行ってきます！」

蓮也はセンタービルに向かって一目散に駆けていった。

「この娘はちゃんとみててあげるからゆっくり行つてらっしゃい」
小さくなる蓮也の背中に如月は手を振りながら呼び掛ける。

彼に最後まで聞こえたかは分からなかった。

「さてと。シエルちゃんだったわね。少しお話ししようか？」

前かがみになってシエルの目線に顔を合わせ如月は彼女にっこりと微笑みかけた。

境内から少し離れた場所。

広い通りの端にあるベンチに二人は並んで座っていた。

道の両側には小さな小屋が幾つも並べられており、その中に石地蔵がある。

時折吹き抜ける緩やかな風は北風ではなく、春の訪れを予感させるやらかい花の匂いを含んでいた。

「どう？あなたの悩み事の解決に私の研究は役に立った？」

ふいに如月がシエルに向かって何気ない口調で訊いた。

「は、はい、とっても役に立ちました。でもまだ解決には……」

どこまで話して良いのか判断に迷ったシエルは、明確な言葉を避けて語尾を濁した。

「そう、それは良かったわ」

如月は遠い目をして呟く。

途切れた会話を繋ぐように彼女はまたシエルに問い掛ける。

「気になっているんでしょう？」

「何がですか？」

きよんとした表情のシエルを見ながら如月は自信に満ちた顔で語り始めた。

「私がどうして天使言語を知っていたのか、どうしてあなたの巻き込まれている状況に合致する研究を『偶々』していたのか、気にならない？」

シエルは『はっ』とした顔で口を押さえた。

「気にならない、といったら嘘になります。でもあなたは……」

「良いのよ。思った事を全て口にしくなくても。それでは言葉に踊らされる愚かな人間と何ら変わりはないわ」

如月はゆつくりと足を組み直しながら天を仰ぐ。

両腕はベンチに沿うように広げられている。

「私は真実を見通す目を持った。でも……それを持て余してる。どうすることもできないまま、ただ立ち尽くし、そして従うまま罪を犯すの……」

「如月さん……？」

シエルは心配そうな顔で如月を見ていたが、彼女はそんな事は気に留めていないようだった。

「シエルちゃん」

如月はにっこりとシエルに微笑みかけた。

「教務課で呼び出しなんてなかったぞ？おかしいなあ」

蓮也はセンタービルから元来た道に戻っていた。

暫くして功正寺に入った蓮也は本堂の階段を降りて大通りの辺りを見回す。

傍らのベンチに独り座っていたシエルを見つけた。

「おい、シエル。如月教授はどこに行っただよ？教務課で呼び出しなんて……ん？」

シエルに近付きながら話し掛けた蓮也は彼女の肩に手を置く。

「どうしたんだ？シエル……おいっ」

肩を揺さぶった途端、彼女の身体はゆっくりと傾いたかと思うとベンチに倒れ込んだ。

彼女は顔を赤らめたままぼんやりと蓮也を見ている。

額に手をあてると物凄い熱だ。

「シエル……！？一体どうしちゃったんだよ！」

「蓮也さん……わたし……」

5

蓮也は熱にうなされているシエルを看病し続けていた。

ベッドで短い息を繰り返す彼女は時折苦しそうに潤んだ瞳を蓮也へ覗かせる。

「大丈夫だ。シエル……俺がついてるからな」

汗ばんだその手をしっかりと握る。

額に乗せた氷嚢はみるみる温かい水へと変貌していった。

それでも蓮也は彼女を見守り続けた。

ふと不安がよぎる。

医者でもない自分が彼女の面倒を見切れるのだろうか？

それなら彼女を病院に連れて行ったら…。

しかし蓮也はその考えを即座に打ち消した。

彼女は人間ではない。

普通の医者に診せても駄目だろう。

そして何よりも彼女の正体がバレれば色々といざこざが起こるに違いない。

「寒いです……蓮也さんっ」

彼女はいつの間にか震える身体を蓮也へ寄せていた。

「シエル……」

彼女の肩をそっと抱き締めてやる。

自分は自分に出来る事をするだけ。

そう心に刻むと抱き締める手に一層力がこもった。

掌には彼女の熱い体温と震えが伝わってきた。

6

柔らかな朝日が瞼を差した。

どうやら自分はシエルの様子を見守もろうとして、そのままベッドに突っ伏して眠ってしまったようだ。

「そうだ！シエルは……！？」

ベッドを見るとシエルの姿は無かった。

綺麗に畳まれたかけ布団が、彼女の几帳面さを表していた。
敷き布団に触れてみるとまだほんのりと温かい。

何故だか彼女のぬくもりが無性に愛おしく思えた。

「シエル……？」

取り敢えず辺りに向かって呼んでみる。

返事はない。

この部屋には彼女がいないことを確かめると、まだ眠気の抜けない頭を引きずりながら蓮也は階下へ下りていった。
リビングにも人気は無かった。

どうやら昨夜両親は帰ってきてないようだった。

ふと何処からか水音が聞こえた。

「……？」

つられるように音の方向へ歩き出す蓮也。

そして辿り着いたのはバスルームだった。

脱衣場の籠に真っ白なワンピースが放り込んであるのが目に入る。

「風呂入ってたのか？…？…つかしいつの間に…」

シエルの居場所がわかった以上長居は無用と、蓮也がバスルームから立ち去ろうとしたその直後の事であった。

突如ガラス戸が開き、中から一糸纏わぬ姿のシエルが飛び出してきたのは。

そのまま彼女は蓮也に抱きついて泣きじゃくった。

「わ、わあっ！…シエル！？」

蓮也はシエルの姿を直視する事が出来ず、かといって彼女の裸の肩を抱いてやることも出来ず、ただたじろぐだけであった。

「れ…蓮也さあん…私の身体、どうなっちゃったんですかあ…？」

嗚咽の合間からかううじて聞き取れた彼女の言葉はそんな風だった。

「取り敢えずさ、落ち着けよシエルっ！」

蓮也はやつとのことと彼女をなだめ、そっぽを向いてバスタオルを渡した。

「ほれっこれで身体拭け」

「は、はい……」

暫くしておずおずと彼女の声が聞こえた。

「あのっ……！蓮也さん……こちらを向いてくれませんか？」

…何だって？

蓮也は心の中で聞き返した。

「…どうしてだよ」

蓮也は平静を装いながら応える。

「どうしても、見てもらいたいものがあるんです…お願いします」

彼女のひたむきな訴えに蓮也は堪えきれなくなり、ゆっくりと振り返った。

バスタオルを放ったまま彼女は床にぺたりと座り込んでいた。

異変にはすぐに気付いた。

床に点々と滴った血の痕。

そしてバスタオルにも少量の血が付いていた。

「何処か怪我してたのかシエル！」

しかし彼女を注意深く観察して（あまり見てはいけないと分かっているが）みても怪我をしている様子はない。

「違うんです、そうじゃないんです。朝起きて、熱が下がったみたいなので起きたら、足の間から……ち、血が……私、おかしくなっちゃったんですか？……とても、自分が怖いです」

しどろもどろに喋るシエルは、動揺しきっている。

言つべき言葉が見付からなかった。

どういうことだろうか？

天使である彼女が初潮を迎えることなど有り得ないことだ。

しかし現に彼女は……。

不安げな表情で自分を見上げるシエルを、蓮也は奇異な目で見ずにはいられなかった。

「や、やっぱり私、おかしいんですか……？」

怯えに満ちた声でうなだれた彼女はまたすすり泣きを始めた。

「……いや、おかしくなんかないよ。女の子ってのは成長すると皆そうなるものなんだ」

蓮也はそう言うしかなかった。

「だから泣くなよ。これでお前も一人前の女性だ」

蓮也は新しいバスタオルを掴むと彼女の身体に巻いてやる。

「……ほんとですか？」

シエルは泣くのをやめ、頬につたう涙を拭う。

「今のでまた汚れちゃっただろ？もう一回入って来いよ」

蓮也はそう言いながら彼女を促した。

「はい……」

そう言いながらも、彼女は何か言いたそうな表情で蓮也を見詰める。

「あの……一緒に入りませんか？」

「……え？」

「お前は純粹な天使ではない。天使と人間との間に生まれた狭間の者『ネピリム（Nephilim）』だ」

「……………え」

メルキエルと言った言葉がシエルの中に染み渡るまで数秒を要した。「もつとも、お前の母親は天使の中でも最高位の『天使長』……言いかえれば女神だ。となるとお前は半神半人。名前を呼ぶことさえ憚られるとはそういうことだ」

「……………そんなこと……信じられません！メルキエルさん嘘だと、嘘だと言ってください！」

喉元に剣を突きつけられていることも忘れて、シエルは首を振って否定した。

「いいや、本当だ」

メルキエルはそうきっぱりと言い切ると、彼女の首にあてていたロングソードを鞘へ納めた。

「……………もうここにいる必要はないだろう？シエル、天界へ帰るぞ。」

お前の居場所はおそこしかない」

「わたし……………わたし……………どうしたらいいか……………」

生気の無い目を地面の一点に向け、うなだれたままぶつぶつと呟いている彼女。

「さあシエル、こちらへ」

その言葉と同時に眩い光の中に魔法陣が浮かび上がった。

草原の緑を黒く焦がす形で描かれた六芳星が姿を現す。

光を受けて辺りに倒れていた天使達はまるで呼ばれたように次々と起き上がる。

されるがままに魔法陣へと足を踏み入れるシエル。

他の天使達も次々と光に吞まれていく。

「行っちゃ駄目だ！」

アレンはすでに光の中へ消えつつあったシエルの手を掴んでいた。
しかし手に力をこめようとした矢先、逆に物凄い力で引つ張られていた。
バランスを失ったアレンは為す術なく光の彼方へ吸い込まれていった。

＋＋＋8＋＋＋

昔、天界には二人の女神がいた。
其れ則ち、愛を司る女神「リベルタ（Liberta）」
愛の音色を持つ歌声と美しい容姿は見る者全てを魅力する力を持っていた。

そして神の中で唯一人、愛を育む力を持ち合わせていた。
その慈愛に満ちた眼差しの前には燦々と輝く太陽でさえも恥ずかしがり姿を隠すと云われていた。

そは全てを愛す者。

法を司る女神「ソリユータ（Soluta）」

青色の冷徹な目で睨めば、どんな者でも全てを告白させてしまう力を持っていた。

その至高の域にまで高められた英知は万物を見通す千里眼となったと云われていた。

そは全てを解す者。

力の均衡が保たれていた時代。

二人の女神。

二つの世界。

天柱は一筋に天界と下界を繋ぎ、全てが安寧の言葉のままに流れていた時代。

しかしその良き時代にも翳りが差す。

下界の者の反旗。

天界と下界との間に起こった争い。

不死なる者と生ある者との戦い。

その戦乱の原因となったもの。

愛の女神を捕らえた恋。

下界の者へのその想い。

力の均衡が崩れたその時、争いが起こった。

愛の女神は下界へと降り立つ。

しかし、法の女神はそれを見逃さなかった。

情に絆された片割れの女神に彼女は「力」を行使した。

力の均衡は完全に「法」へと傾いていた。

愛の女神は赤子の姿にされ、全ての力を失った。

そうして下界に堕ちた彼女。

その彼女こそが、シエルの母親であつたのだ。

分厚い湯気の向こうに朧気ながら浮かび上がる彼女の影。

熱い湯船に身を沈めながら、蓮也は彼女がこちらへ歩いてくるのを見ていた。

大理石調のタイルの上をひたひたと彼女が歩いてくる。

まだ入って間もないというのに身体の温度が上がっているのを感じた。

「え……えと、まず掛け湯をしてから、ですね」

覚えたことを必死に実践しようとしている彼女の姿。

どうしようもなく、微笑ましい光景だ。

「おいおいそんな固くならんでも……」

蓮也がそう言いかけた時だった。

「きゃああああっ！」

彼女の悲鳴の聞いて顔を上げた時には既に遅かった。

足を滑らせて湯船へダイブした彼女の身体が、自分に覆い被さってきいてきた。

豪快な水音と柔らかい衝撃。

しかしそれは蓮也にとって生易しいものではなかった。

「ぶくぶくぶくぶく……ぶはっ」

彼女が落下した衝撃で蓮也は湯船の底に背中を打ちつけて戻ってきた。

「げほっげほっ！いててて……」

背中をさすりながら咳き込む。

一方シエルはと言うと、蓮也の首に腕を巻き付けて退避していた。

「ご、ごめんなさい！蓮也さん大丈夫でしたか！？」

「いや大したことないけど……シエル、一体何に転んだんだ？」

先程シエルのいた床の辺りに目を向けると、そこには石鹸が転がっていた。

「あゝすまん……あんなところに石鹸置いた俺が悪いわ」

そう頭を掻きながらシエルに目を戻すと、ある事に気付く。

先程の騒ぎで彼女の身体に巻かれていたバスタオルはどこかに吹っ飛んでしまっていた。

「あ……」

押し付けられた彼女の裸の胸の感触に蓮也の思考は停止した。

「す……すいませんっ」

羞恥に上擦った彼女の声が耳に聞こえた。

蓮也は携帯電話のアドレス帳を参照していた。

如月教授と連絡をとるためだ。

彼女が何を考えているのか分からない。

何より彼女の行動は不審な点多すぎるのだ。

もう一度会って話さなければ。

取り敢えず大学の教務課に電話をかけてみる。
すぐに事務員の女性が出た。

蓮也は如月純という教員にかわってくれと頼んだ。
するとこんな答えが返ってきた。

「本学にはそのような名前の教員はおりません」

携帯電話を切り、どういことなんだと思わず独り言を呟いていた。
するとバスローブ姿で濡れた髪をとかしていたシエルが話しかけてくる。

「……どうしたんですか？」

「あの如月って先生、本当は存在しないだよ。……訳わかんねえよ」

持っていた携帯電話をベッドに放り投げると自分もベッドに寝転がる。

「……そうなんですか」

「何かあんまり驚いてないな」

「いえ、少し……」

「少し、少し何だ？」

蓮也はベッドから起き上がり彼女の目を見る。

「少し……わかってきたような気がします」

「何をだ？」

「私の事や私に起こっている事、です」

そこまで言つとシエルは蓮也に向かって抱き付きながらベッドに倒れ込んだ。

「どわっ！いきなり抱き付くな！」

「今日はもう寝ましよう？」

まだ朝のうちだというのに彼女は訳の分からないことを言う。
しかしそう言つた時の彼女の顔は少しだけ寂しげであった。

次の日の事である。

蓮也とシエルは大学で行われているという絵画の展覧会に行くことになる。

蓮也が貰ってきたパンフによると、今回の目玉の展示画は天使を描いたものだという。

否が応でも気になってしまう。

何より行こうと言い出したのはシエルだった。

こうして二人は羽生子大学の多目的展示室に来ていた。

階段教室と同じくらいはある大きな部屋には衝立がゆったりした感覚で置いてあり、そこには何十もの絵画が規則正しく展示してあった。

蓮也とシエルは順路に従って絵画を見て回る。

シエルは相変わらず興味津々なようで、蓮也よりも先を歩いていつてしまう。

「シエル、はぐれるなよ」

声を抑えて呼び掛けたが、彼女は気付かずに曲がり角の向こうに消えてしまった。

「おゝい」

蓮也も続いて曲がり角を回ると、すぐ目の前にシエルが立っていてぶつかりそうになった。

「おわっ！曲がり角で立ち止まるなよ」

しかし彼女にはその言葉は聞こえていなかった。

「……シエル？」

蓮也は彼女が瞬きもせずじっと何かを見ていることに気付いた。彼女の視線の先を追うと、そこには大きな一枚の絵画があった。ソファの上で真つ白な長いリボンを身体に巻き付け、首をそらしてこちらに物憂げな瞳を向けている少女。床にはワンピースが脱ぎ捨ててある。

そんな光景が額縁の中に切り取られるようにして描かれていた。

息を呑んだ。

何故ならその絵に描かれている少女はシエルにそっくりなのだから。彼女の身体をすっぽりと囲んでしまう程の額の大きさである。

描かれている少女の身長もシエルとほぼ同じ。

等身大だった。

後ろ姿のシエルのすぐ隣にいる絵の中のシエル。

どちらが本物か区別がつかなくなってしまいそうだ。

「シエルっ……！これって……」

彼女に話し掛けようとして絵に近付くと、額縁の横にある札が目についた。

そこには『She has no wings . But she is real angel .』という長い題名と、描いた作者と年数が書かれていた。

「アルバート……フォレスター？1912年……」

その言葉を聞いてシエルは我に還ったように声をあげた。

「アルバートさん……？！やっぱりこの絵は……」

駆け寄って絵の表面を懐かしむようになぞる。

周りにいた見学者達もシエルが絵の中の少女と瓜二つな事に気付き始めていた。

周囲のどよめきなど気にも留めず、シエルは絵に身体を預けるようにして両手を広げる。

「おいシエル、人が集まってきた。まずいぞ！」

しかしシエルはうつとりと絵に身体を貼り付け、目を閉じたまま動かない。

「アルバートさん、」

彼女が名残惜しそうに言葉を紡ごうとしたその時だった。

「……シエル」

しわがれた老人の声が彼女の名前を呼んだ。

彼女が振り向くと、そこには車椅子に座った老人がいた。

長い年月によって深く刻み込まれた皺とふさふさした白髪は、彼が

かなりの高齢者であることが分かった。

「夢を見ているようだ」

老人は感極まった震える声で英語を喋った。

「アルバートさん……？」

シエルは彼にゆっくりと近付く。

彼は深く頷く。

「あ、アルバートさんっ！」

シエルは駆け寄って今や老人となったアルバートの前に跪いた。

「また会えるなんて思ってもいませんでした」

シエルは彼の手を握り締めて泣いた。

「私もだよ。あの後君は死んだとばかり思っていた」

「すいません、記憶が曖昧なのでよくは。でもアルバートさんもうやって？」

「私はね。君に似た天使に助けられた」

7th Wing “Heartless” Angel (後書き)

ようやく終わりが見えてきました。
頑張って書きますので見守っていてください。

8th Wing "A nasty angel must laugh at

二つ目の悲劇が彼女を襲う。
最早とめる術はないのか。
運命の刃が今、きらめく。

+++++

1

身体中に光の粒子が駆け巡っていく。

目を開けようとして、眩い光にそれをやめさせられた。

落ちていくような、舞い上がっていくような、平衡感覚が失われた空間の中にアレンは流

れていた。

そして次の瞬間、彼は見知らぬ風景に放り出されていた。

色とりどりの花達が咲き乱れており、少し遠くには清らかなせせらぎを奏でる噴水がある。

まるで夢のような風景であった。

少なくともアレンが今まで生きてきた中でこのような恍惚とした雰囲気の場合はなかった。

「まさか貴様まで連れてきてしまうとはな」

聞き覚えのある声がある。

吹き上がる花びらの嵐の中から現れたのはシエルを抱きあげたメルキエルだった。

「生きた人間がこの天界に足を踏み入れたことは天地開闢以来一度もないことだ」

シエルの垂れ下がった髪を撫でる。

「まあそんな事はどうでも良い。こうしてシエルが俺のものになったのだ。お前は後でゆっくり下界へ送り返してやる。無理矢理にでもな」

メルキエルは愉悦に満ちた表情で気絶しているシエルに顔を近づけて言う。

「……やめろ！シエルをどうするつもりだ！」

「……お前には関係の無いことだ。邪魔をするつもりならば消すぞ」
シエルを片手で抱いたまま振り返り、アレンを睨み付ける。

見れば剣の柄に手を掛けている。

「……………ん」

その時、シエルが瞼をしばたく。

幾度か瞬きを繰り返した後、やがて蒼の瞳が光を結んだ。

「シエル、気がついたか」

「……メルキエルさん？私……」

ぼんやりとした彼女の口調は明らかに状況を把握出来ていないようだった。

「お前は天界に戻ってきたんだ。これからは昔のように共に過ごそう」

心底嬉しそうなメルキエルの声に、シエルは素直に喜ぶことは出来なかった。

「……私、ここに居て良いんでしょうか」

「何故そんな事を言う。お前の居場所は一つ。ここ天界にしかない」
その言葉を受けて躊躇いがちに彼女は言った。

「私が純粋な天使でなくとも？人間の血をひいていても？」

その声質には諦めが込められているようにも感じられた。

「それは……」

それに対し、メルキエルが何かを言おうとしたその時であった。

「よく帰ってきたな。シエル」

空中庭園一帯に蔽かな声が響いた。

「その声は……サフィエル？」

メルキエルは声がした方を向く。

鮮やかな花達を踏みにじりながらサフィエルはこちらに歩いてきていた。

「メルキエルくん……君の役目は終わった」

サフィエルは真つ白な髭を風に揺らしながら涼しげに言った。

「……役目？何を言っている？俺は俺のやりたい事をしたままでだ。
あんたの手駒になった覚えはない」

「そんな事はどうでも良いのだよメルキエルくん。シエルをこちらに渡してもらおうか」

穏やかだが決してゆずらない厳しい色を帯びた口調。

それだけでメルキエルは彼が真剣だということが理解できた。

ここでシエルを渡せばどうなるか。

……察しがつく。

「……断ると言ったら？」

「こちらとしては少し手間が省けるだけだが」

サフィエルがそう言い終わらない内に完全武装した天使達が三人をとり囲むようにして光の中から現れた。

その数は数え切れない。

空中庭園を埋め尽くす程の数だった。

見れば、どの天使達も六枚の羽根を持っている。

「……なるほどな」

周りの天使達を一瞥してメルキエルは嘲笑した。

そして一転して激情を爆発させてサフィエルに訴えた。

「これが貴様の答えかつ！全てを無かったことにする事が！」

「シエルを生かしておいた事は間違いだったのだよ。あの時、母親と共に殺しておくべきだった。お陰で心を乱された者が幾ら出たと思っている？下界でも、天界でも」

サフィエルは言いながらアレンとメルキエルを順に見る。

「貴様が、リベルタを殺したのは……下衆が」

「全ては天界と下界の安寧のため、仕方ないことだったのだ」

サフィエルが手で合図すると、三人を囲んでいた天使達が一斉に武器を構えた。

剣を抜き払い構える者、弓に矢をつがえ狙いを定める者。

思い思いの無機質な殺気が三人を襲おうとしていた。

「まさか自分が天騎士に刃を向けられる立場になろうとはな」

メルキエルは腰のロングソードを抜き払う。

「……………おい」

「な……………何だよ」

突然メルキエルに話し掛けられたアレンは少し面食らった。

「俺が前に出て奴らを引き付ける。お前は俺が取りこぼした奴を弓矢で射ながら隙をみてシエルを逃がせ」

「わ、わかった」

共通の敵と戦うために協力しろということか。
考えている時間は無かった。

「……………シエル、僕の後ろに隠れていてくれ」

「は、はい……………」

痛々しく肩を自分の手で抱いたままシエルは微かに頷いていた。

「……………来るぞ」

メルキエルはロングソードを腰だめに構えて言った。

「……………シエルを死なせはしない！」

+++++

2

「……………舞い上がれ」

メルキエルは飛びかかって来た天騎士の幾人かを、振るった剣圧だけで吹き飛ばした。

更に後ろに控えていた輩には派手な立ち回りを演じながら斬りふせていく。

「どうした？手応えがないな」

重量感のあるロングソードを軽々と右へ左へ持ち替えながら戦う様は、想像以上に隙が無い。

長い刀身を活かし、相手の斬撃を絶妙な手つきで受け流した後の重

い一撃。

智天使という頭脳労働が中心の階級の天使であるメルキエルではあったが、その力量は並みの天騎士をも上回っていた。

また一人、軽い動作で敵を斬り捨てたメルキエルはアレンに向かって叫んだ。

「貴様も『力』を授かった者の端くれならばその『力』を見せろ！」
「なんだよそれは！」

引き絞った弓を一気に解き放った後、アレンは言った。

「とぼけるな！お前のその帽子に付いている物はなんだ！」

横一文字に敵の首を切り裂いたメルキエルは、血振りをしながら振り返る。

「シエルの、羽根……だけど」
答えるアレンに剣閃が迫る。

瞬時にアレンの目前に剣を滑り込ませて攻撃を受けるメルキエル。

「しつかりしろ！お前はシエルと契りを交わしたのだろ？下界で戦った時のようにあの『力』を出せばお前に取ってこんな敵造作もない筈だ！」

言いながらもまた1人、2人と斬り捨てるメルキエル。

アレンとシエルは互いに赤面したが、恥ずかしがっている時ではない。

「……よしわかった」

敵の一団をきつと見据えたアレンは流れるような動作で弓に矢をつがえる。

そして弓を横に倒して引き絞る。

「……中れ！」

蚊の鳴くような軽い飛翔音から、轟々と響く風切り音へ。

アレンの放った矢は一番前にいた敵の身体を易々と貫いた後、きりもみ状の突風を巻き起こして後続にいた者を切り裂いた。

敵を一掃した矢は地面に矢尻まで隠れる程突き刺さってようやく動きを止めた。

「……す、すごいです」

背中からその様子を見ていたシエルは目を丸くして呟いた。
射た本人であるアレンも驚いている。

そんな様を見てメルキエルは鳥肌がたつを感じた。

「まともに闘りあっていたら、……まず勝てなかったな」

アレンの一撃で他の残った天使達は怖じ気づいたらしく、攻撃が止んでいた。

「……もう諦めろ！命を無駄にするな」

アレンはそう叫んだが、それを遮ったのはサフィエルだった。

「戯言を……皆の者！目的を忘れるな！シエルを狙え！二人には手を出すな！弓兵、前へ！」

サフィエルの号令で、まだ無傷の弓兵が奥から進み出てきた。

「……まずい！アレン、矢を射ろ！」

弓兵達が矢をつがえるよりも早く、アレンは第二射を撃った。

三人を囲んだ弓兵達の一角が吹き飛ばされる。

「シエルを逃がせ！早く」

メルキエルはシエルの手をアレンに掴ませ、背中を突き飛ばした。

弓兵が矢をつがえ終わる。

無数の矢尻が彼女を狙っている。

シエルの心臓を。

「今だ！射ろ！」

サフィエルの声と共にありとあらゆる方向から矢が発射された。

「おおおおっ！」

メルキエルは剣圧で矢を吹き飛ばす。

しかし狙いを免れた矢が降り注ぐ。

どすっ。

腹にこたえる音ともに深々と矢が突き刺さる音がした。

アレンは落ちていたロングソードで矢を叩き落としたが、全てに対

応することは出来ない。

振り返ったアレンが見たのは、背中に無数の矢を受けたメルキエルがシエルの身体を包むようにして抱いて立っていた姿だった。

「無事だったか？ シエル」

メルキエルは震える声を絞り出すようにシエルに言った。

「はい……大丈夫です……メルキエルさんのお陰で……」

彼の腕の中でシエルは瞳に涙をためながら言う。

『それは良かった』と言う代わりに口からは大量の血が吹き出した。

「メルキエルさんっ！」

彼女の悲痛な声も、何処か遠い国の言葉のように希薄に聞こえた。

「私のせい……なんですよ……？」

涙声でシエルは彼に語りかける。

「メルキエルさん、いつも無理してました……私にも、分かりました」

「……ははっ……まさかお前からそんな言葉が……聞けるとは……思わなかった……な」

殆ど声ともつかぬ囁きでメルキエルは喋った。

「私がいけない子供だから……メルキエルさんは苦しんで……」

「……れは、ちが……う」

彼女を弱々しく抱き締める。

これがシエルとメルキエルの初めての『触れ合い』だった。

「俺が……愚かだっ……当然の……報い」

息が苦しそうだ。

「メルキエルさん、駄目です！ まだまだ私教えてもらって無いこと沢山あるんです！ だから教えてください！ これからもずっとずっと」

せきをきつたように喚きだすシエルの口をメルキエルは塞いでいた。

……自らの口で。

突然の事にシエルは目を見開く。

しかし彼女はすぐに目を閉じた。

「……」

既に彼は眠っていた。

「メルキエルさん……」

+++++

3

シエルはメルキエルのからだをそつと地面に横たえさせた。
両手を揃えて胸に乗せ、目を閉じさせる。

シエルは無言でうなだれていた。
表情は伺いしれない。

ただ頬を伝う一筋の涙だけが彼女の心情を察する唯一の手段だった。

「シエル……」

取り敢えず名前を呼んでみる。

「……アレンさん。私から離れないでください」

顔を上げた彼女は何処か決意めいた表情で言った。

「何だつて？」

聞き返しても返答は返ってこなかった。

代わりにぐつと手を握られた。

意志の強い彼女の手の力にアレンは面食らった。

「どうするつもりだよ？」

「……飛びます」

「えっ……飛ぶって？」

「しっかり掴まっていてください」

「ちょっと待って！周りにはっ」

「わかっています。だから時間が無いんです」

そう言い終えたシエルは、静かに目を閉じる。

すると今まで身体と同じくらいだった羽根が一気に倍々に、いやそれ以上に伸びていた。

しなやかに波立つ毛並みの羽根は最早天使のものではなかった。
周りの天使達はその光景に圧倒されている。

「さあ、掴まってください」

「掴まるって言っても……」

彼女に抱き付くしかないではないか。

しかし躊躇っている暇はない。

言われるがままに彼女の腕の中に身を滑り込ませる。

彼女が羽ばたき始めた。

大きな羽根が振り下ろされる度に、彼女の周りには突風が巻き起こった。

そして羽ばたきの間隔が最速になったとき、ついに彼女の足は地面から離れた。

それと同時に巻き起こっていた突風も消える。

強い風に二人を見失っていた弓兵はようやく二人の姿を捉えた。

「怯むなっ！射て落とせ！」

弓兵達は空、飛んでいるシエルに向かって矢を放つ。

放物線を描いて空を切る矢がシエル目掛けて飛ぶ。

「……っ！」

シエルは羽ばたくのを止めると瞬時に身体を反転させる。

飛んでくる矢にその白い翼を向けた。

まるで翼で身体を包むようにして。

雪の羽根が空に散った。

「……ああっ！」

一本。

二本。

三本。

さらに数多。

追い討ちをかけるように彼女の翼に矢が突き刺さる。

真っ白な翼に真っ赤な染みがさす。

「シエルっ！！」

「……大丈夫です」

肩を震わせながらシエルは言った。

「まだ生きている……？」

サフィエルはシエルの生命力に驚いていた。

殺されるか、自ら命を絶つ以外に死ぬ術を持たない天使にとって、最も脆弱な箇所が翼なのだ。

どんな天使でも翼を傷付けられれば命にかかわる。

半分人間の血が混じっていることがそれ程にも自分らの常識を逸脱しているという事なのか？

「……やはり危険な存在だ」

サフィエルは口の中で呟く。

「絶対に逃がすな！！射殺せっ！」

サフィエルの号令に弓兵達はあらん限りの矢をシエルに浴びせかけた。

羽ばたき、身を翻し、急旋回して矢をかわすシエル。

避けきれなかった矢は翼に新たな赤みを作る。

「も、もうやめろ……！見てられない！」

アレンはシエルに抱き留められながらその光景を見ていたが、遂に堪えきれなくなつて声をあげた。

「……大丈夫、です。もう少しで、着きます、から」

「着く？何処へ？」

「天国へ……です」

4

如月純は老人のアルバートとシエルが触れ合うのを、絵画展示場の入り口から見ていた。

「……あの老人も『歪み』に巻き込まれたシエルと干渉を持った人間か」

如月は今までに無い厳しい目つきで中の様子を見回しながら言う。

「しかしシエル……私の調合した生命毒を駆逐するとはな」
ぎりりと唇を噛む。

「だが次は逃がさん。今度こそ」

スーツの懷に手を入れる如月。

そこには黒光りする本物の拳銃があった。

「人間の技術に頼るのはしゃくだが仕方無い。力を使うのは最後の手段にせよとの命令だしな」

如月は強い足取りで展示場へと入っていった。

「もう思い残す事はないよシエル」

アルバートは涙を流しながら言った。

「アルバートさん、そんなこと言わないでください！」

シエルは彼の膝の手を強く握り言った。

「あなたは、私にとってかけがえのない大切な人です」

その言葉に今まで沈黙していた蓮也は身体を震わせた。

「大切な、……人？それじゃあシエルが探してた『大切な人』って
もしかして……」

しかし蓮也の言葉は途中で遮られた。

「それは違う」

聞き覚えのある声が響いた。

大勢の人だかりの間からゆっくりと姿を現したのは、如月だった。

「如月教授……？どうしてここに」

蓮也は自分で言っている事に気付いた。

「……そう言えばあなたはここの教授じゃなかったじゃないですか。
一体あなたは誰なんです？」

「教えてほしいか？……それはな」

言いながら懷に手を入れる如月。

「……えっ」

次の瞬間、彼女の手には拳銃が握られていた。
「こういうことだ」
彼女は発砲した。

5

如月の撃った銃弾は正確にシエルの心臓目掛けて飛来した。
しかし彼女には当たらなかった。
何故なら蓮也がシエルを突き飛ばしていたから。
実際に射線上にいたのは、蓮也だった。

「蓮也さんっ!!」
シエルは身を起こして叫んだ。
「ぐっ…」

見上げると、蓮也はまだ立っていた。
足元には血だまりがぽたぽたと滴っている。

「へっ…へへへ…少しはかっこいい事になっちまった…な」
じわりと赤く滲んでいくお腹を手で抑えながら震える声を絞り出す。
そのまま数秒の後、蓮也はふっと床に崩れ落ちる。
その顔は眠るように、笑うように穏やかであった。
それを見て周り人々は蜘蛛の子を散らすように逃げ惑う。
周囲の喧騒に苛立った如月は、天井に威嚇射撃を三発撃つと防火シャッターの動作スイッチを振り向きざまに撃った。

「死にたくなければ他の人間は散れっ!」
閉まり始める防火シャッターをくぐって美術展の客は走り去っていた。
完全

完全にシャッターが閉鎖されると、妙な静けさが多目的ホールを包

んだ。

シエルは倒れた蓮也を助け起こしていた。

「嫌です……蓮也さん」

だらりとした手を握るシエル。

「死なないで、くださあい……」

そのまま泣き崩れる。

「順番が変わってしまったか。まあいい」

如月は再び銃をシエルに向ける。

それを合図にするように、ゆっくりと立ち上がるシエル。

「あなたは……あなたは……」

握り締めた拳は震えていた。

声がわなないていた。

目を見開いて、シエルは声が潰れる程に叫んだ。

「許さない！！！」

銃口が火を噴いた。

しかし今度は当たらなかった。

いや、正確に言えば当てられなかった。

低い跳弾音と共に銃弾は明後日の方向に弾痕を作った。

「クロスダガー……？」

如月は呻いた。

シエルの手には十字架そっくりの短剣が二本、握られていた。

それらを胸の辺りで交差させ、銃弾を弾いたのだった。

「戦うのか？この私と」

如月は嘲笑した。

「あなただけは、許せません」

毅然とした顔つきでシエルは言い放った。

「そうか……では」

再びトリガーを引く。

しかし引き金は空を切った。

弾切れ。

六発撃ち尽くしたのだ。

「ちっ……」

素早く懷に手を入れ、カートリッジを再装填する。

そして再び狙いをつけた時、如月はある事に気付いた。

「……あの老いぼれは何処に行った？」

アルバートの姿が消えていた。

それも車椅子ごと。

「安全な場所に転移してもらいました。もうあなたの手には掛けさせません」

「……なる程な」

内心で如月は舌打ちした。

銃に弾を込めるあれだけの短い時間に人間一人を転移させるとは。怒りで本来の力を取り戻したか。

だとすると力の差は……。

「まずは小手調べだ」

撃鉄を起こす。

銃声が鳴いた。

その刹那前に、シエルが動く。

短剣を両手で前に構えたまま、ステップをして弾をかわす。

一瞬前にシエルのいた地面に着弾した。

足を狙われた。

シエルは悟った。

じわじわと傷つけていくつもりか。

そのまま翼を使って滞空する。

如月は立て続けに二発、発砲した。

一発はシエルの右肩へ。

それを身体を捻って左によけた彼女の左脇腹へまた一発。

避ける距離を算段に入れた銃撃だ。

最初の弾は捨て弾。

この時機では避けられまい。

しかし。

シエルは飛んでくる銃弾に全ての意識を集中させていた。

捻った身体をそのまま独楽のように回転させ、銃弾をけし跳ばした。

「ほう……」

如月は少し意外な顔をする。

「さすが小柄なだけあって体躯の機動性は高いな」

如月の言葉など意にも介さず、シエルは無言で突進する。

クロスダガーを瞬時に逆手に持ち替え、拳銃の射程外にまで間合いを侵略する。

近付いてくるシエルに狙いを構え直した時には鼻先が触れ合う程の距離。

首筋には冷たい感触。

銀色の十字架が首を拘束していた。

「……チエックメイトか」

如月は感情のこもっていない声で言った。

そのまま数秒の時間が流れる。

「どうした。殺らんのか？」

シエルはそのままの体勢で眉を寄せ、如月の顔をじつと見ている。いや、よく見れば如月の首にあてがわれた刃の間隔は徐々に狭められてはいた。

しかし首筋の皮膚に触れ、切り裂くか否かのぎりぎりのところでシエルは手を止めていた。

「わ、私は……くっ」

歯を食いしばり、目を閉じる。

観念したように手から力を抜く。

「怒りに身を任せても殺せない、か。はやりお前は根っからの人間だよ」

如月は心底嬉しそうに笑いながらシエルを突き飛ばすと、意気消沈した彼女に向かって残りの弾を全弾撃ち込む。

それを苦し紛れに弾いたシエルは、肩で息をしながら床に座り込む。
「さてそろそろ『人間ごっこ』はやめるとするか」
そう言うや否や、如月の背中には翼が伸びていた。
「改めて名乗ろう。私の名は力天使ラゼル」

6

持っていた銃を打ち捨てると、翼を大きく広げるラゼル。
舞い散った羽根の幾つかが彼女の手には落ちると、銀色に輝く巨大な銃に変わる。

「さっきのようにはいかんぞ」
不敵に笑いながらシエルに狙いをつける。
来る、と思った時には身体が動いていた。
自分でも信じられないような速度で地面を蹴って転がる。
完全に避けたとシエルは思った。
しかし。

自慢の白金の髪のひとつさが、はらりと床に落ちた。

「よく避けたな」

また撃つ。

今度は撃つ前に身体を反応させた。

シエルのすぐそばを走っていった弾は、展示してあった絵画に綺麗な風穴を空けた。

彼女の真つ白なワンピースの一片が裂ける。

「いつまで続くかな」

無音で空気を切り裂きながら銃弾は恐るべき速さでシエルを追い詰めていく。

ぎりぎりのところで避けるのだが、その度に彼女の身体は傷ついていく。

休みの無い連射。

それは連射といって通常人が思い浮かべる速度の比ではなかった。

どれだけ動いただろうか。

疲労は限界に達していた。

跪いて短い息をするシエルの周りには、銃弾を避けた際に散った自分の羽根が散らばっていた。

「そろそろ疲れたか？」

弾を込める必要の無い銃のグリップを弄びながらラゼルは言う。

「私を殺せないお前は私の攻撃を避けるしかない。だが避けて、それからどうする？何もできないだろう」

中指に引っ掛けてくるくると銃身を回転させる。

「もう疲れただろう？いい加減休めよ、シエル」

ぴたりと狙いをシエルの眉間につける。

彼女の顔を見た。

身体のあちこちからは血が出ている。

着ていた白のワンピースはぼろぼろ。

しかしそれでもしっかりと両手に握られたクロスダガー。

何よりこちらをきつと見据える澄んだ青い瞳は、まだ死んではいない。

自然と唇の端がつり上がる。

「ふふふっ……一つ教えてやろうか？」

「……？」

シエルは膝をついたまま荒い息を繰り返すだけだ。

「お前の母親の事だ。まあそう言っても、お前自身ではないがな」
彼女の顔色が変わる。

「お母……さん？」

「……女神だった。たいそう美しいな。当時、天界を統括していた

二人の女神の片割れさ。愛を司る女神だと言ったな。だがな、ある日人間の男にうつつを抜かし、下界に堕ちた。怒ったもう一方の女神はお前の母親を赤子の姿に変え、力を奪った。しかし下界で成長したそいつは、新しい人間の男を見つけて恋に落ちた。全く呆れる女神様だ。それだけのために天界と下界の間に争いが起き、天柱は歪み、全てが狂い始めた。天界の安寧を自分の愛という理由だけでぶち壊したんだあいつは」

ラゼルは呪詛のように怨みのこもった口調で吐き捨てるように語る。そして更に。

「お前の母親は女神でありながら女神であることを止め、人間の男なぞに情欲を求めた最低の女だ」

「……なっ」

シエルの中で何かが音をたてて壊れた。

「そんな母親と薄汚い人間の父親から生まれたお前は天界で最も忌むべき存在。ましてやそいつが墮天した時に生じた『歪み』ではないお前は存在理由自体皆無だ！」

声高らかに、告発するように言い放った。

シエルは見ていた。

この世の全てを見ていた。

からっぽの心で。

何も感じなかった。

何も。

それは嵐の前の静けさのよう。

そしてゆっくりと湧き上がってきたのは、制御できない負の心だった。

「……………わあああああつ！！！！！」

天を仰ぎ、絶叫する。

髪の毛を振り乱し、全身を震わせて泣き叫ぶその姿は、理性の枷が外れた本能そのものだった。

「……本性をあらわしたか。理性を失う様はまさに薄汚い人間そのものだ。どうしようもなく、醜い」

ラゼルは無機質な声で言った。

「お母さんを侮辱した……！あなただけは、……絶対許さない！！」
かつと見開かれた目は血走っていた。

食いしばった唇からは血が流れていた。

かつての彼女の天真爛漫な愛らしい外見は、欠片も残ってはいなかった。

ひゅーひゅーと不自然な呼吸音をたてながらシエルは突進した。

「やあああああつ！！！」

その衝撃に耐えられず足からは血がはねる。

撃ち出された銃弾を避けることはしない。

2つあったクロスダガーを、けん玉のように縦に突き刺し並べる。
すると一つの大きな十字架に変わった。

身体の大きさを裕に超えるそれを軽々と持ち上げる。

シエルはそれを目前で高速回転させ、全ての弾を弾き飛ばす。

ラゼルの目前に躍り出たシエルは、十字架の鍵型になっている部分を先端にして振り下ろす。

「せやあつ！」

殺意に彩られた渾身の一撃がラゼルにあたった。

「ぐ……ぬう」

銀色の逆十字がラゼルの肩を切り裂いた。

墮落の象徴である逆十字。

血しぶきがかかった銀は艶めかしく、赤く煌めいていた。

そのまま二人の時間は静止する。

「……まだだ。まだ終わっていない！」

手がぶるぶると震えている。

十字架を握り締める指の色は青白く変色していた。

「まだ終わっていない……！」

ラゼルは肩に突き刺さった十字架を掴むと、ゆっくりと引き抜いていく。

ぎりぎりと力を入れていた腕が一気に弛緩するのがわかった。

肉をより分ける嫌な感触を残しながら十字架はラゼルの肩を離れる。

「はぐっ……」

ゆらりと身体をふらつかせながらも、うなだれているシエルへ銃口を向けた。

真つ赤な血に染まった十字架を床に引き連れたまま、シエルはひく、ひくと肩を震わせていた。

返り血で赤銀色となった前髪に隠れ、顔は見えない。

しかし彼女の唇がひきつるように歪むのが見えた。

片手で十字架を振るう。

半円を描くように振り上げて中空を舞ったかと思うと、元の姿勢に戻った時には、彼女の両手にクロスダガーが握られていた。

満身創痍だった。

2つの息がこだまするように辺りに響き渡る。

「……何故理解しようとしない！お前は母親と同じ過ちを冒していることに！」

「私は、私は違う！」

「何が違う？同じだ！お前の自分勝手な行動でどれだけの混乱と犠牲が出たか！」

「……同じなのかもしれない。

彼女はそう思っていた。

……しかし。

先程垣間見た事。

今、起こっている事。

全てを俯瞰して見て知った事。

幻かもしれない。

夢かもしれない。

しかし、そう思ってみても、見えない何かに押し潰されそうになっている自分がいる。

そうして、抱えた問題を目前に立ちはだかる敵へとすり替えている。いや、具体的なモノにそれを押し付けなければ、本当にどうにかなくなってしまうそうだったのだ。

どうしても認めたくなかった。

それを認めれば、今まで築いてきた全てが崩れてしまいそうで。だから、自分は断ち切るのだ。

真実を見るのは嫌だった。

「もう何も聞かない！次であなたを……！」

シエルは視点の定まっていない瞳でラゼルを見据える。

両手に握ったクロスダガーを突き出して突進した。

銃弾が身体をかすめる。

弾が身体を貫いたような気がした。

もう防御はしない。

これが最後だから。

かすんで殆ど役に立たない目を閉じ、一気に2つの十字架を突き立てた。

「……………」

身体が止まった。

これ以上は刺さらない。

手応えはあった。

……やったか。

シエルは目を開いた。

「よお、シエル」

顔を上げたシエルが見たのは、慣れ親しんだ人の笑顔だった。

「れ、……………蓮也……………さん?! どう……………してっ……………?」

あらんばかりに目を見開くシエル。

彼女はぱくぱくと口を動かすが、その後に続く言葉は出てこない。

しかし先程までの狂気に彩られていた表情は陰を潜め、かつての彼女の顔がそこにはあった。

「……………やっといつものシエルに戻ってくれたな。……………女の子がこんな事しちゃいけないぜ?」

彼の顔からは血の気がひいていた。

それなのに、蓮也は驚く程穏やかな口調で言い聞かせるように言った。

いつものように彼女に『ご教授』するように。

絶望的な思いで自分の両手を見る。

手に握ったクロスダガーは、蓮也の胸に深々と突き刺さっていた。

這うように広がった赤い波紋は、やがてシエルの両手に滴り落ちていく。

声が、出ない。

自分は一体何をしようとしたんだろう。

こんな事をしたかったはずかない。

……………どうしてこんな。

「……………そんな顔しないでくれ。また、笑ってくれよ。俺、お前の笑ってる顔、好きだから、よ」

蓮也は苦しそくに言葉をつなぐ。

「や……………んなの……………や」

柄から手を離す。

血みどろの両手で頭をかきむしる。

蓮也は支えを失って膝をつく。

「元の、可愛い、シエル……………見たっ
倒れる。」

もう、動かなかった。

彼女は絶叫する。

自らの手で最後の命を摘み取ってしまったという事実。
結局、自分が断ち切りたかったのは何だったのか。

もう何も考えられない。

言いようのない苛立ちと哀咽、そして畏怖の念が思考力を奪っていく。

もう何も残っていなかった。

愛しい人を刺した手の感触も。

撃ち抜かれた身体の痛みも。

生々しい血の匂いも。

心の、痛みさえも……。

彼の言葉を思い出す。

「笑ってくれ」

笑う。

笑えば良い。

笑って笑顔を見せて、元通り。

最初からこうすれば良かったのだ。

認めれば、良かったのだ。

自分がただの「歪み」だということを。

自分の捜しているあの人は、きっと見付からない。

でも、もうそれで良い。

だって今は……。

安らかな死に顔の蓮也を見た。

そこで、シエルは思考するのをやめた。そして笑った。

全てに対して。

その時、『歪み』は修正された。

紙芝居を逆に見るように、過去の出来事の「コマーコマ」が、浮かび上がっては消えていく。

全部が全部、大切なもの。

手で掴もうとしても、すり抜けていくそれは、シエルの墮天してか

ら今までの記憶だった。

+++++

8

「……」

シエルは無言で自分の胸を触っていた。
ずきりと、痛む。

何だろう、今の感覚は。

何かとても大切な、自分の一部分を失ったような喪失感。
それと同時に、自分の中にあった小さな隙間が埋まったような充足感。

そのどちらにも、それは似ていた。
相反する2つの感覚が彼女の胸をうつ。

手を探らせても、その理由は見付かる筈もなく。
言い様のないもどかしさに、いつの間にか胸元の布地をくしゃくしゃにして掴んでいた。

「……どうかしたのかい？」

肩に掴まっていたアレンは、彼女の仕草を気にかけた。

「いえ、なんでもありません」

そう言いながら、翼に力を込めて空を上昇する。

既に騎士達の矢が届かない高度まで来たので、射られることはもうなかった。

しかし羽ばたく度に翼には激痛が走るのは変わらない。

刺さったままだった矢が羽ばたいた拍子に抜け落ちたりもする。

もうあまり長くは飛べない。

でももう下へは降りれない。

もっともっと上へ。

天界よりも高みにある天上へ。

彼女はそこに行こうとしていた。

そこは余りに高すぎて、天使の翼では幾ら羽ばたいても辿り着けない場所。

神の住まう場所、といわれている。

そこに何かがあるか詳しくは知らない。

でも、居場所を失った自分が目指せる場所は、もうそこしか残っていないような気がした。

「もう少し……」

シエルは眉をひそめ、齒を食いしばり痛みに耐える。

方角も分からない真っ白な霧の中でシエルはただひたすら上を目指して飛翔していた。

「……あれは？」

不意にアレンが声をあげた。

霧状の雲の端から見え隠れする大樹。

青々と茂った葉。

幾重にも重なって大きく広がった枝。

それは天上の象徴たる木だった。

「世界樹……着いた……」

シエルは安堵の息を洩らした。

やがて近付くにつれて世界樹だけでなく、それが根を張る巨大な大陸をも姿を現した。

「世界樹って神話に出てくるあの世界樹の事かい？」

手近な着地点を探すためにシエルは翼を動かさずに滑空する。

「はい、そうです。全ての命の源と云われているあの世界樹そのものです」

やがて二人は世界樹の根元の適当な場所に降り立った。

「……あつ、足元に気を付けて下さい」

「うん」

見ると、土色をした硬く瑞々しい太い根が足の下を走っていた。

世界樹の根は大陸全てを包み込むようにして張り巡らされていたのだ。

それはまるで大陸に木が生えているというよりも、木が根を使って大陸を掴んでいるようにも見える。

アレンを地面に降ろすと、シエルはがっくりと膝をついた。

「大丈夫か！シエル」

彼女の肩を支えてみるも、その肩は恐ろしい程に震えていた。

「寒い……」

目を伏せ、唇を震わせる彼女。

言われてみてアレンも自分を包む外気の冷たさに気付いた。

自分もシエルも、お世辞にも厚着とは言えない。

ここが地上からどれだけ高い場所にあるのかは知らないが、かなり気温が低くなる高度に来ている事は容易に予想できた。

「シエル……」

彼女を抱き締める。

少しでも彼女を暖めることができれば。

目を閉じて動きを止める。

背中に回した手には血に濡れた翼が触れた。

「アレンさん……ありがとうございます」

ゆっくりと溜め息を繰り返しながら、彼女はアレンの胸に顔を沈み込ませて目を閉じた。

「……でももう大丈夫です」

暫くして身体を離すとシエルは気丈に立ち上がり、しっかりとした足取りで歩き出した。

ごつごつした根の上をシエルは裸足で踏み越えていく。

「シ、シエル！」

アレンは慌てて後を追う。

「待てよ！その身体じゃ無茶だ」

彼女の歩いた後にはぽたぽたと血の波紋が滴っていた。

背中への傷は、まだ血が止まっていない。

「大丈夫ですよ。もうすぐですから」

言葉とは裏腹に彼女の声は芳しくない。

「……シエル、ちよつと」

「はい？……きゃっ！」

呼び止められて彼女が受け答えるよりも速く、アレンは彼女を抱き上げていた。

「あ、アレンさん……」

「無理しちゃ駄目だ」

両手で彼女の肩口と膝を支える形で持ち上げる、いわゆるお姫様抱っこという奴だ。

「……さすがにここの地形まで分からないからシエル、道案内してくれよ」

「……はい」

彼女は少しはにかみながら呟いた。

アレンがシエルに行き先を訊くことはなかった。

彼はただ彼女の指示通りの道を歩き続ける。

それで良い。

それだけで良い。

それだけ心の中で呟くとアレンはしっかりと彼女の肩を抱えて歩いていった。

傷ついた翼には触れないように細心の注意を払いながら。

「……あ、あれです」

アレンの腕の中でせわしなく視界をさまよわせていた彼女は、前方を指差し小さく言った。

指差した方向を見ると、世界樹を背にするように、深い霧に包まれた巨大な聖堂のような建物があった。

「あの中に……入ってください」

＋＋＋＋＋

9

聖堂の中は寒かった。

それは外の比ではない。

それもその筈、聖堂の内部は全てが凍てついており、天井からは氷柱が垂れ下がっていたのだ。

「これは……」

アレンはシエルを抱いたまま辺りを見回して声をあげた。

彼の腕の中にいるシエルは白い息を吐きながら震えている。

「そ、そのまま奥に進んでください……祭壇があるはずです。そこに私を」

その唇は紫色に変色し、今にも凍えてしまいそうだった。

大丈夫だろうか。

アレンは彼女の様子を見ながらそんな事を思ったが、口には出さなかった。

歩を進めていくうちに、身体は芯から冷え込んでくる。

床に敷かれた絨毯は霜で色が判らなくなっていた。

よくよく見れば建物内にも世界樹の枝が侵入し至る所に巻き付いていたが、その殆どが氷の中か寒さによってぼろぼろになっているかのどちらかであった。

とすればこの冷気は世界樹の仕業ではないのか。

アレンはぼんやりと考えをめぐらせた。

真っ白な霧に阻まれて見えなかった祭壇が次第に姿をあらわしてくる。

それと同時に、アレンは信じられないものを見ていた。
氷付けになった天使だ。

祭壇の上に祭られた十字架を包むように、一際大きな氷の塊の中に彼女は閉じ込められていた。

その大きな十字架に張り付けられたまま、氷の中で目を閉じている。背中の翼には痛々しい杭が刺さったままだ。

しかしそれとは裏腹にその天使の顔は、まるで眠っているかのように穏やかである。

そして澄んだ氷から透かして見た彼女の顔は、どこことなくシエルに似ている。

そしてその後に聞く言葉でアレンは納得した。

「お母さん……」

シエルは眉をひそめて顔をそむけた。

だがすぐにまた目を戻し、アレンにおろしてくださいとせがんだ。よろよと自分の足で立ったシエルは分厚い氷に手を触れさせる。目を閉じて語り掛けるように呟いた。

「お母さんは、どうして下界に堕ちたの？……やっぱり私と同じ気持ちなの？」

氷を通して物言わぬ母親と会話しているようだった。

アレンはその様子を何も言わずに見守った。

「……そうなんだ。お母さん、そんなことが……」

一通りそんなやり取りの後、シエルはアレンに向き直った。

「この人が、私の母です。名前はリベルタ。昔天界を統括していた二人の女神の内の一人」

シエルは抑揚の無い言葉で告げた。

「……生きているの？」

「はい。死よりも深い眠りにっていますが」

「助けられない？」

「……無理みたいです」

沈黙がおちた。

シエルはここに母親がいることを知っていたのだろうか？

そして助けることができないことも。

会ったばかりの頃のように彼女が何を考えているのか、アレンにはわからなくなっていた。

「シエル、どうするんだい？」

「……お母さんから聞きました。私の探していた“大切な人”は、……私のお父さんでした」

「……えっ」

「私が天界で墮天を決心した時、確かに私は見ました。あの湖畔で釣りをするあの人を」

しみじみと昔を思い出すようにシエルは続ける。

「あの時、私は時間を超えて昔の情景を見ていたのかもしれない」
「じゃあ……」

「はい。お父さんは……もういません。私は、お母さんと同じ人を好きになっちゃったみたいです。不毛で、とても皮肉です」

そう言っただけで屈託無く微笑むシエル。
そしてアレンに手を伸ばす。

「でも、そのお陰で、それで下界に堕ちたから、私は出会えました」
真つ白な手がアレンの頬に触れる。

「アレンさんや、アルバートさん、それに蓮也さんに」
皆が皆、愛しい人の名だ。

「同じ目を持つ三人も出会えて、私は幸せです」
につこりと微笑んだ。

「“大切な人”以外何もいらない。全てを失っても構わない。そう思っていた私には勿体無すぎる、幸せな時間でした」
首に巻き付く細い腕。

俯いてシエルは言った。

「でもちよつと調子に乗りすぎました。色んな物を壊して、乱して、人の運命まで変えてしまったから。もうやめなきゃ」

「シエル、君はそれで良いのか？」

アレンはたまらなくなつて叫んだ。

「正直、良くはありません。我が儘ですね、私って……でも駄目なんです」

「残された人は、どうなる……？」

「……それを言われると、つらいです。皆私との事は無かつた……ことにつ……」

言葉の最後は涙に埋もれた。

頬を伝う涙を拭うこともせずに、シエルは泣きながら笑つた。

「さようならです、アレンさん。あなたを下界に送り返します。今まで何も訊かずに一緒に来てくれて、ありがとうございました」
床には血と涙が混じつた朱色の水が滴り落ちていく。

「待ってくれ！……君は？」

「私は、きつともう……殺されます。追つ手もすぐに来ますから。

でも最期にここに来て良かったです。決心がつかしましたから。だつてお母さんに、私は……」

「シエルっ！！」

8th Wing "A nasty angel must laugh at

ついに次話で最終話です。

期間が空いてしまつてすいませんでした。

L a s t W i n g “ T h e a n g e l f e l l g r o u n d . ”

（前書）

不慮の事故によって最終話の原稿を消失してしまいました。納得のおかない終わり方ですが完結していないのは気持ち悪いのでこれで完結とします。

+++++

∞

シエルはとても澄み切った気持ちだった。

これ以上にないくらいに。

もう思い残すことはない。

三人のあの人達にもお別れを言うことが出来た。

だからもう何も思い残すことはない。

思い残すことはないはずなのに。

「ようやく観念したようだな。シエル」

サフィエルは既に大勢の天騎士を引き連れて大聖堂の中、シエルを取り囲んでいた。

シエルにはもはや逃げ道はどこにもない。

「初めから、逃げようだなんて、思ってます」

シエルは顔を上げて毅然と言い放つ。

「もうお前とくだらん問答をする時間は残ってなどいないのだ。手早く済まさせてもらうぞ」

サフィエルは手を上げる。

周りの天騎士達が一斉に剣の切っ先をシエルに突きつけた。

シエルはそんな中、氷付けになったままの自分の愛しい母親の元へ歩いていく。

身体を擦れる剣に血を流しながらも気にせず。

「お母さん・・・私は後悔していないから。お母さんもそうよね？」

シエルは自ら目を閉じる。

もう永遠に開くことのないその蒼い瞳を。

他人の手によって閉じさせられる前に、自分から断ち切った。

「蓮也さん、アルバートさん、アレンさん・・・ありがとう」

「あれ・・・俺ってなにしてたんだっけ」

公園の遊具の天辺で携帯電話にてゲームしていた有栖川蓮也は、ふと何かを忘れているような気がして顔を上げた。

何かおぼろげなイメージが頭の中に浮かんでいるのだが、それが何なのかはわからない。

わからないが・・・何故だか暖かい気持ちに包まれていた。

深いもやがかかったその先に見え隠れするあの姿。

蓮也は夜空を見上げ、忘れてしまった彼女の面影を想った。

「シエル・・・」

一筋の光がアレンの額に落ち、そしてそれが消えてなくなったとき、彼の中にいきづいていた大きな何かが消えうせた。

空を見上げ、流した理由すら分からない涙を拭いながらアレンは呻いた。

彼がいつのまにか握り締めていた帽子にはあの白い小さな羽根がひっそりと刺さっていた。

その羽根が煌いた時、アレンの中に曖昧な何かが蘇ってきた。

それは欠けていた大きな、大きな。

彼は一言、その名を呼んでみた。

「シエル・・・」

澄んだ湖で釣りをする少年がいた。

その傍らには白金の髪を持つ美しい少女。

少年と少女は互いに笑いあい、とても楽しそうに談笑に耽っていた。

「・・・ねえ。今私たち、二人つきりよねえ？」

瑠璃色の瞳を輝かせ、美しい少女は少年を見る。

「んあ、そうだな。それがどうかしたか？」

釣り糸をびくびくと弄りながら少年は聞き返す。

「うん・・・なんでもないんだけどね」

少年の隣にぴったりくっついて座ってきた彼女は、膝の上で指を組んだり解いたり、を繰り返している。

「・・・？」

反応に困った少年が少女の横顔を眺めていると、それは突然襲ってきた。

手の中にあつた釣竿が暴れだす。

「わわっ！」

掌から滑り落ちそうになった釣竿を慌てて握りなおそうとしたその時だった。

柔らかい感触が口元にある。

驚いて目を見開くと、隣にいたはずの少女が自分に覆いかぶさっている。

「・・・ん」

ほんの数秒。

ほんの数秒の出来事であつたはずだが、それは永遠のような時間。ようやく彼女が身を起こした時には手に握っていた釣竿は湖の何処へ流れ去っていったようだ。

いや、そんな事はまったくどうでもよかった。

呆けたように、自分の口元に指を這わせる。

「あーあ！釣竿流されちゃったね」

少女は幾分大きな声でそう言いながら立ち上がる。

「しょうがないからもう帰ろっか？」

「え・・・あ、うん」

呆氣にとられる少年。

果たして今のは夢だったのか。

夢だったのかもしれない。

そう、夢を見ていたのだ。

こんな風に、夢を。

．．．．．

．．．．．

．．．．．

全てのゆがみは修正され、全ての事象はあるべき姿へ戻る。

彼女が引き起こした事は全てが無かったことにされ、その存在すら無き物となり。

ただ一遍の淡い想いすら残すことなく。

そう、これは地に堕ちた天使の物語である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0435a/>

The Angel Fell Ground

2010年10月21日21時34分発行